

A night sky with a full moon and a building silhouette. The moon is a bright yellow circle in the upper right. The building is a dark silhouette on the left and bottom. The sky is a deep blue.

月の視線

~Eyes of the Moon~

(一)

もうすぐ六月だというのに、頬を撫でてくる風はやけに冷たかった。

まるで僕の心を写しているようだ、ひとり笑う。

――一体いつになったら、解決するのかなあ。

夜の公園、いちばん高い場所であるジャングルジムの上に寝そべり、僕は空を見あげた。

今夜は満月だ。大きな月が我がもの顔で夜空に陣取っている。

この街ではなぜか、他の街よりも月が大きく見えるのだという。『月近市(げっきんし)』という地名はそこからつけられたという話を、小さい頃に聞かされた記憶がある。

おかげで、視力の悪い僕がこうして眼鏡を外した状態でも、丸い月はよく見えた。弱い光の星がひとつも見えない分、僕にとっては暗闇を照らす唯一の存在だ。

だからこそ僕は、こうして月を見あげるのが好きだった。

たとえ雲に覆い隠されたとしても、隙間からなんとか顔を出そうと頑張る月の姿は健気でかわいし、頑張ったあとの月はいつもよりとりわけきれいに見えた。

そんな姿を見るたびに、僕も頑張りたいと思う。……思っても行動に移せないのは、僕に意気地がないからだ。

――一体いつになったら……言えるんだろ。

僕の両親は、近々離婚予定だ。

それはとても残念なことだけど、きっと当人たちにしかわからない事情があって、仕方のないことなんだろうと、僕は割り切っている。むしろ、高校二年生というこの時期に言い出してもらって、ありがたいくらいだ。中学以前では落ちついて受け入れられなかったかもしれないし、受験前では結果に影響が出てしまったかもしれない。

感謝しなければならない。そう思う。ここまで育ててもらったことを。

僕は父さんも母さんも普通に好きだったから、これからも好きでありつづけるために、理由は訊かずに別れを受け入れた。

だけど……今の両親は、嫌いだ。

世間体を気にしてまだ一緒に暮らしてはいるものの、顔を合わせると毎日ケンカばかり。僕が夜に家を抜け出すことが多いのは、その様子を見たくなかったからだった。友人と呼べる相手をつくっていない僕には他にに行ける場所などなく、こうして公園にやってきては月を眺めて時間をやり過ごす。

なぜなら、ケンカの原因は『僕』だから。親戚にだって、頼ることはできない。

ふたりは、どちらが僕を引き取るのかで揉めていた。嬉しいことに、どちらも僕を「必要だ」と言ってくれているんだ。もし逆だったら「ひとりで暮らす！」と家を出るところだけど、そうじゃないからよけいに悩んでしまう。

――僕はどちらを選べばいい？

両方同じくらい好きだから、選べない。

どちらも十分に自立できる経済力があることを知っているからこそ、なにで決めればいいのか

がわからなかった。

また、ふたりもそんな僕に気づいているのか、決して訊いてこないんだ。

「どちらについてくる？」

そう口にしてしまったら、夫婦関係だけでなく親子関係までもがギクシャクしてしまうことを、恐れているんだろう。

そしていちばん最悪なのは、それをまったく否定できない、僕自身――。

僕はもう一度、やわらかな光でこの身を包んでくれる満月に目を向けて、考える。

僕がいなかったら、きっと誰も悩まないのに。

――そうだ、いっそ月に食べられてしまえばいいんだ。

そのときふと脳裏に思い浮かんだのは、この月近市に古くから伝わる『月近小唄』の一節だった。子どもの頃から怪談のように聞かされてきた、『月に手を伸ばしてはいけない』という内容の唄。今風に言えば、それも都市伝説のひとつなんだろう。

手を伸ばしたら、『なに』を、食べられる？

信じていないくせに、やっぱりなんだか気持ち悪くて、今まで実行したことはなかった。

でも、今日の僕は少し違っていた。

僕を見ている月があまりにもきれいだったから、思いきり気を許してしまったんだ。

月の中心に、ゆっくりと右手を伸ばしてゆく。

僕の手シルエットが、丸いだけだった月の形を変えてゆく。

情けないことに、微かに震えている指先を見て、笑ったのは僕だろうか。

それとも、月なんだろうか。

「――え……っ？」

僕がまばたきをした一瞬に、月は、もとの形に戻っていた。もとの、丸い形に。

――なんで!?

僕はまだ、手を伸ばしているはずなのに。

右の手を、伸ばしているつもりなのに！

啞然としながらも、視線で腕があったところをたどっていくと、肩だけが残っていた。

そこから先は、なかった。

「わあああああっ!？」

悲鳴をあげて飛び起きた僕は、混乱しながらもすぐさま自分の右腕を確認する。

――あ、あった……！

夜に失われたはずの腕は、手は、きちんとそこに存在していた。

念のため、ベッド脇のサイドボードに置いてある眼鏡に手を伸ばし、かけてからもう一度確認してみる。十六年間つきあっている腕だ、手の大きさもほくろの位置も、見間違えるはずもなく自分のものだった。

やっとひとつ息をつき、我に返る僕。

――さっきのは夢だったんだ、あたりまえじゃないか。

頭ではそう理解しているのに、心臓はまだ認めたくないのか内側から強く叩いてくる。

それを落ちつかせようと胸に手をあてたら、ぐっしょりと濡れている寝間着に気づいた。こんなにも寝汗（冷や汗？）をかいてしまうほど、臨場感のある夢だったんだ。

「ちょっと優、どうしたのっ？」

コンコンとドアがノックされるのと同時に、廊下のほうから母さんの声がした。僕の悲鳴に驚いて、様子を見にきてくれたんだろう。

僕はよけいな心配をさせないようにと、ベッドから起きあがりドアへと向かう。そのあいだにも震えてしまう脚を、なんとかこらえて。

辿り着いたドアを開けると、やっぱり不安そうな表情をした――少しやつれた母さんが立っていた。母さんも起きたばかりなのか、すっぴんなので増えたシワがよく見える。

「驚かせてごめん。変な夢を見ちゃって……」

「夢？ なんだ、ゴキブリでも出たのかと思ったじゃない」

なるほど、虫全般が苦手な母さんは、僕よりもそっちのほうが不安だったらしい。この月近市では、よほど不潔にしていない限り、飲食店くらいにしか出ないというのに。

とは言っても、不安にさせたのは僕なんだから、自嘲気味に笑いながら応える。

「違うよ。僕は毎日部屋の掃除をしてるし」

すると母さんも、勘違いしたことが恥ずかしくなったのか、ごまかすように笑って告げた。

「ならいいんだけど。――あ、そうだ。それよりあなた、昨日の夜はいつ帰ってきたの？」

やっとおさまってきた僕の心臓を、再び強く突いてくる問いを。

「えっ？ い、いつって……」

そもそも僕は、昨夜外出していたんだろうか？ あの夢が本当に『夢』なら、この部屋から出ていない可能性だってあるんだ。

「あなたが出ていったのはわかっていたから、帰ってくるのをずっと待っていたのよ？ それなのに、いつの間にか部屋のなかにいるし」

「えっ……」

僕が考えた可能性を、母さんがすぐに否定する。

——おかしい……おかしいぞ!? ちゃんとした記憶がない!

昨日の記憶をまさぐっても、夜のところがはっきりとしなかった。

また震え出した脚を、ごまかすように居住まいを正す。

「ご、ごめん! 脅かそうと思ってこっそり入ったんだけど、そのまま寝ちゃって……」

そんな苦しい言いわけをしたあと、「着替えるから」と強引にドアを閉めた。これ以上顔をつきあわせていたら、今度こそ僕のことによって不安にさせてしまうかもしれないと思ったんだ。

——落ちつけ……落ちつけ僕!

閉めたドアに背を預け、その場に座りこむ。それからゆっくりと、自分の部屋のなかを見まわした。

小学生の頃から使っている学習机もベッドも、漫画本がびっしりと詰まった本棚も、昨日のままにも変わっていない。壁に貼ってある、好きなキャラクターのポスターだって一部が破れたまま。あたりまえだ。違和感があるのはどう考えても僕の『脳内』で、他におかしいものなどあるはずもない。これは現実で、漫画の世界ではないんだから。

どうにか自分を説得し、やっと立ちあがった。僕は念のため、机の上のスタンドミラーを手に取り、自分の顔も確認してみる。

そこにはやっぱり、いつもと変わらない冴えない顔があった。眼鏡の奥の二重はよく、「死んだ魚のようだ」とありきたりな表現をされる。低い鼻に小さな唇は、丸顔とあいまって女っぽく見えるからあまり好きじゃなかった。実際小さい頃は頻繁に女と間違えられていた。あとは、「女々しい性格」だとか「ヘタレ」だとか、よく言われるフレーズだ。

どれも否定できない僕は、それらを全部受け入れてやり過ごしてきた。多分これからも、そうやって生きていくんだと思う。よほどのきっかけがない限りは——

「優一、朝ごはんできたわよ～」

「あっ、い、今行く!」

応えたあとで、まだ全然着替えていないことを思い出し、急いで高校の制服である紺色のブレザーを手取る。自分の顔を見て落ちこんだせいか、あんなにも速かった鼓動はいつもの速度に戻っていた。……それはそれで、情けない話だけど。

朝食をとったあとは、さっさと家を出た。いつもなら少しくつろぎ、居間でテレビを観たりするんだけど、残念ながら今日はそんな心の余裕がない。黙って座っていたら、よけいなことばかり考えてしまいそうだった。それがわかっていたから、歩くことで少しでも早く身体を動かしたかった。

もともと、僕の家から月近高校までは、徒歩でたった十分間の距離。教室に着いたら着いたで、ずっと座っていることになるんだから、結局は同じことなのかもしれない。

——やっぱり家で落ちついてたほうがよかったかな……。

半分後悔しながらも、おそろおそろ二年一組の教室へと入っていった。

すると、

「——お! なあ月島っ、聞いたか? 今日うちのクラスに転校生が来るんだってよー」

隣の席の香月真喜(こうづき・まさき)くんが、珍しく僕に声をかけてくる。いかにもスポーツマ

ンといった感じの髪型と性格をしている彼は、いつもなら一切話しかけてくることはない。

当然僕は戸惑ってしまったけど、教室内を軽く見まわして、気づいた。まだほとんど人が来ていないんだ。それでも誰かに話したくて仕方がなくて、僕にも教えてくれたんだろう。

残念ながら、僕じゃあやっぱり話相手にはなれないけど。

過去のトラウマが原因で、普段からなるべくクラスメイトたちと距離をおくようにしていた僕は、わざと素っ気なく応えてやる。

「……そう」

「って、感想それだけ？ つまんないなあ。——あっ、観月(みづき)！ オマエ知ってるか〜？」

そんな僕の目論見は成功し、香月くんは他の生徒を見つけると駆け寄っていった。

僕はその背中にひとつ苦笑を送ってから、自分の席に着く。

——話しかけられたのは驚いたけど、助かったな。

なぜなら、その後僕の頭のなかを占めたのは、香月くんから聞いた転校生のことばかりだったからだ。おかげで、昨夜から今朝にかけての妙な違和感を思い出すことはなかった。

どんな子が来るんだろうといろんな妄想をしているうちに、朝のショート・ホームルームの時間になり、チャイムとともに担任の寒月(かんげつ)先生が教室に入ってくる。そしてそのすぐ後ろを、まっすぐに伸びた長い黒髪が良く似合う、色白の美少女がついてきた。

教室全体が大きくどよめいたのも、無理はない。

黒目がちな瞳は、まるで漫画の世界からそのまま抜け出してきたかのように大きく、かわいさを演出していた。逆に、形のいい鼻と小さくて厚い唇は、瞳の幼い印象を打ち消すように大人びて見える。そのアンバランスさが実に魅力的で、みんなと同じブレザーを身につけているはずなのに、彼女の姿はまるで『衣装』を纏っているかのようだった。それほどに、『田舎離れ』した美しさだったんだ。

みんなの視線を一身に受けて教台の脇に立った彼女は、一度教室内をぐるり見渡したあと、少し照れたように小さく頭をさげた。それから寒月先生に促され、黒板に自らの名前を書く。『阿武朝純(あぶ・あずみ)』と、ご丁寧に振り仮名まで振った。

そこまでは、よかったんだけど——

「あのっ、わたし、なるべく早くみんなと仲良くなりたくないので、これからひとりずつ握手していきますね！ そのときに名前とか教えてくださいっ」

次の瞬間、片手をあげてそう宣言するやいなや、勝手に教室内をまわりはじめた。

「ちょ、ちょっと、阿武さん!？」

思いきり戸惑っている寒月先生を豪快に無視して、彼女は勝手気ままに振る舞う。

他のクラスメイトたちは、彼女が美人だからか男子も女子のノリノリで応対していたけど、僕は完全に寒月先生側だった。完全に、アウェイ状態。

——な、なんなんだ、この子……。美人だけどなんか変じゃないかっ？

失礼ながら大層引いてしまった僕は、この場から逃げ出したいとさえ思った。だってこのまあいけば、僕も確実に握手を求められるだろう。でも、そのときになにを言えばいいのか、まったくもって思い浮かばないんだ。それに——

——赤くなる！ 絶対赤くなるっ！

握手をするだけでも厳しいのに、相手がこんな美人じゃ、目に見えていた。そして人前で赤面してしまうこと自体がまた、恥ずかしい。醜態をさらすのは確実だ。

さいわい、僕の席は窓側のいちばん後ろで、握手を求められるのは順番的に最後だったから、逃げ出す時間は充分にあった……んだけど。

残念ながら、勇気がなかった。

とうとう僕の手にとどりついた彼女は、驚いたように一瞬だけ大きく目を見開いた。それからすぐに、鮮やかな笑顔に切り替えて、

「見つけた……あなたね！」

ますます逃げ出したくなるような、わけのわからない言葉を吐いたのだった。

——こ、これが噂の『モテ期』ってやつなんだろうか……？

朝の一件以来、僕の逃亡欲はますます大きくなっていった。

なにしろ阿武さんは、授業の合間にある五分休みのときでさえ、僕の机のところまでやってきては僕に話しかけるんだ。阿武さんに与えられた席はいちばん前のドア側で、僕の席とは対角線上——教室内で最も遠い場所にあるっていうのに。

当然、一時間もの時間がとられている昼食～昼休み時間を、阿武さんが見逃すはずもない。

「優くん！ お昼はいつもどうしてるの？」

まるで以前からずっと友だちであったかのように、あまりにも自然に下の名前で呼んでくる阿武さん。

対する僕はまだ、冷静を装うのに必死だった。

「あ、あの……購買で適当にパンとか買って食べてるけど……」

自然と声は小さくなり、俯いてしまう。そうしなければ赤い顔がばれそうだったから。

しかし阿武さんは気にするふうもなく、やっぱりあたりまえのように僕の右手を掴んだ。

「そう。じゃ、行きましょっ」

そしてぐいと、引っ張ってくる。

「えっ？ い、行くってどこに……？」

「人を待たせてるの。早く早く！」

そんなふうには急かされると、なんだか従わない僕のほうが悪い気がして、結局は促されるままに立ちあがった。まだ手を繋いだまま、クラスメイトたち（主に男子）の突き刺さるような視線を感じつつ、教室の外へと出る。

「あ、の……阿武さん？ 別に逃げたりはしないから、手を放してよ」

繋ぎはじめてからまだ一分も経っていないのに、だんだんと汗をかいてきた掌が恥ずかしくて、そう口にした。僕のほうが少しだけ背が高いのに上目遣いになってしまったのは、いたたまれなくていつもより猫背になっているからだ。

そんな僕とは違い、凛々しく胸を張っている阿武さんは、大きな瞳でちらりと僕を一瞥したあと、とんでもないことを言い出した。

「わたしを下の名前で呼んでくれるなら、放してあげる」

「そっ……それは無理！」

「あら、どうして？」

「どうしてって——クラスの様子見ただろ？ 他の男子がみんな殺気立ってるじゃないか！ きみが僕にやたらと話しかけるせいでっ」

「それとこれとは全然関係ないじゃない。わたしは『他の男子』じゃなくて、『優くん』と話してるんだよ？」

——うう……っ。

知らなかった。正論をにこにこ顔で言われることが、こんなにもつらいことだなんて。

とにかく今は手を放してもらいたかった僕は、仕方なく了承することにする。そろそろクラスメイトだけじゃなく、他のクラスの生徒たちの視線も痛くなってきた。

「わ、わかった。じゃあ下の名前で呼ぶから！ ほら、放してっ」

半ば投げやりに告げると、阿武さんはずいと顔を近づけてくる。

「わたしの名前は？」

よほど僕の顔を赤くしたいらしい。

俯いて、まだ繋がっている手に目をやった僕は、しぼり出すように答えた。

「――あ、朝純、さん」

「あら、せっかくなら『ちゃん』がいいなあ」

「朝純ちゃん！」

叫びながら思いきって振りほどいてみると、阿武さん――朝純ちゃんの手は意外なほど簡単に外れた。もしかしたら、僕がそういう行動に出ることを予想していたのかもしれない。

廊下を行き交う生徒たちの視線を一身に浴びて、恥ずかしくてどうしようもない僕は、浮かんでくる涙をこらえることで精一杯だ。当然朝純ちゃんの顔なんか見られなくて、廊下に敷きつめられた灰色のタイルをひたすらに眺めていた。

その視界のなかにひょいと、しゃがみこんだ朝純ちゃんの顔が飛びこんでくる。

――えっ？

僕の眼鏡の奥を覗きこむように、くりりとした瞳がこちらを向いていた。

「ねえ優くん。購買はどっち？」

なんの悪びれもない無邪気な顔で問われては、答えないわけにはいかない。そもそも悪いのは、些細なことで恥ずかしがっている僕のほうなんだから。

「あ、あっちだけど……」

廊下の左のほうを指差して告げると、再び朝純ちゃんの手が伸びてきて、今度は僕の右手首を掴まえる。

驚いて顔をあげた僕に、朝純ちゃんは変わらない笑顔を向けてくれた。

「じゃあ、わたしが連れてってあげる」

本来ならば僕のほうが案内しなければならぬはずなのに、朝純ちゃんの言動はやっぱりどこまでも自然で――僕の手を引いて歩き出した朝純ちゃんに、おとなしくついていく。

きっと、気づいている。

朝純ちゃんは。

自分が手を引かなければ、その場から動くことさえ困難だった僕のこと。

微かに震えていた脚に。

でも、それを周囲に悟られないよう導いてくれた朝純ちゃんのやさしさは、恥ずかしい以上に嬉しかった。

――嬉しい……ああ、そっか。

そこで僕は、やっと自分のなかに潜んでいた本心に気づく。

僕が朝純ちゃんの言動に過剰反応してしまうのは、なにも恥ずかしいからだけじゃない。かま

われることが嬉しくて……でもそんな経験をほとんどしたことがないから、どうすればいいのかわからないんだ。

僕には、朝純ちゃんがどうして僕にかまうのか、全然わからないけれど。なにか困ったことがあるのなら、僕にできる限りの全力で協力してあげたい――。

前を歩く朝純ちゃんの揺れる黒髪を見ながら、僕がそんな決心をした頃、ちょうど目的の購買にたどりつく。

「あらあ～、ずいぶんと混んでるんだね」

朝純ちゃんが口にしたとおり、一階の玄関近くにある購買は、お目当てのパンやおにぎりを求めるハンターたちでごった返していた。人気のある商品はすぐに売り切れてしまうため、早い時間帯に買いにくる生徒たちの目は、真剣そのものだ。そしてここは戦場そのものだ。

――相変わらず、すごい惨状だ……。

僕が遠慮なく呆れた表情で見ていると、不意に横から視線を感じる。おそろおそろそちらに顔を向けたら、朝純ちゃんはなぜか購買ではなく僕のほうを見ていた。

「な、なに……？」

「優くん、ほんとにこんなところ買いに来てるの？」

心から不思議そうに首を傾げる仕草が、その……かわいかった。

そしてやっぱり、僕の苦手なものは見抜かれているようだ。こんなに人が殺到している場所に、来るはずがないと。

僕は心を落ちつかせるために、ひとつ息を吐いてから答える。

「いつもはもっと、遅い時間帯に来るんだ」

「ええ？ でも、早く食べないといっぱい遊べないでしょ？」

「……別に、遊ばないから」

その答えが予想外だったのか、朝純ちゃんはきょとんとした顔をつくった。

僕にとっては、それが普通だ。ゆっくり昼食がとれれば、それでいい。時間があってもどうせ、次の授業の予習や前の授業の宿題くらいしか、やることがないんだから。

しかし朝純ちゃんは、どうやらそれを許してくれないらしい。

「じゃあ今日からは、わたしたちと遊ぶんだよ！」

そう告げるなり、なにも買わないまま下駄箱に向かって歩き出した。当然まだ右手を繋いでいる僕の身体も、引っ張られる。

「えっ？ ちょ……」

「大丈夫っ。中庭に行ってから、あいつに頼んだほうが早いから」

――『あいつ』？ それに、『わたしたち』って？

気になることはいろいろあるけど、今はとりあえず――

「待って！ 中庭は校舎のなかから行くんだ」

僕の言葉に、朝純ちゃんはぴたりと動きをとめた。それからおもむろに振り返り、自由な左手をこちらに差し出してくる。わざとらしいほどの笑みを浮かべて。

「あ、あの……？」

「今度は優くんが連れてってよ。ね？」

——そう来たか……っ。

ここで断ろうとすると、また「じゃあ手を放さない」なんて言われるんだろう。

まだ知りあって数時間なのに、そんな予想ができてしまう自分に戸惑いを隠せない。

恥ずかしい……でも、やっぱり嬉しい。

伸ばす手が震えてしまう前に、僕は勢いでその細い手首を掴んだ。

「こ、こっち」

全身にわきあがる熱で倒れてしまう前に、走り出す。

朝純ちゃんはさっきまでの僕のように、おとなしくあとをついてきた。

教室が並んだ廊下を抜けて、奥の校舎へと続く渡り廊下の途中から、中庭へと出る。

「えっと……待っている人がいるんだっけ？」

キョロキョロと辺りを見まわしながら尋ねると、朝純ちゃんは「あ！」といちばん奥のベンチを指差した。

「あそこにいるよ。あの、金髪のやつ」

——き、金髪っ？

県立であるうちの高校は、髪を染めるのとピアスには特にうるさいことで有名だ。現に、僕は今日まで一度も金髪の生徒を見かけたことがなかった。少なくとも校内では。

しかし、朝純ちゃんが示した場所には確かに、どう見ても金髪にしか見えない少年が座って……いや、寝ていたんだ。そして向こうもこちらに気づいたのか、横になった状態で上に手を伸ばし、ひらひらと振ってきた。

——もしかしなくても、不良!?

金髪といえばそれしかないだろう。きつとなんらかの理由で僕を呼び出すために、朝純ちゃんを刺客として送りこんできたんだ。

そこまで考えたとたんに、また脚が震えてきた。

なかなか動き出さない僕に朝純ちゃんも苛立ったのか、「しょうがないなあ」と呟きながらもう一度僕の手をとる。

「ま、待って……！」

今度ばかりは僕も、本気で抵抗しようとした。

それなのに——

——えっ？ な、なにこの力!?

朝純ちゃんの力は意外なほど強く、逆に走ろうとする僕の力をもものともせず、奥へ奥へと引きずってゆく。どうやらさっきまでは、相当手加減をしてくれていたらしい。

きつく掴まれた手の痛みを感じながら僕は、この力があるなら、無理やり僕を連れてくることもできたんじゃないかってことに、気づいた。あるいは、教室を出るまでは本当にそうしようとしていたのかもしれない。

——でも、僕が声をかけたから、やめた？

いや、それよりももっと大事なことを、忘れていたような気がする。

朝純ちゃんに引っ張られて歩きながら、必死に考えていた。

思い出そうとしていた。

僕を手伝ってくれたのは、やっぱり朝純ちゃんだった。

「ねえジュンヤ〜っ。寝てないで、ちょっと購買行ってきてよ！」

前に向かって叫んだ言葉に、やっと思い至る。

「あ……！」

——そ、そうだ……普通これからどうにかしようって相手と、購買なんか行かないよな。

おまけに今の台詞は、明らかに相手を使いっ走りにしようとするものだ。とすると、立場的にはあの金髪くんよりも朝純ちゃんのほうが上ということになる。

「ん？ どうしたの？」

僕がぐちゃぐちゃと考えているあいだに、足をとめた朝純ちゃんが振り返った。思わず口から出た「あ！」が、聞こえてしまっていたんだろう。

そこで僕は勇気を振りしぼって、面倒くさそうにベンチから起きあがった彼のほうに視線を向ける。

「あ、あの人は……？」

すると僕の緊張が伝わったのか、朝純ちゃんはいくすりと笑って答えた。

「大丈夫だよー、そんなに怖がらなくても。あいつ、わたしの双子の弟なの」

(二)

朝純ちゃんと似た顔を持つ彼の名は、阿武純夜（あぶ・じゅんや）というそうだ。

(なるほど、『純』の字が共通で、『朝』と『夜』になっているのか)

外見のイメージからすれば、黒髪の朝純ちゃんが『夜』で、金髪の純夜くんが『朝』っぽい感じがするだけに、逆なところがなんだか面白い。

もともと、今の僕にはそんな雑談を振る余裕もなかったけど。

「はい！ これ、優くんの分ね」

「あ、ありがとう」

「飲みものはどれがいいんだ？ 牛乳か？ 牛乳だな。よし、牛乳にしろ」

「う、うん、どうも」

純夜くんの戦利品を両隣から配給され、僕はまるで捕獲された宇宙人のような気持ちでそれらを受け取った。

――な、なんでこんなことに……

端から見れば、三人並んでベンチに座っている僕らは、仲の良い友人同士のように見えることだろう。まさか今日ふたりと知りあったばかりの僕がまんやかに座らされているなんて、誰も思うまい。それが本当は、僕の意味じゃないなんて。

「あの、お金、払うよ」

せめて他の部分では落ちつきたいと思って、僕は左隣に座っている純夜くんにもそう提案した。自分のお金を持たせて買ってきてもらったわけじゃないから、先に払っておかないとすっきりしないんだ。

しかし、すでにパンの袋を開けていた純夜くんは、

「そんなん、あとでいいさ。先に食べようぜ。ああ腹減った～」

言ったそばからすぐにかじりつく。

――仕方ない、か。

こちらがお金を取り出しても、相手が受け取らないのでは邪魔なだけだ。そこで僕も、先に食べてしまうことにする。食事中ならふたりだって、めったなことは言い出すまい。

それに、嬉しいことに朝純ちゃんが手渡してくれたパンは、僕が前々から一度食べてみたいと思っていたものだった。今はそれを味わうことに集中しよう。

そう心に決めた僕は、ベリベリと袋の口を開けて、白くやわらかいパンをひとつつまみ。それを口に運んだら、苺ジャムとマーガリンの絶妙なハーモニーが素晴らしくおいしかった。

不意に、右隣から小さく笑う声が聞こえて、横を向く。

「な、なに？」

「優くんって、女子みたいな食べかたするんだねー。男子でパンをちぎって食べる人、初めて見たよ。おしとやか～」

「え……」

今までそんなことをつっこまれたことがなかったから、反射的に顔が熱くなった。朝純ちゃん

の穏やかな表情が、その熱をより加速させる。

「どうせ全部口のなか入るんだから、そのまま口つけたって同じじゃねーか？ みみっちい食いかたすんなよ」

今度は左を向くと、純夜くんの意地悪な笑顔にますます熱く、赤くなってしまう。

――や、やっぱり変なのかな……？

自分の歯形が残るのがなんとなく嫌で、いつもそうやって食べていたんだ。

すると再び朝純ちゃんが、フォローしてくれる。

「あら、いいじゃない！ わたしは優くんのそういうところ、結構好きだな。いつも野蛮なあんたを見てるからかも？」

「なんだとぉー？ おまえだって充分野蛮じゃねーかっ」

「言うわねえ。でも残念だけどわたし、この学校ではそれなりにおしとやかなキャラで通すつもりだから、そこのところよろしく！」

「はぁ？ どうせ数日中にばれるくせに、無駄な努力すんなよな」

「無駄とはなによ、無駄とは！ あんたこそ、ちょっとくらいみんなに好かれる努力をしなさいよね。ただでさえその金髪で、みんなから怖がられるんだからさあ」

「怖がられるくらいがちょうどいーんだぜ？」

「あんたがよくてもわたしがよくないの！ 転校一日目から居眠りとか、恥ずかしいから絶対やめてよねっ」

「……………」

僕をあいだに挟んで突如始まった応酬は、純夜くんの沈黙で終わりを迎える。

――もしかして、もう午前中に居眠りしちゃったあと……？

ちらりと横目で純夜くんのほうを見たら、露骨に顔を背けてパンを頬張っていた。

僕は思わず、自分が顔を赤くしていたことも忘れて、笑ってしまう。

「ははっ……そっか、きょうだいてこんな感じなんだ」

身近でこういうやりとりを見たことがなかったから、結構新鮮だった。

「あれ、優くんってひとりっ子？」

そんな僕の反応に興味を示したのか、朝純ちゃんがロックオン対象を変えてくる。

朝純ちゃんの顔を見て話すと、また赤くなってしまいそうだったから、僕はまっすぐに前を向いたまま答えた。

「うん、ひとり。だからちょっと、羨ましいな」

もし僕に、ひとりでもきょうだいがいたなら。こんなふうにケンカじみたやりとりを楽しめる――だけじゃなくて。両親が楽に別れるための手助けも、できたのかもしれない。『どちらか』ではなく、両方についていけるからだ。

そこまで考えてふと、ふたりの両親はどうなんだろうと気になりはじめる。

「――そうだ。朝純ちゃんたち、月近市の人じゃないよね？ 親の都合でこっちに来たの？」

初めてごくごく自然に、問いかけることができた。

すると朝純ちゃんは、やけに嬉しそうに目を細めてから、ぶんぶん髪を揺らす。

「違うよ。わたしたち、親はいないから。ここに来たのは、わたしたち自身の都合なの」

「え……」

僕よりも遥かにヘビーな状況にいるらしい朝純ちゃんは、まるでそんな素振りを見せずに明るく続けた。

「でもやっぱり、名字に『月』が入ってないと目立つねー。もう今から改名しちゃおうかな」

そう、代々月近市に住まう者の名字には、必ず『月』の字が入っている。それは、最初この地に町を興した人物が、ここから見える美しく大きな月に感動し、名字に『月』の字が入っていることを町に住まうための条件としたからだ。それを受けて、ここに住みたいと思った大勢の人々が、こぞって名字を変更したのだという。今の感覚で考えればかなり無茶な話だけど、当時まだはっきりとした戸籍などがなかった時代だから、名字を変えるのは結構自由だったらしい。

よって、名字に『月』の字がなければすぐに、よそ者だとわかってしまうのだ。

「改名なんて無理だろ？ 仮にも俺ら、『オイリー・ツインズ』なんて呼ばれてんだし」

ぼそっと呟いた純夜くんの声が聞こえて、そちらに顔を向けたら、すっかりもとの意地悪な表情に戻っていた。もう復活したようだ。

それはいいんだけどー

「オ、オイリー・ツインズって呼ばれてるの？ 『油な双子』ってこと？」

その突飛な響きと意味の言葉が、どうしても気になって尋ねると、今度はふたり揃ってプツと吹き出す。

「『油な双子』!? 今まで『油っぽい双子』とか『脂性の双子』とかいろいろ言われたことあるけど、『油な双子』は初めてだよ～」

「あれだな、だいぶ古いけど、『ヤクザなドラマー』的な『な』だな！」

——うう……。

これだけ笑われるということは、違うんだろうか。再び郵便ポストのように真っ赤になって動きをとめながらも、僕は必死で考える。

あぶら、あぶら、あぶら——頭のなかで何度もくり返していたら、ひとつ閃いた。

(あれっ、ふたりの名字って確か『あぶ』だったよな……?)

「もしかして、『阿武』がふたりいるから『阿武ら』？」

動きを取り戻しておそろおそろ聞いてみたら、ふたりは大きく頷いてくれる。

「ま、意味はそれだけじゃねーんだけどな」

「えっ？」

「もうひとつの意味は——……わたしたちともっと仲良くなってからね！」

「——っ」

天使のような笑顔と、悪魔のような笑顔。

両側から見つめられた僕は、猫に睨まれた鼠に等しかった。

顔はやっぱり結構似ているんだけど、こんなにまで印象の違う双子も珍しいと思う。

「さあさあ、親睦を深めるためにゲームやるんだから、さっさと食べて優くん！」

「五分以内に食べおわらなかつたら、パン代二倍な」

——そ、それは嫌だっ。

おかげで現実に戻された僕は、急いでパンを口のなかに押しこめはじめた。

そのあいだにも、ふたりの会話は続いている。

「あんたねえ……もしそうなっても、どうせわたしが払うんだって、わかってて言ってるでしょ!？」

「あたりまえだろ。俺は結果的に二倍もらえればいいんだからな」

「相変わらず守銭奴ね。そんなだから女の子にモテないのよ～」

「な……違う！俺はモテないんじゃない。自分からそう仕向けてんだっ」

「そうやって自分を慰めてるんでしょ？ かわいそうに……」

「くっ——そういうおまえだって、そんな意地悪い性格だから男が寄ってこねーんだよ！」

「あら残念。わたしは口を閉じてさえいれば食い入れ状態だもの」

——ゴフッ。

勢いよく食べていたせいだけではなく、朝純ちゃんがあまりに似合わないことを言ったものだから、驚いて喉に詰まらせてしまった。

「……おい、その妙に正しい自覚はやめろ」

続けた純夜くんのツッコミが、またおかしい。

——なんか、本当に仲が良いんだなあ。

僕は牛乳でその場をしのぎ、なんとか五分以内にパンを完食することができた。

それでも結局、罰ゲーム的なものはあったわけだけど。

「え？ せんだみつおゲーム!？」

朝純ちゃんが嬉々として「やろう」と言い出したのは、それだった。

「そう。知ってる？」

「け、結構古いやつだよ。なんとなくしか知らない……」

「しょうがねーな、じゃあ俺が教えてやるから、ちゃんと一回で覚えろよ？」

コクコクと頷く僕に、純夜くんは得意げな顔でレクチャーを始める。

簡単に説明すると、まず円になって親を決めるところからゲームスタート。親が最初に「せんだ！」と言いながら誰かを指差し、次にその指を差された人が「みつお！」と言いながらまた誰かを指差す。最後、二度目に指を差された人の両側にいるふたりが「ナハナハ！」と言いながら両手を耳の横で動かせば、一ターン終了となる。次のターンは直前に指を差された人から始まり、誰かが間違ふまで延々と続いていくという仕組みだ。

このゲームの面白いところは、指を差された本人まで「ナハナハ！」と言いたくなってしまうところ、らしい。しかし、三人でやったらまた別の面白さがあった。……いや、むしろ『つらさ』というべきだろうか。

「せんだ！」「みつお！」「ナハナハ！」「せんだ！」「みつお！」「ナハナハ！」「せんだ！」「みつお！」「ナハナハ！」「せんだ！」「みつお！」「ナハナハ！」「せんだ！」「みつお！」「ナハナハ！」「せんだ！」「みつお！」「ナハナハ！」「せんだ！」「みつお！」「ナハナハ！」

あまりにも途切れがなくて、しかも超高速で進んでいくから、休む暇もない。

そう、三人だと最後に指を差された人以外は必ず「ナハナハ！」をしないといけないため、大人数でやるよりも遥かに頻度が高いのだった。

そんなこんなで、本当に親睦は深まったのか疑問の残るなか、昼休みは終わった。……んだけど、どうやら彼女たちの『用事』は、まだ終わっていなかったようだ。

「――優くん、部活はっ？」

帰りのショート・ホームルームが終わると、朝純ちゃんがまっ先に僕の席に飛んできた。

「僕は帰宅部だけど……」

「朝純ちゃんはどこかに入るの？」と続けようとした僕の間を、あっさりと埋めてしまう朝純ちゃん。

「じゃあ一緒に帰ろう！ 純夜も待たせてあるんだ～」

――ああ……

やっぱり嬉しそうな顔で言ってくれるから、断れるわけがない。

誘ってもらって嬉しいと思う気持ちは、どうやっても消せないから。

「――うん、行こう」

初めて僕は、素直に応えた。

否定しなかった僕に朝純ちゃんも驚いたようで、大きく目を見開く。しかし次の瞬間には、ひと目見たら誰もが恋に落ちてしまいそうなほど鮮やかな笑顔を浮かべ、こちらに手を差し伸べてきた。

今までとは少し違う胸の高鳴りを感じながら、ゆっくりと手を伸ばす僕。

しかし残念ながら、僕の手が朝純ちゃんの手に届く前に、朝純ちゃんは僕の手首をむんずと掴んだ。

「そうと決まれば早く！」

まるで昼のシーンをくり返すかのように、僕を引っ張っていこうとする。

僕は慌てて、机の横に提げていたショルダー・バッグを掴むと、肩にかけながら教室の外までついていった。

早足に揺れる朝純ちゃんの黒髪を眺めながら、ふと思う。

――あれ？ でも、今は昼と違って急ぐ必要はないよな。

昼の場合は昼休みの長さが決まっていたから急いだんだろうけど、帰宅部の放課後に決まった長さなどない。純夜くんを待たせているにしたって、終わりの時間は同じはずなんだから、そうそう急ぐこともないはずだ。

それなのに、朝純ちゃんが急いだ理由は……？

考えて、ひとつだけ思い至った。

おそらくだけど、本当は朝純ちゃんも、クラスメイトにじろじろと見られることが嫌なのかもしれない。ただでさえあまりにも美人だから、視線を集めてしまうというのに、僕みたいなのと一緒にいるせいでよけいに注目されるんだ。僕に対する嫉妬的な意味で。

そこで僕は、朝純ちゃんが前に進む邪魔だけはすまいと、おとなしくついて歩いた。

四組の教室の前に立っていた純夜くんを拾って、そのまま玄関口へと向かう。

そう、朝純ちゃんが今朝一組の一員になったのと同じように、純夜くんのほうは四組の一員になっていた。僕が昼までそれに気づかなかったのは、ふたつの教室がいちばん離れた位置にあるからだ。もちろん、僕の情報収集能力が極めて低いという理由もあるけど。

「――ところで、ふたりの家ってどこなの？」

ふと気になって、玄関で靴を履き替えながら訊いてみる。なにしろ、僕の家はかなり近所なんだ。『一緒に帰る』と言ったって、ふたりの家の場所しだいでは最初から無理だろう。

するとふたりは、一度お互いに顔を見あわせてから、揃ってこちらを向いた。

「あのね、優くんの家のおそばに、これから探す予定なの」

「……は？」

予想だにできなかった答えに、僕は思いきり動きをとめる。

「え、なに？ どういうことっ？」

最初に朝純ちゃんと握手をした瞬間から、友だちになろうなろうとされていることは、もちろんよくわかっていた。でもまさか、家まで近くに住もうとするなんて、いくら友だちでも異常ではないだろうか？

――『ちゃんとした友だち』って、できたことがないからよくわからないけど。

少なくとも僕だったら、そこまでして近くにしようとはしないと。むしろ若干キモイと思ってしまうくらいだ。

しかしふたりにとってそれは、まったくもって疑問を持つポイントではないのか、何回目かの言いあいが始まる。

「なに変な顔してんだ？ ほら、さっさと案内しろよ優！」

「こら純夜、あんたこそ無闇に威嚇しないのっ」

「なんだよ威嚇って。俺は懇切丁寧にお願いしてるだけだろ？」

「どこがよ！」

「おまえもいちいち叫ぶな、耳が壊れる」

「あんたみたいな言うこと聞かない耳なら、いっそ壊れちゃえばいいんだよ」

「なっ……そんなこと言っていていいと思ってるのかよっ？」

「思ってるから言ってるの！ あんた、お姉ちゃんの言うこと聞かなすぎるもの」

「ほぼ同時に生まれたくせに、やたらと姉貴面されるのがいちばん嫌なんだ！」

「わかった。じゃあ今から妹面するから」

「えっ？」

「それでいいんでしょ？」

「……………」

――きっと、それはそれで『物足りない』と思っているんだらうな……。

苦虫を噛み潰しながら捨て猫を見ているような、複雑な表情をした純夜くんが見えたから、僕はそう予想した。なるほど、口では朝純ちゃんのほうが一步上を行っているらしい。

――でもちょっと、かわいそうだ。

同じ男としては、やっぱり純夜くんの味方もしてあげたくって、

「と、とりあえず僕の家案内するよ！　すぐ近くなんだ」

自分から言い出したら、ふたりともあっさりと乗ってくれた。

それから僕の家までは、本当に『すぐ』だった。

ただ距離が近いから、だけじゃない。ふたりと他愛ない会話をしながら歩くことで、いつも以上に近いと感じた。もっと遠かったらよかったのと思ったのは、初めてだ。

もっと遠かったら、もっと話せた。もっと話してみたいと、素直に思えた。

そんな僕の気持ちが視線から伝わっていたのか、家の前で足をとめた僕に、朝純ちゃんはどう告げた。

「じゃあ優くん、また明日の朝ね！」

「えっ？」

「迎えにくるから」

「八時な。一分でも遅れたら置いてくから、遅れんなよっ」

相変わらず、「それが当然」みたいな顔をして、笑顔で手を振ってくるふたり。

僕はまだ混乱したまま、反射的に手を振り返っていた。

――明日、も……？

それはつまり、ふたりはなにかの気まぐれで今日一日僕の相手をしていただけではなくて。この半ば無理やり結ばれた友人関係は、明日以降も続いていくということなのか。

――……本当に？

頭のなかの整理がついてくると、誰に見られているわけでもないのに、顔に熱がのぼった。この、嬉しさと恥ずかしさの狭間にある不思議な感情は、いつも僕の顔色を赤くする。

しばらくそのままポーッと家の前に立っていたけど、犬の散歩に出てきた隣の家の人に声をかけられて、我に返った。今度は純粋な恥ずかしさで、タコになる。いい加減なかに入ろう。

鉄製の低い門を開け、さらに風除室のガラス戸も開けた。雪の多い地方では、こんなふうに玄関が二重構造になっていることが多い。玄関のなかに玄関があるんだ。

狭い風除室のなかに入ると、すぐ正面にあるドアに手を伸ばす。我が家では、誰かが家にいるときは施錠しないようにしているため、鍵を取り出すのはそれを確認したあとでいい。

ノブを手前に引くと、ドアはあっさりと開き僕を迎え入れた。反射的に並んでいる靴を見やったら、いつもならこの時間まだ帰っていないはずの父さんのものまである。

――あれ……。

一瞬動きをとめた僕は、靴も脱がないままそっと耳を澄ませた。奥の居間から、ふたりの話し声が聞こえてくる。『調整』は、いよいよ最終段階に入ったのかもしれない。

僕はぎゅっと下唇を噛みしめてから、靴を脱いで家にあがった。居間のほうには行かずに、正面の階段をのぼって自分の部屋へと向かう。

いつもの僕なら、ふたりの邪魔をしないよう外に――公園に逃げるところだ。でも今そうする気になれなかったのは、やっぱり昨夜のことがあるからだった。

またあんな夢を見るのは、嫌だ。夢だとわかっていても、いい気はしない。夢だと言い聞かせたくて、深く考えたくない。

すべてのしがらみを、現実に置き去りにして――。

僕は着替えもせずに、眼鏡だけ外してベッドへと飛びこんだ。

(三)

朝になる前に目が覚めてしまったのは、早く寝すぎたせいだ。

あるいは、結果的に夕食を抜いたため身体が空腹を訴えたのかもしれない。

——今、何時だ……？

ごしごしと目をこすりながら僕は、枕もとに置いてある目覚まし時計を引き寄せる。そのアナログ時計は、二時四十五分を示していた。

「……えっ？」

とっさに声が出たのは、その時間を意外に思ったからだ。

——まだこんな時間!? もうこんなに明るいのにっ。

そう、電気をつけなくても時計の文字盤が読み取れるほど、室内は明るかった。まるで明けがた、カーテンをすり抜けた朝日が部屋全体を覚ましてゆくように。

もしかしたら、窓の外になにかあるのかもしれない。

異常なほどの明るさが気になった僕は、ゆっくりとベッドから抜け出して窓際へと向かう。青いカーテンの端をそっと寄せて、覗きこむようにして窓の外を見やった。

「……っ!？」

ガラスの向こう側には、大量の『クラゲ』がいた。宙に浮いていた。それで明るく見えるのは、その半透明の身体が月と同じ色に発光しているからだ。

——これは幻覚……？

あるいは、昨日の夢の続きか。

ハッと自分の右腕に目を落とすと、あたりまえだけどちゃんとしていた。

その感覚を確かめるように、右手を伸ばして窓の鍵を開けてみる。

月は、今日もきれいだ。

クラゲたちの隙間から見えて、もっとよく見たくて、そのまま窓を開けた。まだ涼しい風が、室内に流れこんでくる。もしクラゲも入ってきたらどうしようかと思ったけど、それは大丈夫なようだ。

——それにしても……なんなんだ、これは。

こんなにも異常な光景が広がっているのに、街中の誰も騒いでいる様子がないのが不思議だった。クラゲはぷかぷかと浮かんでいるだけで、過剰に動いたりしないから、害がないと思われているのだろうか。

そもそも僕だって、充分変なんだ。

いつもの僕なら怖がって、すぐ部屋のなかに引っこんでいたことだろう。ベッドの上に丸くなって、ぶるぶると震えていたかもしれない。

でもなぜか、今はそうならなかった。

それは多分、あの『ふたり』のせい。

新しくできた友だちに、笑い話を聞かせたかったから。ただ逃げて隠れるのではなくて、少しでもいいところを見せてみたいと、そう思ったからだ。

僕は勇気を振りしぼる。

クラゲを見つづけて気持ち悪くなったら、きれいな月で口直し——いや、『目直し』をした。そうして交互に眺めているうちに、僕はあることに気づく。

——あれっ？　そういえばこのクラゲ、なんで見えるんだ!?

僕は、眼鏡をしていないと大抵のものがぼやけて見えるくらいには、目が悪い。それなのにこのクラゲは、今裸眼であるにも関わらず、はっきりと見えていた。月よりも鮮明に。

「……っ」

それに気づいてしまったら、もうクラゲしか追えなかった。

たくさんのクラゲたちを、順番に見つめて行って——やがて、ひとつの幻を見る。

——ああ……

それは思い出。家族三人でよくあの公園で遊んだ、幸せな記憶。

偽りのない笑顔その身に刻んだクラゲは、僕のすぐ目の前を通りすぎ、そのまま離れていこうとした。

「待っ……！」

僕は思わず手を伸ばし、無意識に窓の棧に足をかけると、そのクラゲを捕まえようと——

「——優くん……っ！」

誰かの切羽詰まった呼び声が聞こえたときにはもう、僕の身体は落下を始めていた。

「うわああああっ!？」

落ちているのだと気づいたところでどうにもできなくて、もしかしてクラゲが支えてくれないかと期待したけど無駄で、僕はせめて怖くないようにときつく目をつむる。

衝撃は、意外にも思ったほど訪れなかった。

「間一髪、だな。念のため様子を見に来ておいてよかった」

かわりのように僕の耳に届いたのは、聞き覚えのある声音。パッと目を開けると、すぐそばに純夜くんのあごがあった。眼鏡がなくても、これくらいの距離ならば見える。

「あ、あれ……？」

急いで辺りを見まわし、状況を確認した。どうやら僕は今、純夜くんに『お姫さまだっこ』というやつをされているらしい。二階の窓から落ちた僕を、純夜くんが受けとめてくれたんだろう。

「ご、ご、ご、ごめんっ！」

僕が慌てて腕のなかから降りると、純夜くんは腹を抱えて大笑いした。

「ハハっ、心配すんな。おまえは確実に朝純より軽い！　むしろもっと食——いてえっ！」

続けようとした純夜くんの頭を、朝純ちゃんがものすごい勢いで殴る。それから怖いくらいの笑顔僕に向けてきて、

「ごめんねー、優くん。迎えにくるの、夜なかになっちゃった」

「え……と、あの……？」

どう答えたらいいかわからなくて——そもそも、どうしてふたりがここにいるのかもわからなくて、うまく言葉を探せない僕に。

「さあ——一緒にいこう！」

差し伸べられた手はなぜか、僕を導く月のように輝いて見えた。

さすがに裸足では走っていけないから、郵便受けに隠してある合い鍵を使って、玄関から自分の靴を持ってきた。それから三人揃って、走り出す。

昨日までは月だけが支配していたはずの空は今、クラゲたちでいっぱいだ。窓という区切られた視界で見ると、地面から空全体を見たほうがよくわかる。見あげても穏やかな夜空はほとんど見えず、光の洪水がこれでもかというくらい目を刺激してくるんだ。

そのクラゲたちはクラゲたちで、闇のなかを疾走する僕らが気になるのか、ちらほらと空からおりて近づいてくるものがいた。

驚いたことに、朝純ちゃんと純夜くんはそれらに攻撃を加えているらしい。ぼんやりとしか見えないくせになぜわかるのかといえば、近づいてきたクラゲが片っ端から『消滅』しているからだ。

「ね、ねえっ、そのクラゲみたいなのってなに!? 攻撃すれば消えるのっ？」

繋いだ手の先に、訊いてみる。

朝純ちゃんは、眼鏡のない僕がひとりでは走れないことをわかっているのか、動きにくいだろうに僕と手を繋いだまま走っていた。

「クラゲ? 優くんにはそういうふうに見えるんだ」

「えっ？」

――なに、その言いかた……。

それではまるで、人によって見えかたが違うみたいじゃないか。

そう考えた僕を肯定するように、前を走っているんだろう純夜くんの声が、少し遠くから聞こえる。

「俺にはこれ、『猫耳の美少女』に見えるんだぜ! だから意外と拷問なんだ」

「は……？」

「純夜はねー、澄ました顔してむっつりアニメオタクなの」

「むっつりって言うな! わりと普通のアニメオタクだろ!？」

「えー、どこが? 普通のアニメオタクは、恥ずかしげもなく好きなキャラのTシャツとか着るんだよ」

「おまえの『アニメオタク像』は何年前まで遡るんだっ」

そんなやりとりをしながらも、クラゲの光は確実に消えている。ある意味すごい能力だ。

――眼鏡、持ってくればよかったなあ。

ふたりがどういうふうにいるのか、ぜひ見たかった。……なんて、僕がまだ余裕を持っていられたのは、そこまでだった。

「これはね、優くん。本人の望むイメージどおりに見えてるはずだよ」

繋いでいる手のおかげで僕のことを思い出したのか、唐突に説明を続ける朝純ちゃん。

それに加えて純夜くんが、

「つまり、おまえのなかにある『宇宙人像』はクラゲってことだな」

「え……う、宇宙人っ!？」

今ここでそんな単語を聞くなんて、思いもよらなかった。

でも、考えてみれば確かにその指摘どおりなんだ。僕のなかの宇宙人像は、幼い頃に読んだ本に影響を受けていて、光るクラゲのような姿をしている。それが身体のなかに入りこみ、網膜に字を表示して宿主となっている人間とコミュニケーションをとるという話があり、その印象が鮮烈に残っていたからだ。

「これが……宇宙人……？」

啞然と空を見あげながら、くり返す僕。そう言われたところで「そうですか」とすぐに納得できるほど、単純な脳みそではなかった。

そんな僕を気遣っているのか、朝純ちゃんは完全に足をとめると僕のすぐそばまで来る。

「優くんには、『宇宙人』と言うより『地球外生命体』と言ったほうがしっくり来るかな？ わたしたちは『月の視線（Eyes of the Moon）』——EOMって呼んでる。月から降りてきて、人の心を乱すの」

「人の心を？ ——あ」

そのとき僕の脳裏に思い浮かんだのは、一匹のクラゲが映し出していた遠い過去。僕はそれを目にして、衝動的に窓から出ようとした。その結果、二階から落下したんだ。もし純夜くんが受けとめてくれなかったら、死なないまでも怪我くらいはしていたことだろう。

——でも、どうして？

僕は今まで何度も、月夜に出歩いている。けれど、一度だって自分の行動を制御できなくなったことなんてなかった。こんなふうにクラゲの大群を見たことだって、あるわけがない。あったら多分、病院に飛びこんでいたことだろう。

——もしかして、このふたりに会ったから？

不意に考えたくない答えが浮かんで、身体の内側からぞくりと震えた。

なにせふたりには、僕が今夜こうなるかもしれないと予見していたような節があるんだ。でなければ都合よくあの場面に居合わせたりはしないだろうし、さっき純夜くんが「念のため様子を見に来ておいてよかった」とも口にしていた。

僕はやっぱり、なにかに利用されようとしているのかもしれない。

——訊いてみようか？

はっきり、僕をどうしようとしているのかを。

それがわかれば、ふたりが僕と友だちになろうとした理由も、きっとわかるだろう。

そう、頭では理解しているのに。

「……っ」

心は全然ついていけなくて、じっと見つめるだけでなにも言い出せない僕。

「ん？ どうしたの優くん。眼鏡がないとやっぱり全然見えない？」

すると朝純ちゃんが、僕のほうにずいっと顔を近づけてきた。朝純ちゃんから見たら視線は合っていたんだろうから、表情を読もうとしたのだと勘違いされたのかもしれない。

おかげで朝純ちゃんと、息がかかるくらい近い距離で見つめあうはめになる。さすがにこの距

離だと思えずぎて、自分でも驚くほど顔が熱を持った。

「あ、あの……っ」

――なにか言わないと！

僕が必死に言葉を探していると、

「わっ――と」

不意にどこからか音が鳴り出し、驚いた朝純ちゃんの唇が一瞬僕の頬をかすめる。

「あ……！」

僕はそっちに驚いて、自分から繋いでいた手を離してしまった。

朝純ちゃんは不思議そうな顔をしながらも、自由になった手で尻ポケットからケータイを取り出す。鳴ったのは朝純ちゃんのケータイだったようだ。

そういえば、ふたりとも私服だ。

そこで初めて、僕はそのことに気づいた。頭のなかがそれどころではなかったからだ。あと、僕自身がまだ制服のままだというのもあった。

朝純ちゃんが電話に集中しているのをいいことに、僕は至近距離から服装を確認する。

――短パン……じゃなくて、ショート・パンツって言うんだっけ？ 身長は僕と同じくらいなのに、どうしてこんなに脚が長く見えるんだろ。

そんな場合ではないのに、つい羨ましくなってしまう。

さっき純夜くんの腕に抱きとめられてしまったときのことを思い出してみても、普通のシャツやスリムパンツがなんだか妙に似合っていたような気がする。純夜くんは並ぶと僕より少し背が低いくらいなのに。

――そもそもの体型が違うのかなあ？

そんなことを考えているうちに、先を行っていた純夜くんが走って戻ってきたのが足音でわかった。朝純ちゃんの着信メロディが、向こうまで聞こえていたんだらう。

朝純ちゃんの電話が終わると、すぐに純夜くんが口を開いた。

「あいつ、なんて言ってた？」

「EOM反応が多く集まってるポイントを見つけたって。月の頭公園だって言ってたけど」

「なんだよその、いかにも『井の頭公園』からパクりましたって感じの名前は。場所はどこなんだ？」

「あっ、その公園なら僕がわかる」

――僕がいつも行ってた公園だ……！

これは偶然なんだろうか。

僕は今日、その公園に行くのが怖いと思って、外出せずに早く寝た。

僕は昨日、その公園で満月に手を伸ばして、右腕が消えた夢を見た。

本当は今だって、あまり行きたいとは思わない。

怖い。

すぐにでも逃げ出したい。

脚だって、ずっと前から震えている。

それでも――

「おまえがわかったって、ほとんど目え見えねーんだろ？ 案内できないだろーが」
「大丈夫！ あの公園なら毎日のように行ってたから、目をつむっても行けるよっ」
強く言い返すと、予想外だったのか純夜くんは「うっ」と言葉を詰まらせていた。
――そうだ。

そもそも僕は、ふたりにいいところを見せたいと思って、クラゲーEOMから目を逸らさなかつた。その時点でもう、僕は僕の意味で巻きこまれていたんだ。今さら人のせいにはいけない。純夜くんに助けてもらったのだから事実で、少しでも『お返し』しなければ。

――ふたりはもう、僕の『友だち』なんだから！

「こ、転ばないように手だけ繋いでもらえれば、僕も全力で走るからっ」

今度は自分から手を差し出すと、それを乱暴にさらったのは純夜くんのほうだった。

「わかった。なんかにぶつかりそうだったら手え引いてやる」

僕は少し残念に思いながらも、深く頷く。

すると朝純ちゃんが僕の肩に手を置いて、心配の色を含んだ声音で訊いてきた。

「優くん、ここまでどう来たかは、わかってる？」

「大体は。僕の家からまっすぐ東に進んでたよね？ 月の頭公園は南西だから、逆のほうに行かなきゃならないんだ」

「オッケー。これはほんと優くんに頼ったほうがいいみたい。わたしたちはまだ、この街のことよく知らないからね。案内は任せたよ！ そのかわりわたしたちは、EOM退治のほうを頑張るからっ」

言葉の終わりに、朝純ちゃんは僕の背中をバシッと叩いてくる。

意外に怪力なので正直かなり痛かったけど、気合は入った。

「じゃ、じゃあ行くよ！」

初めて僕が音頭を取り、三人揃って再び動き出す――。

(二)

公園のまんなかにはいたのは、サラリーマンらしき男性のようだった。

曖昧な表現しかできないのは、ひとつには、『サラリーマン』であるかどうかは見た目だけでは完全に判断することはできないのと。もうひとつには、僕らがいる公園の入り口からだと、僕の視力ではほとんど見えないため、伝聞になってしまうせいだ。

でも、そんな僕にもちゃんと見えるものもあって――

――あ、あの人の身体のなかに、EOMがいっぱい入ってる……!?

そう、EOMならきちんと視覚できる僕には、EOMの光でできた人型が見えていた。だから、その人物についての詳しい情報はなにも見えなくても、それが確かに『人』であることだけはわかったんだ。

そしてもうひとつ。

EOMに取り憑かれた男性は、狂ったように呻き声をあげていた。

「うあああああ……あああああ……うう……くそおおおおお……」

さいわい、辺りの民家にほとんど灯りは見えない。ちょうど深い眠りに落ちているような時間帯だからだ。

誰かに気づかれてしまう前に、早くなんとかしなければならぬ。そして多分、ふたりはそのためにここへ――この月近市へとやってきたんだろう。

「さあーて、取り返しがつかなくなる前に、あいつをやっつけちゃうよ！」

腕まくりをしながら意気こんだ朝純ちゃんの横で、純夜くんがすいと僕のほうを向く。

「おまえは邪魔だから、どっかに隠れてな」

「あっ、そうだね。優くん、あの変な球体の遊具のなかに入ってなよ。ひとりで行ける？」

つられたように朝純ちゃんもこちらを見て、幼稚園児を送り出す母のような切なげな表情をしたものだから、僕は慌てて首を振った。

「う、うん、行くのは多分大丈夫だけど、あの……」

――僕だけ見学でいいのかなあ。

そこが引かかるくせに口に出せなかったのは、「じゃあ一緒に戦いましょう」と言われても到底無理だからだ。

朝純ちゃんは僕の表情からそれを察してしまったのか、ふっと眉尻をさげて微笑んだ。

「優くんはね、最後にできそうだったら、手伝ってくれればいいよ」

「さ、最後に？」

「そっ。だから最初は見えて？　と言っても、優くんにはEOMしか見えないだろうけど」

「見えるよ！　多分、光を追っていけば……ふたりの動きも、ある程度は予想できるから」

「じゃあ俺さまの戦いかたを格好よ～く想像してな！　ほら行くぞ、朝純っ」

待ちきれないのか、純夜くんが先に公園のなかへと飛びこんでいく。

その背中を呆れ顔で見送った朝純ちゃんは、

「なによ、格好つけちゃって。ねえ優くん、純夜のこと、猫耳の美少女といちゃいちゃしてる

とこ想像しとけばいいからね！」

なんてとんでもないアドバイスをしてから、追いかけていった。

おかげで僕の脳裏にはちょっとばかりいかがわしい場面が思い浮かんで――慌ててぶんぶんとう首を振ると、僕も動き出すことにする。

球体の遊具は、公園の西側にある。コンクリートのような材質でできたそれは、内部が空洞になっていて、丸・三角・四角型に切り取られた出入口を通り抜けて遊ぶものだった。

その狭い空間のなかに入って屈みこむと、前方の丸く切り取られた窓からEOMたちが集まっている場所を見やる。

――やっぱり朝純ちゃんたちは、あんまり見えないな。

ぼんやりと、なにか動いているのはわかるんだけど、手脚の動きまでは全然追えなかった。

そのかわり主張してくるのは、ますます光が強くなっている人型のEOM。上空に漂う他のEOMたちも、近寄ってさらにその身体のなかに入ろうとしているようだ。

「オレは悪くない……悪くないんだあああああああ！」

叫びながら、男性が両手を振りまわす。

そばに純夜くんがいたのか、「うっ」と小さな呻き声が聞こえた。

「純夜くん……！」

見えないのがもどかしくて名前を呼んだら、

「大丈夫！」

元気に返ってきたのは、朝純ちゃんの声だった。

「立ちなさい純夜！ 同時に行くよっ」

「ああ！」

なおも激しく暴れている男性に向かって、ふたりは多分飛びかかってゆく。

――二対一なんだから、こっちのほうが圧倒的に有利だよな……。

僕が怯えながらも冷静を保っていたのは、そう考えていたせいもあった。

しかし――

「え……っ!？」

ふたりに掴まれ、一度は身体の動きをとめた男性。でもすぐに、恐ろしい怪力でふたりの身体を引きはがすと、投げる仕草をした。

次の瞬間訪れたのは、僕が隠れているこの球体の遊具に、なにかが激しくぶつかった音。

――そんな……

前のめりになっていた身体が、自然と後ろに倒れる。

今の衝撃は、とても人がぶつかったものとは思えなかった。距離にして十メートルくらいはあるのに、それくらい強いものだったんだ。多分、僕が二階から落ちて地面に叩きつけられそうになったときよりも、酷いだろう。

もし生きていたとしても、すぐに動けるわけがない。怪我をしているはずだからだ。

――あんなの、勝てるわけないよ……！

ふたりだって僕からしてみればかなり力のあるほうだったのに、全然敵わないなんて。

半ば放心し、恐怖で外も見られなくなっていた僕。

それを現実へと引き戻したのは、すぐ外から聞こえてきた声だった。

「――もうっ、ほんと馬鹿力なんだから！」

「えっ……？」

怒ったような、でも明るい声音で口にした朝純ちゃんが、ひょいと遊具のなかを覗いてくる。

「ごめん優くん！ 驚いたでしょ？ よけるの、さすがに難しくってさ」

「あ、朝純ちゃん……身体、大丈夫なの？」

まったく痛がっている様子はなかった。思わず自分から近づいて、表情を確認してみても、そこには変わらない笑顔が浮かんでいる。

「心配しないで。わたしたち、こう見えても『すごく頑丈』なんだよ。もう少しあいつを疲れさせれば、必ず隙が生まれるはずだから」

朝純ちゃんは僕をあやすように背中をぽんぽんと二回叩くと、再び走って行ってしまった。

その後ろ姿はやっぱり、怪我をしているようにはとても見えない。

――が、頑丈だって言ったって、限度があるんじゃないの!?

今度はさっきと違う意味で放心する僕。

EOMと戦う使命を帯びているらしいふたりは、その分普通の人間よりも身体が強いということなんだろうか。

その後もふたりは必死に身体を動かしているようで、周囲を飛んでいるEOMの数は確実に減っていた。取り憑かれている男性の動きも、少し鈍くなってきたように見える。

でもその代償は、僕の耳にもはっきりと届いていた。ふたりの呼吸が、すごく苦しそうなんだ。

ずっと身体を動かしつつづけているうえ、いろんな場所に叩きつけられているんだ、疲れなわけがない。対してEOM側は、EOMたち本体にはきっと『疲労』という概念はないんだろう。いくら男性の身体を疲れさせたとしても、EOMたちが内部から動かしている限り、それほど劇的には変わらないのかもしれない。

――三対一なら、もう少し楽になるのかな。

絶望しそうになる心をなんとかこらえて、考える。

でも、下唇を噛みしめたり、両手を握りこんだりしただけで終わってしまうのは、飛び出すのに必要な心が僕の胸にはないからだ。

そうははっきりと言ってしまうほど、意気地なしの自分を、僕は誰よりも理解していた。

そのせいで、たくさんのを失ってきた。

勇気があるのと、無謀なのは違う。

自分に言い聞かせて、何度も逃げてきた。

今だって、なんの力もない僕がこのこと出ていっても、怪我をして終わりだろう。

それは無謀な行動としか呼べない。

そう思う。

僕には、『最後』になにを期待されていたのかさえ、わからないから。

わからない、けど――

――このまま黙って見ているだけなんて、嫌だ……！

心の底からわきあがる思いがある。

こんなことは初めてだった。

怯える自分の気持ちを、裏切りたいと思ったことは。

最初からない勇気を振りしぼって、丸い枠に手をかける。

震えて力が入らなくても、無理やり動かそうとした――僕の肩を、後ろから引き戻す手があつた。

「えっ!？」

いつの間にかEOMに入りこまれていたんだろうか。

その場で飛び跳ねながら、焦って振り返る僕。その姿は、本当に滑稽だったことだろう。

しかし、笑い声が聞こえたりはしなかった。

それは相手がEOMだったから――ではなくて。多分、僕が驚くだろうことを予想していたからだ。そこには、すべてを見とおすような澄んだ目をした、二十代前半くらいの男性がちょこんとしゃがみこんでいた。

――な、なんなんだこの人っ。

この遊具の内部はかなり狭いため、薄暗くてもある程度は見えるんだ。僕の目が、暗さに慣れていたせいもある。おまけにその人は、銀色のかなり長い髪を持ち、かつ、まっ白なスーツを着ていたので、なおさらよく見えたのだった。

「あ、あなたは……？」

まさかこのなかで他人に遭遇すると思っていた僕は、うろたえてそれ以上の言葉を紡げない。この人物がもしEOMの仲間だったとしたら――なんて考えたら、本当に動けなくなりそうだったから、必死に我慢した。

やけに整った相貌をした男性はまだ、切れ長の目をじっと僕のほうに向けている。やがて、「このままでは、あなたもここで終わってしまいますよ」

落ちついた口ぶりで、物騒なことを言い出した。

――なに……？

その言葉に、カチンとくる。普段ならきつと言い返す余裕もなかっただろうに、口は勝手に開かれていた。

「あなたも!? まるで、あのふたりが終わってしまうみたいなことを、言うんですね」

それでも冷静になろうという気持ちは働いて、後半はゆっくりと言葉を紡ぐ。

すると男性は初めて表情をやわらげ、くすりと笑った。

「――なるほど。朝純が言っていたとおり、頭の回転は速そうですね」

「っ……！」

味方なのか、相手の口から朝純ちゃんの名前が出て、僕はやっと少しだけ安心する。

相手が「ふう」と、長い息を吐いたのも束の間、

「終わりますよ、あなたが助けなければ」

笑顔のまま、男性は非情な言葉を続けた。

「な……っ」

——僕だって、助けられるなら助けたい！

あたりまえだ。

きっとふたりが友人でなくたって、この状況なら助けたいと思うことだろう。それくらいには、優しい人間であるつもりだった。「優しく優れた人になりますように」という祈りをこめてつけられた名前に恥じないよう、優れるのは無理でもせめて優しくありたかった。

でも、だからといって想いだけで助けられるほど、現実は甘くない。

さっきまで必死に築きあげていた「ここから出ていこう」という気持ちは、「出ていっても邪魔になるだけかもしれない」という気持ちに押し戻されていた。そもそも僕は、純夜くん「邪魔だから」と言われてこのなかに入ったんだ。

助けられる力なんかないとわかっているのに、出ていっても迷惑をかけるだけだろう。

「助けたい」気持ちと、「邪魔をしたくない」気持ちが、僕の動きをとめる。

そんななか、「僕が助けなければ終わる」なんて言われたら——僕は本当に、どうしていいのかわからなかった。

「——っ」

自然と、視界が歪む。

僕は一体なにを期待されて、ここに連れてこられたんだろう？

そんなこともわからずに見せつけられた痛い戦いは、きっと僕をより臆病にした。

涼しいはずなのに、浮かぶ汗と涙はとまらない。

それでもまだ、こんな情けない姿を他人に見せたくないという、一丁前のプライドは働いて——僕は男性に背を向けると、再び丸く切り取られた空間のほうを向いた。

後ろから、意外に優しい声音が届く。

「あなたはなにか、勘違いをしているようです」

「え……？」

振り返らずに、腕で目もとを拭いながら応えると、

「出ていくのが怖いなら、ここから出る必要はありません。あなたはここからでも、十分にふたりを助けられるのだから」

言葉の終わりに、男性は背後から僕の右腕を持ちあげてきた。まるでロケットパンチでも発射しそうな格好になり、とても気恥ずかしい。

「あ、あの……？」

思いきり戸惑った声を出してやると、男性はさらに口を開く。

「あなたは、ふたりを助けたいと思いますか？」

「あ、あたりまえです！ まだ知りあったばかりだけど、初めて僕と友だちになりたいって言ってくれた……それだけで、僕はとても嬉しかったですっ」

反射的に言葉が出た。それは多分、相手がよく知らない人だからこそ、素直に言えたものだ。言いおわってから赤くなった自分を自覚していた。暗がりではよかったと、思った。

強く告げた僕の答えに、男性は小さく笑う。

「ならば、協力しなさい。あなたの意思なしでは、月の力を借りることはできません」

「月の、力……？」

さっきから、この人の言うことはよくわからない。でも、僕が協力することでふたりを助けられるというならば、断る理由はなかった。

「ぼ、僕は、なにをすれば……？」

ごくりと喉の奥にツバを呑みこんでから、尋ねる。男性が息を吸う音さえはっきりと聞こえるほど、聞き逃すまいと耳を澄ませた。

数秒、間を置いてから男性は話し出す。

「あなたは右腕を『改造』されているはずなのです。想像してみなさい。右腕が巨大なキャノンとなり、相手を貫くさまを」

あまりにも現実離れした現実を。

「か、改造っ？ それに、キャノンって……!？」

昨夜忽然と消えてしまった、僕の右腕。夢だと思っていたあの出来事は、やっぱり現実で。しかもこの男性の言うことが本当なら、僕の想像しだいでこの腕の形状が変わるとい、恐ろしく馬鹿なことが起こるらしい。

――ほ、本当にっ!？」

そんなことが起きるのは、漫画のなかだけの話だと思っていた。幼い頃から内向的で、ある事件をきっかけに「もう友だちなんてつぐらない」と決めていた僕は、そういう漫画のなかにばかり友だちをつくり、妄想の翼を広げていたんだ。

でもそれは、現実には起こりえないとわかっていたからこそ、受け入れられたこと。

臆病者の僕に、そんなリアルは重すぎる。

反射的に引っこめそうになった右腕は、しかし、後ろから男性にしっかりと支えられていて――僕は、その、力強さに感謝した。

ここで引きたくはなかったから。

心の底では確かに、怖いと思っているかもしれない。それは仕方のないことだ、そういう性格なんだから。

でも今、ふたりと出会ったことで少しずつ変わり始めていた僕の気持ちは、逃げたくないと訴えていた。

――ふたりを助けたい……！

恐怖からだけではなく震える僕の右腕を、男性は辛抱強く支えつづけてくれる。

それでもなかなか変化が見られないのは、僕が『キャノン』というものを実はよく知らないから、かもしれない。いくら想像力には自信のある僕でも、あまり馴染みのないものを正確に想像するのは難しかった。

「うう――」

思わず呻き声をあげた僕の様子に、男性は気づいたらしい。

「想像しづらいなら、普通の拳銃でもいいですよ。モデルガンくらいなら、あなただっただけ見たこ

とがあるでしょう？」

言われてすぐに、思い浮かぶ。男子なら誰だって一度は拳銃に憧れるものだろう。僕も幼い頃、両親にねだっておもちゃの拳銃を買ってもらったことがあった。一緒に遊ぶ子もいなくて、ひとりですっと的に向かって撃っていた、ちょっとさみしい思い出。

あれは確かまっ黒な銃で、こんなふうに一―

頭のなかで正確に形づくられていくのと同時に、僕の右腕が光り出し、掌のあった場所にそれと同じ形をつくっていった。

「え……っ!？」

「集中を途切れさせてはいけません」

素早く男性のフォローが入ったおかげで、僕はうろたえずに済んだ。

一―そ、そうだ、落ちつけ！

こうなるとわかっていて想像したんだから、今さら驚くことじゃない。

それに一―僕にとって、他にも驚かなければいけない部分があった。

僕の右腕から出ている光が、EOMが発する光と似ていたんだ。

それはつまり、『月の光』と似ているということ。

不意に、さっき後ろの男性が口にした「月の力を借りる」という言葉を思い出した。

「さあ、優くん。あの二対八に狙いをつけて」

教えていない名前を呼ばれても、もう驚かない。きっと朝純ちゃんから聞いたんだろう。

それよりも気になったのは、

「二対八？ 二対一じゃないんですか？」

なんのことだろうかと小さく後ろを振り返ったら、男性は実に澄ました顔で答えた。

「敵の髪型のことを言っているのです。ほら、二・八カットでしょう？」

「……すみません、僕、目が悪いので、そこまでは見えないんです」

「ああ、そうか、そうでしたね」

どうやらこの人、意外とすっとぼけた人らしい。

とりあえず標的はEOMの塊でよさそうだったから、改めて狙いをつける。

どうやって引き金を引くのかは、訊かなくてもなんとなくわかった。これは僕の想像が実体化した拳銃なんだから、頭のなかで引けばいいんだろう。

ただひとつ、どうしても心に引かかることがあって一―

「あ、あの……僕の撃った弾が当たったら、あの人はどうなるんですか……？」

EOMに取り憑かれている人の行く末が、心配になったんだ。

すると後ろからは、苦笑が聞こえた。

「心配しなくても、大丈夫ですよ。実弾が出るわけではないのですから。あの人のなかに巣くっている『EOM』の親玉を、やっつけるだけです。あの人自身に危害を加えるわけではありません」

それを聞いてやっとな、僕の心は完全に吹っ切れた。

「ほら、よく見てください。あの男の身体のなかに、ひときわ強く光を放っているEOMがいる

はずです。それが他のEOMを呼び寄せているのですよ」

「つまり、そいつを消せば僕らの勝ちということですね!？」

「そのとおり。さあ、今ちょうどふたりが両腕を掴んで動きをとめていますから、よく狙って」

「は、はいっ」

次に浮かんできたのは、恐怖よりも緊張だった。僕の弾が少しでも逸れれば、敵を抑えているふたりにも当たってしまう可能性があるんだ。慎重に慎重に、ちょうど心臓のところにいる親玉と思われるEOMに狙いを定める。

——ああ、そっか。

そのとき僕は、初めて眼鏡をしていなくてよかったと思った。他のものがなにも見えない分、集中しやすいんだ。

わずかな調整を終え、やっと腕の動きを完全にとめる。

背後の男性は、それを見逃さなかった。

「撃て！」

耳もとで告げられたその言葉に背を押され、僕はためらうことなく想像の引き金を引く。

すると次の瞬間、僕の指先——拳銃の先から小さな光の弾が発射され、それがまっすぐに狙ったEOMのもとへと飛んでいった。

——あ、あれっ？ 思ったよりもショボイぞ!？」

身体への反動は結構あったものの、出ていったのは本当に小さな小さな光の弾だった。それこそ、僕がよく発射していたBB弾と同じくらいのサイズ。もしかしたら、そんなところまで忠実に想像してしまったゆえなのかもしれない。

「い、今ので大丈夫ですかっ？」

心配になった僕は、とっさに振り返る。

——えっ!？」

すると、一体いつの間に出ていったのか、男性はもういなかった。僕が撃つ直前までは、確かにこの腕を支えていてくれたというのに。

「……っ」

僕が戸惑いながらも視線を戻すと、人型のEOMはその場に崩れていた。身体から、少しずつEOMが飛び立っていつているのも見える。

どうやら成功したようだ。

——もう出ていっても平気なのかな……？」

まだ怖さはあるから少し悩んだけど、思いきって這い出してみる。ふたりのもとに、早く駆けつけたかったから。

「朝純ちゃん！ 純夜くん！ ——うわっ!？」

大声で名前を呼びながら走っていきこうとして、盛大に転んだ。ずっと屈みこんでいたのと、まだ脚が畏縮していたせいだろう、自分が思っているほどうまくは動かなかったんだ。

そんな僕に気づいて、朝純ちゃんが助け起こしに来てくれる。

「大丈夫？ 優くんっ」

近づけば近づくほどわかる、ボロボロに汚れた肌と服。それでも朝純ちゃんは変わらない笑顔で、僕に右手を伸ばした。

「立てる？」

「う、うん、ありがとう」

僕は照れながらも無意識に右手を伸ばして、

「あっ」

知らないうちにちゃんと『普通の腕』へと戻っていたことに気づく。

——やっぱり全部、夢だったんじゃないか？

往生際が悪く、まだそう考えたがる僕に、朝純ちゃんは——

「お礼を言うのはわたしたちのほうだよ、優くん！ いきなり巻きこんじゃったのに、手伝ってくれてありがとう！」

そう言いながら、僕の右手を両手で強く握りしめた。

——ああ……

そこで僕は、もうひとつ気づいたことがある。

二年一組の教室で、初めて握手を交わしたとき、「見つけた」と口にした朝純ちゃん。それはきっと、改造されたという僕の右手に触れたから『わかった』んだろう。

「確かに助かったけど、おい優！ 気色悪いから俺のこと『くん』づけすんなよなっ」

残りのEOMをすべて倒しおえたのか、純夜くん——純夜も近づいてくる。

「ご、ごめんっ」

礼を言われても、どう応えればいいのかもわからなかった僕は、ただ素直に謝った。

そうしたら、一度顔を見あわせたふたりが、揃って笑い出す。

「優くんって、ほんと素直だよねー、あははっ」

「最初はどーなることかと思ったけど、いいんじゃないねーの？ おまえはそれで」

「ふたりとも……」

僕はまだ、自分がどんなふうに関わったのか、どんな立場なのか、理解したわけじゃない。でも、ふたりの言葉が僕を肯定するものだという事だけは、ちゃんとわかったから。

やっと心から安心できた僕は、そのまま意識を手放してしまった。

窓の外で、うるさく鳥が鳴いていた。その声がいつもより大きく聞こえたのは多分、窓が開いているからだ。その証拠に、室温だっていつもより低くて――

「……………あれっ!？」

がばりと上半身を起こした僕は、眼鏡に手を伸ばすなり辺りをキョロキョロと見まわした。そこはどう見ても自分の部屋だった。

でも、なぜ？

僕は昨夜、窓から落ちて外出した。それから公園に行って、オイリー・ツイングの戦いを見た。最後には、僕自身がこの腕から拳銃を生み出し、EOMをやっつけたんだ。

そして、極度の緊張から解き放たれたせいか、そのまま意識を失ってしまった僕。

――最初に右腕がなくなったときみたいに、勝手に移動した？

あるいは、ふたりがこっそりと僕を部屋に戻してくれたのかもしれない。

不思議と、もう安易に「夢だ」とは考えなくなっていた。

あんなにリアルな夢が、あるはずがない。現に僕の部屋の窓はこうして開いているんだし、僕はまだ制服のままだった。よく見ると、あちこち汚れている。

「優一っ、早く下に来なさい。どうしたの？ お友だちが来てるって、さっきから言っているでしょう～？」

「えっ!? あ……い、今行くよっ」

下から聞こえてきた声に枕もとの時計を見やると、もうすぐ八時になろうとしていた。昨日のことで疲れていたのか、すっかり寝過ごしてしまったようだ。

――あ！ そういえば昨日純夜く……純夜が、「八時に」って言ってたっけ。

しかも、「一分でも遅れたら置いていく」とも言っていた気がする。

僕は急いで汚れた制服を脱ぐと、予備の制服をタンスのなかから引っ張り出して着た。そしていつも使っているショルダー・バッグを斜めにかけて、脱いだ制服を手に一階へと向かう。

階段をおりていくと、玄関でふたりと母さんが談笑していた。

――な、なにか恥ずかしいこと言われていたら困るな……。

とっさにそう考えた僕は、素早く近づくと母さんの胸もとに汚れた制服を押しつける。

「母さん！ 制服汚しちゃったから、クリーニングに出しておいて」

「それはいいけど、あんた、朝ごはんは？」

「いい、このまま行く」

「じゃあせめて牛乳くらい飲みなさいよ。今小さいの持ってきてあげるから」

母さんはそう応えると、有無を言わず台所のほうへと歩いていった。

その様子を、ふたりはニヤニヤした顔で見守っている。

――僕が見られているわけじゃないのに、なんかすごく恥ずかしいんだけど……。

そこで僕はふたりの気を逸らそうと、自分から話題を振ってみる。

「お、おはよう！ ふたりとも、身体は平気なの？」

こんな些細なことですらできなかつた自分が、今ではとても不思議だ。思ったことをただ、口にすればいいだけだったのに。

どこも怪我をしていないのか、普通に直立しているふたりは、一度顔を見あわせると、

「言ったでしょ？ わたしたちは頑丈なんだって」

「それより俺は、おまえのほうが心配だったんだぜ？ もしかしたら、俺らの顔を見るなり逃げ出すかしんねーと思ってさ」

「う……」

そう言われて赤くなってしまったのは、以前の僕だったら確かにそういう行動を取ったかもしれないと、手に取るようにわかるからだ。

「で、でも今は」

「はい、優。持ってきたわよ。――あら、どうしたの？ 顔が赤いわ」

言葉の途中に、母さんが割りこんできた。おまけに僕の顔に手を伸ばそうとしてきたから、思わず右手で防御する。当然母さんは、不思議そうな顔をした。

――いろいろ訊かれるのは、面倒だな。

母さんだって本当は、気になっていることだろう。なにせこれまで一度も、この家に僕の『友だち』が来たことなんてないんだから。

わかってはいたけど、ふたりのことをうまく説明する自信がなくて――僕は素早く牛乳パックを奪い取ると、ふたりの腕に自分の腕を引っかけた。

「なんでもないよっ。遅れそうだから、もう行くね」

そのままぐいと引いて玄関から出ようとする、ふたりも事情を察しているのか逆らうことなくついてくる。

母さんは相変わらず怪訝な顔をしながらも、ハッとなにかを思い出したように目を見開いて、「あのっ、ふたりとも！ よかったら今度ゆっくり遊びにきてねっ」

最後には、僕よりもずっと嬉しそうな――とろけそうな表情を浮かべた。きっと、一度言ってみたかった台詞なんだろう。

親子だからこそ、わかる。僕だって、もし友だちがいたら言ってみたかった台詞や、やってみたかったイベントがたくさんあるんだ。

「はい、ありがとうございます！」

「そんなときは、なにかおいしいもん食わしてくれよ、おばさん」

ふたりが愛想よく返事したところを見計らって、ドアを閉めた。それからぐいぐいと、ふたりを風除室のなかから追い出す。

「なによ～優くん。まだ急がなくても大丈夫だよ？」

「そんなに恥ずかしかったか？ 確かにあのかーちゃんはおまえにそっくりだったけどな」

「えっ？ そ、そこまで似ているように見える……？」

性格的には多少似ているところがあるかもしれないけど、顔を似ていると言われたことは一度もなかった。僕はどちらかと言えば父さん似なんだ。

門を開いて先に道路へ出ると、すぐについてきた朝純ちゃんが口を開く。

「そう？ わたしも似てると思ったよ。表情が素直だもん」

——それって、僕の表情も素直だってこと？

肯定されるのが怖くて、口には出せなかった。僕は別に、無表情を装って生きていたわけじゃないけど、情けない感情はなるべく表に出さないようにと努めてきたつもりだったからだ。でも、全部ばれていたのなら、すごく恥ずかしい。

おまけに今では、これまでの弱い自分と、強くなりたい自分の心は少し乖離しているんだ。もし心のまま表情に表れていたとするならば、それは一体どちらの心だったんだろう？

「——僕はそんなに、素直じゃないよ」

自分の心さえ、上手に操れない。

ふたりの顔を交互に見ながら告げると、呆れた表情を浮かべた純夜が言った。

「ま、おまえはそう思っていればいーんじゃない？ それでおまえの心の平穏が保てるならさ」

そしてくるりと僕に背を向けて、歩き出す。

「あれっ？ 学校はそっちじゃ——」

「そうだよ優くん。眼鏡の奥はきっと、自分には見えないんだから」

僕の声を遮って告げた朝純ちゃんも、同じように身体を反転させて歩いていってしまった。

「ちょっと……ねえっ!？」

呼びかけても、ふたりはなにも応えずにただ歩いてゆく。

どうやら僕も、ついていかざるをえないようだ。ふたりを無視して登校できるほど、僕は薄情者ではない。それに、わざわざ迎えにきてくれたんだから、僕にも来てほしいということなんだろう。

——それにしても、なんの用事だろ？

もしかして、またEOMが出たのだろうか和一瞬考えた。でも、昨夜の話を思い返してみるに、あれは多分月の出ている夜にしか起こらない事象なんだ。こんな朝っぱらから起こるわけがない。おまけに、ふたりには特に急いでいる様子もなかったから、緊急事態というわけでもなさそうだった。

僕は少し走って追いつくと、朝純ちゃんの横に並んでみる。

すると、さっきは無視をしてくれた朝純ちゃんが、まるで普通に会話が続いていたかのように話しかけてきた。

「あのね、今日は違う学校に行ってもらおうから」

「違う学校？」

「そ。普通の学校では絶対に教えないことを、教わるんだよ」

「え……」

——それってもしかして、EOMのこと？

だとしたら、僕自身もっと詳しく知りたいと思っていたところだから、好都合だ。

実のところ、知るのが怖いと思う気持ちは、当然ある。聞いてしまったらきっと、引き返せないだろうから。でも本当は、相手を知らずに巻きこまれることのほうが、ずっと怖いんだ。

僕はそのことを知っている。自らの身をもって、体験していた。

小学校五・六年の頃の思い出。二度と思い出したくない記憶。

僕に「もう友だちなんかつぐらない」と決心をさせたもの。

――あれは、相手の思惑が全然わからなかったからこそ、本当に怖かった……。

逆に言えば、恐怖を取り去るためには相手をよく知らなければならないということ。

間違いなくそれは、今の僕にとっていちばん必要なことだった。

ひとり前を歩いていた純夜が、ちらりと僕のほうを振り返って言葉を投げってくる。

「おまえはな、黙ってついてくりゃいーんだ！」

もしかしたら、沈黙を纏った僕を勘違いしたのかもしれない。怖がっているんだと。

でも、それを完全に否定できるほど吹っ切れているわけでもなかったから、僕は「うん……」と小さく返事をした。

そこにすかさず朝純ちゃんのフォローが入る。

「もうっ、純夜ったらそんな言いかたしないの！ 昨日助けてもらったくせに」

「なーに言ってんだ、助けたのはあいつで、こいつじゃないだろ？」

「あのねえ、あんたこそ変なこと言わないでよ。ちょっと考えればわかるでしょ？ 当主さまだけ居たって助けられないんだから！」

「あ――」

やっぱり今回も、朝純ちゃんの勝ちみたいだ。

純夜は「チッ」と舌打ちをしたあと、また完全に背中を向けてしまった。

――『あいつ』とか『当主さま』って、あの人のことなのかなあ。

そのとき僕が思い出していたのは、昨夜出会った白いスーツの男性のことだ。あの人が居なかったら僕はなにもできなかつたろうから、純夜の言い分だって本当は嘘ではない。

純夜になにか声をかけようか、少し迷っていると、その前に朝純ちゃんが話しかけてくる。

「優くん、気にしないで牛乳飲んで？ ずっと手に持ってたら、悪くなっちゃうよ」

「ああ、うん」

自分でも持っていたことさえ忘れかけていたけど、言われて手もとを見おろした。

小さなパックの後ろについているストローを取り出して、上の口に突っこんでやる。それから唇をつけて吸いこむと、まだ冷たさの残っている牛乳はそれなりに美味しかった。

朝純ちゃんは横目で僕の様子を確認したあと、純夜の背中に走り寄っていく。そして思いきり、叩いた。

「いてーな、なんだよっ？」

「ちょっと感傷的になったからって、優くんにあたるんじゃないの！ あんたにはわたしがいるし、それこそ当主さまだっているでしょ？」

「そ、そんなんじゃないよー！」

――ああ……そっか。

その朝純ちゃんの言葉で、僕はふたりに両親がいないことを思い出した。なるほど、僕の母さんを見た純夜は、なにか感じる部分があったのかもしれない。ふたりとも妙に落ちついていて、どこか大人びて見えていたけど、やっぱり僕と同じでまだ『子ども』なんだ。簡単に感情をコン

トロールできるわけじゃない。

僕だけが、苦勞しているわけじゃないんだ。

みんな同じように頑張っている。

そのことに気づけて、僕は少し安心した。

ますますふたりに近づけたような気がした。

牛乳を一気に吸いこんだあと、僕も小走りで純夜の横に並ぶ。

「ねえ、その『当主さま』という人が、ふたりの親がわりなの？」

すると純夜の向こうから、朝純ちゃんがひょいと前に顔を出して答えてくれた。

「そう！ 今その人のお屋敷に向かっているんだよ。すごく大きいから期待してて！」

(二)

朝純ちゃん言葉は、大袈裟でもなんでもなかった。

――で、でかい……！

高い塀にそって十五分ほど歩いてやっと、大きな門が見えた。高級料亭にしかなさそうな、瓦屋根のついた立派な門構えだ。その奥には、やっぱり恐ろしいほど大きくて威圧感のある、純和風の建物が見えている。

ふたりは当然慣れているんだろう、なんの気後れもなく門についた引き戸を開けると、なかに入ってしまった。

完全に腰が引けているのは、僕だけだ。

「うう……」

せめてなかでは失敗したくない。相手の名前くらいは確認しておこうと、門をくぐる前に表札を探した。辺りをキョロキョロと見まわす。

――多分、あれかな。

普通表札といえば、サイズは大体決まっているものだ。でも、僕が見つけたものは明らかにそのサイズから逸脱していた。

門の引き戸の上部に掲げられた、看板のような大きな板。それには豪快な筆致で『月鳳院(げつおういん)』と書いてある。

「え……」

思わず声が出た。

「あら、どうしたの？ 優くん。早くおいでよ」

先に進んでいた朝純ちゃんが、なかなか入らない僕に気づいて声をかけてくる。

そこで僕はやっと門をくぐりながら、確認した。

「ね、ねえっ、ここって本当に月鳳院家なの!？」

「あ、知ってる？」

「知ってるものにも、月近市に住んでいてその名前を知らない人なんていないよ！」

そう、それほどまでに有名な一族なんだ。

なんでも、月近市の誕生にかなり深く関わっているらしく――というか、僕が知っている『この地に町を興した人物』は、他でもなく月鳳院家の人だった（下の名前は忘れてしまったけど）。そのせいなのか、今でも市の土地の半分は月鳳院家のものだという噂があるほどだ。ただ、一族の人々はほとんど表に出てこないため、かなりのお金持ちであるということ以外は、実のところあまりよくわかっていない。

だからこそ、

「じゃあ、なにをしてる人なのか、は？」

どこか楽しそうに問われて、言葉に詰まった。

「そ、そこまでは知らないけど……」

そんな僕を笑い飛ばすのは、すでに玄関のところまで進んでいた純夜だ。

「ハハっ、その程度じゃ『知ってる』とは言わないんだぜ、優。名前だけ知ってりゃいいなら、おまえはもうEOMのことを『知ってる』ことになるんだからな」

「あ……そ、そっか」

確かにそのとおりだ。僕は名前を知ってはいたけど、正確に言うならそれは『聞いたことがある』レベルで、『知っている』のとはまた別の話なんだ。

——誰だって、自分の親のことを知ったふうにならたら嫌だよな。

僕はまた無意識に、純夜の心を傷つけてしまったのかもしれない。

足をとめて落ちこみそうになっていると、朝純ちゃんが寄ってきて僕の肩に手を置いた。

「大丈夫だよ、あれくらい。ふたりとも、考えすぎなんだから」

少し呆れたような口調で言われて、僕は笑ってしまう。

「あら、なあに？」

それを見て不思議そうに首を傾げた朝純ちゃん。

「いや……そうだってわかる朝純ちゃんも、十分に考えすぎなんじゃないかと思って」

朝純ちゃんは僕の反撃に目を丸くして、

「——優くんも、言うようになったじゃない？」

純夜に似たちょっと意地悪そうな笑みを浮かべた。正直怖かった。

「ほら、行くよ！ 当主さまが待ってるんだから、早く！」

「う、うんっ」

そこからは、なにも言わずについていった。

広い玄関から靴を脱いであがり、やたらと長く入り組んだ板の廊下を進んでいく。帰りにひとりにされたら、確実に迷子になりそうだ。

——修学旅行で行った、京都のお寺を思い出すなあ。

それくらい古く、趣のある建物だった。広さ的には、こちらのほうがずっと広いけど。

やがて、石庭の見える縁側に面した襖の前まで来ると、ふたりは揃って足をとめた。

「ここがやつの部屋だ」

「先に言っておくけど、優くん？ なかに入っても卒倒しないでね」

「えっ？」

そんな気になる前振りをされたのでは、緊張するなというほうが無理だ。

——い、一体なにがあるんだろう……？

肩から斜めにかけているショルダー・バッグのベルトを、ぎゅっと握りしめる。

ふたりは一度目配せをしあって、朝純ちゃんが襖に手を伸ばした。

「朝純です。入りますよ」

言いながら、相手の返事を待たずに戸を開ける。

そのとたん、僕の耳に飛びこんできたのは、小さなピアノの音だった。

——あれ？ この曲……。

ごく最近、どこかで聞いたことがある。それはわかるのに、どこで聞いたのかは思い出せなかった。

朝純ちゃんのあとに続いて純夜も入っていったから、僕も続く。

――.....あれっ!?

なかに入って、もう一度同じことを思った。そして、「卒倒しないで」と言われた理由を理解する。

――な、なにこの『異空間』っ!?

建物がこんなにも純和風なんだから、当然部屋のなかも畳敷きで旅館みたいになっているんだろうと、想像していたのに。

広い室内は妙に薄暗く、光源となっているのは天井の中央に陣取っている月型のミラーボールだけのようだった。床には毛の長い絨毯が敷かれており、丸いテーブルといくつかの椅子が置いてある。

その人はいちばん奥の席に着き、優雅にワイングラスを傾けていた。昨夜僕と会ったときとまったく同じ、純白のスーツに身を包み、両脇には子分のように大きなスピーカーを従えている。ピアノの音はそのスピーカーから出ているんだろう。行ったことないけど、クラブのようだ。ミラーボールがまわるたびに、僕の顔の上を星型の光が横切ってゆく。

僕が啞然としていると、席を立った当主さんがこちらに近づいてきた。昨日は屈んでいたからわからなかったけど、結構な長身だ。

「やあ、優くん。昨夜は先に帰ってしまってすみませんでした。あの場はひとまずふたりに預けて、きちんと落ち着いてから話したほうがいいと思ひましてね」

なるほど、急に消えたのは驚いたけど、確かにあの場で説明されてもこんなふうに冷静に聞く余裕はなかつただろう。

「い、いえっ.....むしろ助かりました。あのときは本当にありがとうございました！」

そういえばお礼も言えないままだったことを思い出し、深々と頭をさげる。

するとなぜか当主さんも、競うように頭をさげてきて、

「こちらこそ、手伝ってくださって助かりましたよ。本当にありがとう！」

「えっ？ いや、そんな.....あ、頭をあげてください！」

そういう状況にまったく耐性のない僕は、すっかり慌ててしまった。

「あ、あの.....？」

しかし当主さんは、なかなか上半身を起こしてくれない。

困って横のふたりを見ると、ふたりは揃って大きな息を吐いた。

それから朝純ちゃんが、呆れをまるで隠さない口調で告げる。

「当主さま？ 優くんをからかうのはやめてくださいよ」

「.....ばれました？」

頭をあげた当主さんの口もとには、少しの遠慮もない笑みが浮かんでいた。

――な、なんなんだこの人は.....っ。

「背中が微かに揺れてましたから」

「さすがに朝純はよく見えていますねー」

朝純ちゃんの指摘に、悪びれもなく応える当主さん。昨日見た真剣な顔とは、まるで別人のよ

うだった。

そのやりとりを見ていた純夜は、やっぱり呆れた様子で口にする。

「アホなことしてねーで、さっさと自己紹介しろよ」

「あっ、そうでした。昨日は名乗れませんでしたからね」

当主さんは素直に応じると、その場できちんと居住まいを正した。

つられて僕も、背すじを伸ばす。

それを見て口もとに笑みを浮かべた当主さんは、軽く礼をしながら口を開いた。

「私は月鳳院……といたします」

「えっ？」

反射的に訊き返してしまったのは、名前の部分がごによごによしていて聞き取れなかったからだ。

すると当主さんは、「ゴホン」とわざとらしい咳払いをしたあと続ける。

「ええと、月鳳院えのきといたします」

「嘘言うな、しめじ」

そこにすかさず口を挟んだのは、純夜だ。

「ばっ、ばらすなー！」

「『えのき』はてめーの親父の名前だろーがっ」

――そ、それで息子がしめじ……ぷぷ。

なるほど、隠したくなる気持ちもよくわかる。僕だってそんな名前をつけられていたら、半端なくグレてしまっていただろう。ましてや、由緒正しき名字の下についているだけに、いかんともしがたいギャップがあるんだ。

僕が必死に笑いをこらえていると、しめじさんはもうひとつ咳払いをして、言いわけ(?)を始める。

「実は、四代前の当主が『きのこ』というお名前のお嫁さんをお願いましてね〜。以来、なんの嫌がらせか、我が子にきのこの名前をつけるのが習わしのようになっているのですよ。しかしながら、曾祖父の『またけ』、祖父の『しいたけ』、父の『えのき』はまだしも、『しめじ』は酷いではないですか……生まれたときから菌類かおじいさんという感じですよ!？」

「いや、ぶっちゃけ全部変じゃんか。それに、そんなん言ったら菌にもジジイにも失礼だろ」

「なんですってーっ」

「菌にもジジイにも、選ぶ権利ってもんがあるんだぜ？」

「私にはないと言うのですか!？」

「そりゃあ、生まれたばかりのガキは自分で名前つけられねーからな」

「はっ！ 確かにそうです！ なんとということだ……私はどうして今までこの名を馬鹿にしていたのでしょうか。それはすなわち、全国の『しめじ（菌類）』や『しめじさん（おじいさん）』を愚弄する行為だったというのに……!!」

「だーかーらー、てめーは大袈裟すぎんだって！」

「これが大袈裟にせず済むことですか！ 月鳳院家の未来に関係しているのですよっ？」

「は？ なにがどう関係してんだよ」

「私が息子に嫌がらせをする名前をつけるかどうかの瀬戸際なのです！」

「……結構たち悪いよな、てめーも。まだ結婚相手もいないくせに」

「おや、私は朝純狙いですよ？」

「ぶほっ!？」

「冗談です」

「て、てめー……あとでぶっ殺す！」

——なんなんだこの、ふたりの仲の良さはっ。

突然始まった言いあい、ぽかんと眺めていた。朝純ちゃんと純夜のものは何度か見ているけど、それとはまた全然違う雰囲気だった。

「驚いた？」

横から声をかけられて、朝純ちゃんのほうを見やる。

「あのふたり、いつもあんな感じなの。遠慮なく言いあえる相手ってのが、お互いしかいないから」

「え？ でも、純夜には朝純ちゃんがいるじゃない」

どう考えても、『親がわり』のしめじさんより『家族』である朝純ちゃんのほうが、近いのではないだろうか。

しかし朝純ちゃんは、淋しそうに目を細めて首を振った。

「性別の違いって、やっぱり超えられないものなのかもしれない。純夜だって、わたしにあそこまで言うことはないもの」

それからいきなり、僕の右手をぎゅっと握ってくる。

「わたし、できれば優くんにも、純夜とああいう仲になってほしいなって、思ってるよ」

「えっ!？」

——……できるのかな。

正直に言って、かなり自信がなかった。僕だって純夜のことは友だちだと思っているけど、乱暴な言動はまだ少し怖いし、なにを言われても言い返すことはできないだろう。

それでも僕が、

「——うん。そうになれるように、頑張るよ」

精一杯前向きな答えを返したのは、朝純ちゃんの笑顔が見たかったからだ。

そして案の定、朝純ちゃんはふんわりと優しい笑顔を見せてくれた。

とたんに、全身が熱くなる。

——や、やっぱり僕って、朝純ちゃんのこと好きなのかな……？

「驚いたでしょう？ この部屋。一族の決まりで、建物の外観は変えてはいけないことになって
いましてね。せめて自分の部屋や服装だけでも、好きなようにしたかったのです」

丸テーブルの向こう側にいるしめじさんは、落ちついた口調でそう説明した。

今この部屋には、僕としめじさんのふたりだけ。しめじさんがそれを望んだからだ。

「このミラーボールはね、プラネタリウムにもなるのですよ。すごいでしょ？」

優雅なピアノの調べに乗せて、しめじさんの言葉が続く。

なかなか本題に入らないその理由に、僕は薄々気づいていた。思いきって、自分から振って
みる。

「あ、あの！ 僕、覚悟はできていますから、EOMのこととか、教えてください……！」

するとしめじさんは、さっきまでのやわらかな表情を捨て、昨日見た鋭い視線の仮面をかぶ
った。

「――いいでしょう。それならば、お話しします」

「お、お願いします」

「長い話になりますから、覚悟してくださいね。それではまず、私の生い立ちから」

「えっ？」

「あ、今『それはなにか関係あるのだろうか？』と思いましたね!? 甘いですよ。大アリですから
、ついてきてください！」

「は、はいっ」

そうして語られたしめじさんの生い立ちは、確かにEOMと深い関わりのあるものだった。

僕ははっきり、月凰院家が代々EOMと戦ってきたのかと思っていた。だからこそ、周囲の人
々には知られていないんだと思っていたけど、違ったんだ。

――まさかしめじさん自身が、EOMの存在を発見した人だったなんて！

話はこうだ。

しめじさんは幼い頃からずっと、夜になるたび誰かに見られているような気がしていたという
。でも、それを人に話しても「気のせいだ」と取りあってもらえず、自分ひとりで考えるようにな
る。そしてやがて知恵がついてくると、その『誰か』の存在に気づいた。それが『月』だった
んだ。

しかしその当時すでに、月にはなんの生物も存在していないことが確認されていた。

でもしめじさんはそれが信じられなくて、「月には人の感知できない生物が居るに違いない」
と考え、その存在に『月の視線(Eyes of the Moon)』――EOMという名前をつけたのだった。

それからは、月の研究に没頭したという。

多額の財を投じて、日本各地に月が他の地よりも少し大きく見える場所があることを突きと
めた。幸運なことに、月凰院家の屋敷がある月近市が最も月の大きく見える街であったため、権
力を乱用し過去の文献などをあさりまくったそうだ。

そうしてたどりついたのが、『月近小唄』だった。

どんなに月が欲しくとも
手を伸ばしてはいけないよ
油断を見せたらもうおしまい
満月が食べてしまうから

この一節は、実際に『食べられた者』がいたからこそ唄われたのではないかと、考えた。
「ちょうど同じ頃でしたよ。不思議な双子が発見されると、私のもとに連絡が入ったのは」
「あ……」

それが朝純ちゃんと純夜のことだということは、すぐにわかった。

しめじさんはどこかまぶしそうに目を細めて、続ける。

「ふたりがどう呼ばれているかは、聞いています？」

「確か、『オイリー・ツインズ』でしたよね」

かなりインパクトのある呼び名だったから、一度聞いただけでも憶えていた。

「名字が『阿武』で『ふたり』だから……あ、そういえばもうひとつ理由があるって」

「そう。――優くんは、鬼ごっこをしたことはありますか？」

「えっ？」

突然変わった話題に、僕はかろうじてついてゆく。

「あ、あります。幼稚園の頃に」

「では、小学生のなかに幼稚園児のあなたがひとり交ざることになったら、どうします？」

「どうって……ええと、なにかハンデをもらおうと思います」

「たとえば、どんな？」

「うーん……もしタッチされても、鬼にならなくていい、とか。逃げるのが大変なのはもちろんですが、鬼になったあと誰にもタッチできなかつたら、ずっと鬼ですからね」

しどろもどろながらもそこまで答えると、しめじさんはにっこりと笑った。

「そう、そのような立場の者をね、ふたりがいた地方では、男の子なら『油息子』、女の子なら『油娘』と呼んでいたのですよ」

「あ……！」

話が、戻った。

「おそらく、水に混ぜても決して同一にはならない油の性質が、語源なのでしょう。ふたりは周囲から、日常的にそう呼ばれていたようです」

「に、日常的に？」

それは一体、どういうことなんだろう。

先を考えるのが、怖かった。

――でも僕は、ふたりともっと仲良くなりたいから。

耳を塞がずに、聞かねばならないことなんだ。

表情を戻して、しめじさんが再び語り出す。

「タッチされても鬼にならなくていいということは、すなわち『無敵』ということです。あのふたりはね、優くん。本当に無敵なのですよ。もっとわかりやすく言うならば、『不死身』です」
「な……っ」

驚きながらも僕は、心のどこかで納得していた。

ものすごい強さでコンクリートに叩きつけられても、怪我をしなかった朝純ちゃん。純夜だってそうだ、相当殴られていただろうに、今朝会ったときにはあざひとつなかった。

「そしてもうひとつ。タッチされても鬼にならなくていいということは、その実、鬼ごっこに参加していないこととなんら変わらないわけです。一緒に走りまわって、参加する振りを楽しむだけ。――これがどういうことか、わかりますか？」

続けられた言葉に、僕の胸が痛む。こんなにも苦しくなったのなんて、両親から離婚の意思があることを知らされたとき以来だ。

僕は胸を押さえながら、声をしぼり出す。

「ふ、ふたりが本当に不死身なら、死のある普通の人たちの生活とは、相容れないということですか……？」

みんなと一緒に生きている振りを楽しむだけで、実際には参加していないことになる。

それがどんなにつらいことなのか――僕には想像も及ばない。

「そのとおりです。あなたは理解が早くて助かりますよ」

しめじさんは僕を落ちつかせようとして褒めてくれたんだろうけど、今はそれどころじゃない。

「で、でもなぜっ？ ふたりは、なんでそんなことに……」

「私もふたりに尋ねました。そうしたらふたりは、こう答えたのです。『満月に捨てられたから』と」

――ああ……

ここでまた、話が繋がった。

『満月に捨てられたから』

その言葉の真意を探るため、しめじさんはふたりの研究も始めたのだという。

ふたりは怪我をしてもすぐに治るだけでなく、月の出ている夜にはそこから降りてくるものがあるということも証言していた。

その『もの』をふたりに捕まえてもらい、自分の目には見えないものを研究しはじめたしめじさん。しだいに周囲の人々も、しめじさんの研究に興味を示すようになり、一族全体で取り組んでいった。そうして進められた研究は、やがてひとつの実を結ぶ。

EOMたちが出す、特殊な気のようなものを感知することに成功したんだ。

おかげで、見えなくてもEOMの存在を確認することができるようになったしめじさんは、もうひとつ意外な発見をした。それは、ふたりの攻撃ならばEOMを倒すことができるということだった。

「その頃にはもう、私のなかでふたつの仮説ができあがっていました。ひとつには、ふたりは満月に向かって投げられたゆえに、EOMに捕まり全身を改造させられたのではないかということ

。もうひとつには、EOMは地球を使ってなにか実験をしているのではないかということです」
次から次と、驚くべき告白をしてゆくしめじさん。

僕は必死に食らいついてゆく。

「『満月に向かって投げられた』のが、『満月に捨てられた』ことの真相だったんですか？」

「ええ、ふたりはよく憶えていないようでしたが、深層心理を探ったところ、そうではないかと。あなたにも憶えがあるでしょう？ 優くん」

急に振られて、心臓が飛び跳ねた。

「……ぼ、僕が満月に手を伸ばしたから、腕を改造されたことですね」

「そうです。EOMは月から、改造する獲物を狙っている。しかし、いつでも、誰でもいいわけではないのかもしれませんが」

「じゃあ、ふたつ目の、実験がどうのこうのというのは……？」

尋ねたぼくに、しめじさんはフッと儂げな笑顔を見せる。

「簡単なことですよ。『倒すべき対象』と『倒す力を有した者』を、同じ檻のなかに入れる理由は、それほど多くはありません。しかも、その力を与えているのは前者なのですから、なんらかの実験が行われていると見るのが妥当でしょう。また、ふたりを私に発見させたのも、戦わせるための布石だったのかもしれませんがね」

EOMを感知できるようになったあと、しめじさんはその装置を月近市全体に設置してみたという。すると、ときおり人に取り憑き悪さをするEOMがいることがわかり、改造された者がいる意味を悟ったのだそうだ。

「人を改造するには結構な力があるようでしてね、一時的に装置の挙動が乱れるのですよ。あなたのときもそれで感知して、取り急ぎふたりを向かわせたというわけです。『月近高校の制服を着た男子生徒が、よく月の頭公園のジャングルジムの上に座っている』という情報は以前から聞いておまして、いずれこんなことになるかもしれないと、気にかけてはいたのですけどね」

「そ、そうだったんですか……」

僕はいつもひとりであそこにいた気になっていた。でも当然ながら、僕の姿を見かけていた人はたくさんいるはずで――今考えると、なんだか恥ずかしくなってくる。

「事前に忠告でもできていたらよかったのですが、変な人と思われるのがオチなので」

「あ、気にしないでください！ こんなことになったのは、僕自身の責任ですから」

僕の弱さが、満月に手を伸ばさせた。

決して覆すことのできない事実が、この胸と、右腕のなかにあった。

それに、もうこうなってしまった以上は、逃げるよりも活かしたい。

いや――あるいは、逃げたいのかもしれない。

――弱い自分から、僕は逃げたい……！

気がつくやうに、椅子から立ちあがっていた。

「あの、僕、僕は弱くて、あまり役には立たないかもしれないけど……ふたりを手伝います！ いいですよっ？」

僕が強くと告げると、しめじさんは一瞬面を食らったような顔をしてから、立ちあがって近づい

てくる。

「あなたは本当に、話が早くて助かります。私はね、ずっと、あのふたりには『あなたのような人』をサポートにつけたいと、そう思っていたのです」

それから僕の両手を、ぎゅっと握りこんで続けた。

「必要なのは、この右手だけではありません。『普通の左手』も必要なのですよ。それだけは忘れずに――これから、よろしくお願いしますね」

その言葉の意味を、僕は完全に理解できたわけではなかった。

それでも――

「は、はいっ、頑張ります！」

返事力強さくらいは、誰にも負けたくはなかった。

(一)

襖を開けてすぐ、縁側に座りこんでいるふたりの背中が見えた。

「あれっ？ そんなところで待っててくれたの？」

今日は朝から太陽が照りつけていて、とてもいい天気だ。黙って座っているにしても、直射日光に当たっているのは暑いだろう。

僕の声にびくりと身体を震わせたふたりは、揃ってこちらを振り返る。

——え……？

その表情に、いつものような明るさはなかった。

「ど、どうしたの？ ふたりとも……」

それこそ熱中症にでもなってしまったんだろうかと、駆け寄って僕もしゃがみこむ。

「具合が悪いの？」

交互に顔を見て尋ねたら、やっぱり揃って首を振った。双子であるせいか、仕草がまったく一緒に面白い。今は面白がっている場合じゃないんだけど。

どうしたものかと僕が本格的に困りはじめる前に、朝純ちゃんが口を開いてくれる。

「——軽蔑、する？」

「え？ なんで？」

——軽蔑？

一瞬言葉の意味がわからなくなるくらい、意外な問いかけだった。

その先を継ぐように、純夜も話し出す。

「聞いたんだろ？ 俺らのこと」

「聞いた……けど、それがどうして『軽蔑』なんて言葉に繋がるのか、僕には全然わからないよ。むしろ、みんなのために人知れず頑張ってたんだから、『尊敬』する」

ふたりの暗い表情なんてそれ以上見ていたくなくて、僕は早口に告げた。

まぎれもなく、本心だ。

だってもし僕がふたりのような状況だったなら、しめじさんに見つかった時点で絶対に逃げ出していると思うから。本当はこんな自信なんて持ちたくないけど、確実なことだと、胸を張って言える。

でも、互いに目を合わせたふたりは、それでもまだ沈んだ瞳をしていて——

「も、もしかして、普通の人とは違う身体だからってことを、気にしてるの？」

どうにかして理由を探ろうと、僕にしては珍しく積極的に問いかけた。

それでも相変わらず、首を振る仕草をくり返したふたりは、

「そんなこたあもう、気にしてねーよ。最初はいろいろ考えたけど、結局なるようにしかならねーしな」

「そうそう。それに、不死身の身体も結構役に立つんだよ。なんでも思いきって挑戦できるし！」

僕が欲しかった明るさとは違う、『強がり』を見せてくる。

——ふたりとも……なんか変だ。

人づきあい苦手な僕は、基本的に人の感情を読むのが下手なのに、そんな僕でもわかるほど動揺しているんだから。でもなにに動揺しているのかまでは、わからない。僕がしめじさんから聞いたことのなかに、ふたりをこれほどまで揺さぶるものはあっただろうか。

「……………」

いくら考えてもわからなくて、なにも言葉にできなくて、仕方なく黙る僕。ただふたりの顔を眺めているのも失礼な気がして、立派な石庭に目をやった。

するとやがて、

「——ふふっ」

「——ハハ！」

やっぱり同じタイミングで、ふたりが笑い出す。

「困らせてごめんね」

「おまえの瞳は間違いなく馬鹿正直だな」

「な、なんだよーっ」

どうして笑われたのかすらわからない僕は、なんだかだんだん腹が立ってきた。

その感情の変化を敏感に察知したのか、朝純ちゃんがぐいと僕の手を引いてきて、僕をふたりのあいだに座らせる。

「ちょ、ちょっと……！」

——このポジションは結構威圧感があるから苦手なのにつ。

右隣に朝純ちゃん・左隣に純夜なんて、昨日の昼休みの悪夢を思い出してしまう。またせんだみつおゲームをやらされたらどうしよう——と、僕がした心配はまるっきり杞憂だった。

横から僕の顔を覗きこむようにして、朝純ちゃんがやっとなんか答えを教えてくれる。

「聞いたんでしょ？ 優くん。わたしたちがどうして優くんと友だちになろうとしたのか」

「あ……」

そう指摘されてから初めて、僕はそのことに気づいた。

——そっか、そういうことなんだ。

改造された僕を探しにきたふたりは、こうして味方に引き入れるために、僕と友だちにならねばならなかった。自分たちの言うことは真実なんだと、信用させるために。

そうじゃなかったらきっと、僕は信じられなかった。

たとえEOMの姿を見たとしても、気のせいだと自分に言い聞かせて、逃げつづけたかもしれない。耐えかねて病院に駆けこんでいたかもしれない。

僕はそんな自分をよく理解しているからこそ、ふたりの選択になんの疑問も抱かなかった。それがとても正しいことだと思うからだ。

「俺らが自分勝手だったのは、ちゃんとわかってんだ。ほんとは、こんなに早く巻きこむつもりじゃなかったしな」

全然らしくない、自らを責める純夜の言葉に、今度は僕が首を振る。

「僕は……僕はね、ふたりが友だちになろうとしてくれて、すごく恥ずかしかったけど、すごく

嬉しかった。なにか理由があるんだろうってわかってても、その気持ちは全然変わらなかった。今はむしろ、理由がわかってよかったと思うよ」

「……どうして？」

ためらいがちに訊いてきた朝純ちゃん。僕の答えが、少し怖いのもかもしれない。

だから僕は、精一杯の笑顔を浮かべて言った。

「だって、どうしたらこれからもふたりの友だちでいられるのか、その方法がはっきりとわかるから。ふたりを手伝えればいいんだもんね。どうやって人とつきあっていったらいいのかもわからない僕にとって、それはとてもありがたい指針なんだ」

僕がそう思うのは、あのトラウマのせい——かつて気まぐれに近づいてきた人物に、散々振りまわされ嫌な思いをした過去があるからだ。

もともと友だちづくりが苦手だったけど、そのせいで僕は、自分の本心を見せずに近づいてくる存在が怖くて、友だちなんかつくれなくなった。普通はある程度の時間を経てお互いを知っていくものなんだとわかってはいても、待てなくなってしまったんだ。

小学生という時分にそんな経験をしたものだから、中学からはもう諦めて、積極的に人と距離をおくようになった。それが意外と苦痛じゃなかったから、つい先日まで続いていた。

ふたりと会うまでは、なにも望まなかった。

でも、出会ってしまったから。

これからも友だちでいたいと望んだ。

それは、ふたりがなにか目的を持っているようだったからこそ、心を許せた結果でもあるんだ。

だけど純夜は、そんな僕の事情なんて知らないから、別のところに引っかかったようだった。

「おまえ——」

不意打ちで、僕の胸倉に掴みかかってくる。

「純夜っ!？」

「おまえがもし俺らのこと手伝わね——って言ったら、俺らが簡単に友だちやめるようなやつだと思ってんのか？」

低い声音と、鋭い目つきで睨んでくる純夜。

でも不思議と、今ばかりは純夜のことを怖いとは思わなかった。微かに震えている純夜の手に、気づいていたからだ。

——きっと、純夜が考える『友だち』と、僕が考える『友だち』はちょっと違うものなんだ。僕は落ちついて答えた。

「そんなこと、思えないよ。でも、もしそうなら、ふたりはきっとすぐに他の仲間候補のところに転校させられてたんじゃないの？」

たとえ離れていても、友だちであることに変わりはないのかもしれない。でも僕にとっては——たとえば、「離れていても親子であることに変わりはない」と言われて違和感を覚えてしまうのと同じくらいに、決定的な違いのある『友だち』だった。

「離れてしまったら、一緒にせんだみつおゲームもできないんだよ！」

続けた僕の言葉に、純夜の瞳が揺れる。

「っ……」

本当は純夜だってわかっていたんだろう、手の力が少し緩んだ。

それを見逃さず、朝純ちゃんが腕を伸ばしてくる。

「こら！ 放しなさいよ純夜っ」

「チッ」

朝純ちゃんが自分の味方をしないからか、僕から手を離れた純夜は背を向けてしまった。自分に都合が悪くなるとそっぽを向くのが、純夜の癖らしい。

当然その反応に慣れている朝純ちゃんは、半分呆れ、半分怒った声音で純夜に迫る。

「ちょっと純夜？ 優くんに謝りなさいよ。そもそも悪いのはわたしたちなんだから」

「えっ？ ふたりは全然悪くないよ。——って、むしろ誰も悪くないって！」

僕が慌ててフォローを入れると、

「悪いのはしめじの命令だろ！ このクソキノコっ!!」

純夜は石庭に向かって力いっぱい叫んだ。

——こ、ここ、しめじさんの部屋の前なんだけど……っ。

ずいぶんな度胸だ。いくら『遠慮なく言いあえる仲』と言えど、限度があるだろうに。

案の定後ろから、バツと襖の開く音が聞こえた。

とっさに振り返ると、こめかみの血管を浮き立たせたしめじさんが立っている。

「じゅ——ん——や————っ」

間延びした名前が終わる頃、純夜の後頭部にしめじさんのゲンコツがめりこんだ。

「いってえーな！ てめーっ、言いわけがあるなら言ってみろよ！ 散々俺らのこと、こき使いやがって……！」

叩かれたところを抑えながら、素早く身を翻した純夜は、そのまましめじさんに飛びかかろうとした。

だけど、しめじさんの長い腕でひたいを押し返され、それ以上は近づけない状態になる。純夜がどんなに手を伸ばしても、脚を蹴りあげても、長さ的に届かないんだ。

——本当に、漫画みたいだなあ。

もう何度思ったかわからないことを、また思った。

対するしめじさんは余裕そのもので、口もとに笑みまで浮かべて穏やかに告げる。

「言いわけはありませんよ。私もEOMと同じで、あなたたちを実験材料にしているし、こき使ってもいる。否定はしません。ですから、お詫びにいいことを教えてあげましょう」

「てめーの『いいこと』がほんとに『いいこと』だった試しがねーんだよっ！」

「あ、駄目だよ純夜っ。そこでほんとのこと言っちゃ！」

——ほ、本当なんだ……。

しめじさん、パッと見はいい人そうなのに……たとえ事情を知ったあとでも、『変な人』だと思ってしまうのは失礼だろうか。

かわいい息子・娘（にしてはかなり歳が近い感じがするけど）からそんな反撃を受けたしめじ

さんは、あいている左手で自らの眉間を押さえた。

「まったくあなたたちは……一体誰がそんなふうに育てたのでしょうか？ ああ、嘆かわしいッ！」

「……………」

「……………」

「……………」

ふたりの視線はもちろん同じほうを向いていたし、僕もそれに荷担した。

しばし、微妙な雰囲気、静寂が場を支配する。

やがて「ゴホン」と、すでに聞き慣れつつある咳払いをしたしめじさんは、純夜のひたいから手を離し、ゆっくりと口を開いた。

「――優くんはですね」

「えっ？」

いきなり自分の名前が出てきたものだから、思わず声をあげる。

しかししめじさんの目は、僕ではなくまっすぐに純夜を見おろして、

「私がお願いする前に、自ら『手伝う』と申し出てくださったのですよ」

最後には、満足そうな笑みを見せた。

すると純夜は大きく目を見開く。

「え……？」

しめじさんの笑顔に驚いているのか、それとも僕のことには驚いているのか。――おそらく両方なんだろう。

「この意味がわかりますか？ 純夜。もし彼が、あなたたちの行動に少しでも不快感を覚えていたならば、絶対にそんなことを言い出すはずがないのです。『自分は弱い』とはっきり言える人間が、わざわざ嫌なものを選ぶわけがありませんから」

そこまで告げるとしめじさんは、今度こそ僕のほうを見た。

「ねえ？ 優くん」

優しく促され、おかげで僕はなんのためらいもなく頷くことができる。

「そ、そうだよ。僕は、この力を活かして、友だちになったふたりを助けたいと思ったから、『手伝う』って言ったんだ」

「おまえさっき、『友だちでありつづけるためには手伝えばいいんだろ』って、逆のこと言ってたじゃねーかよ」

「そんな言いかたはしてないよ。それに、どっちも本当の気持ちなんだ……！」

負けじと叫んだら、純夜は気圧されたように上半身を少し後ろに倒した。

「『友だちになったから手伝いたい』のか、『友だちでいたいから手伝いたい』のか、僕にもよくわからないけど……」

わからないから、もうどう言ったらいいのかわからず混乱して、泣きたくなんかないのに視界が霞んでくる。

そんな僕を助けてくれたのは、やっぱり朝純ちゃんだ。

「観念しなさいよ、純夜。どちらにせよ、優くんがわたしたちと『友だちになりたい』と
思っていることに変わらないんだから。照れるからってそう突っかからないの！」

「な——お、俺は別にそんなつもりじゃ……っ」

「じゃあどういうつもり？ こんなに告白されて、あんたの心は揺れないの？ わたしはもう、
じ〜んときちゃった あんたがいないなら、わたしがひとり占めするよ？」

「だ、だから俺は別に——」

「あんた言ってたじゃない。同世代の仲間がいないからつまらないってさ。しかも、昨日までは
結構楽しそうに絡んでたでしょ？ それともなに？ 優しそうなお母さんが羨ましくて、妬いて
るの？」

「っ……違うって言ってるだろ!？」

純夜はそう怒鳴りながら、再び背を向けようとした。

その右腕を、朝純ちゃんががっちりと捕まえる。

「そうやってすぐ逃げるんじゃない！」

——あ……

その言葉は、僕にも向いているような気がした。

僕はとっさに手を伸ばして、残っている純夜の左腕を掴む。

怯まずに顔を見やると、純夜は目を丸くしていた。

「な、なんだよ……っ？」

「僕の両親は、もうすぐ離婚する予定なんだ」

「——えっ？」

「優くん……それほんと？」

ふたりとも——いや、しめじさんも予想外なことだったのか、ひどく驚いているようだった。

僕は三人の顔を順番に見やって、ゆっくりと言葉を紡ぐ。自分のなかで整理をつけながら。

「本当だよ。でも、どちらが僕の親権を取るかでまだ揉めてて……僕はそんな家にいるのが嫌で、
よく外に逃げてたんだ」

「なるほど、それで夜の公園にいたわけですね」

僕の噂は聞いていても、理由までは予想できていなかったんだろう。

納得したように頷いたしめじさんを見あげて、僕は——

「さっき、僕がどうして月に手を伸ばしたのかを、訊きませんでしたよね。あのとき僕は、そんな
ことはありえないとわかっていながらも、月に食べられてしまうことを期待してたんです。僕
がいなくなったら、ふたりが悩む必要もなくなるかなって。僕自身では選べないから、月に責任
を押しつけようとしてた」

「優くん……」

僕が抱えている事情は、ふたりの事情と比べたら遥かに軽い部類のものだ。少なくとも僕は、
そう思う。

それでも呼ばれた声に顔を戻したら、朝純ちゃんは瞳に涙をためていた。

「おまえ——おまえは今でも、消えたいと思ってんのかよっ？」

なぜか悔しそうに下唇を噛みしめている純夜が、僕の手を振りほどきながら訊いてくる。
「思っていない！ 思っていないから、今度こそ自分で責任を取りたいって考えたんだ。ふたりを手伝いたいと思ったのには、そういう理由もあるんだってことを、伝えたくて……」
「もういいじゃない、純夜。理由がひとつしかない人より、たくさんある人のほうが、わたしは信用できるな」

手の甲で目をこすりながら、朝純ちゃんが最後の説得をする。
すると純夜は、観念したように両手を上にあげて、
「……俺だって別に、反対したくてぐだぐだ言ってんじゃねーんだぜ？ 俺らがもし優とうまくいかなかったら、泣くのは結局おまえ、なんだからな……？」

今まで見たこともないような優しい瞳を、朝純ちゃんに向けていた。
「純夜……」

――ああ、なんだ。
やっぱりふたりは、他のなにものにもかえがたい強固な絆で結ばれているんだ。朝純ちゃんはしめじさんを羨ましがっていたけど、絆の種類が全然違うんだと思う。なにせ、純夜がしめじさんを『心配』するなんて、想像できないし。もしそういう状況になったら、全力で馬鹿にするか、全力で笑うかのどちらかだろう。

「――それでは、しばらく三人で行動していただきます。それでいいですね？」

しめじさんの最終確認に、
「もちろんです！」
「仕方ねーな」
「が、頑張りますっ」

僕らは三者三様の返事をして――その後、なんと豪華な昼食をご馳走になってしまった。

(二)

これはあとから聞いたことだけど、EOMは毎晩必ず出現する、というわけではないらしい。天気がよく月のきれいな夜に出ることが多く、月の形が満月に近いほど強力なEOMが出やすいそうだ。

つまり、満月の翌日にあたる昨夜出会った、サラリーマンの男性に取り憑いていたEOMは、かなり強い部類のEOMだったと言える。ふたりが苦戦しているように見えたのも、そのせいなんだ。通常レベルのEOMならば、あんなにも時間をかけずに相手の体力を削り、素手で体内のEOMを攻撃する(!)ところまでいけるらしい。

またあんなのを相手にしろって言われたら、いきなりはきついけど……さいわい月は、これから新月に向けてどんどん欠けてゆく。そのあいだにたくさん経験を積んで、また月が丸くなる頃にはちゃんと戦えるようにしておかないと、ふたりの足を引っぱってしまうことになるだろう。

そこで僕は、学校が終わる時間まで月鳳院家で過ごさせてもらった(ちなみに、欠席の連絡はしめじさんがしておいてくれたらしい)あと、夜に家を抜け出すために必要な道具を買いに行くことにした。

当然のように、ふたりもついてきてくれる。というか、どちらかという主導権を握っていたのはふたりのほうだった。

まずは近所にある大きなホームセンターで、こんなやりとり。

「やっぱりほら、『あれ』が必要じゃない？」

「あれ？」

「窓から外に出るときに使う、縄梯子。別に普通のはしごでもいいけど、出し入れが大変そうだからね」

「あー、そっか」

朝純ちゃん言葉に、なるほどと思う。

昨日がイレギュラーなだけだったから、玄関から出てもいいと思っていたけど、考えてみたら、いくら夜なかとはいえ見つかる可能性がかなり高いんだ。ただでさえ離婚問題で微妙な時期なのに、夜遊びをしていると思われて心配されるのはたまらない。今の母さんなら、きっと気づいてもとめないだろうから、よけいにだ。

――父さんなら……そう、静かに怒るだろうなあ。

僕には積極的に絡んでこない父さんは、それが僕のためになると思っているらしい。昔から物静かでシャイな人だった。やっぱり僕の性格は、父さんのほうに多く似ているんだ。それでも、褒めるときはしっかり褒めてくれたし、怒るときはちゃんと怒ってくれたから、僕にとっては尊敬できるいい父親だった。

ふたりとも、苛々を子どもに向けるような親だったなら、僕がこんなにも悩むことはなかったんだろう。そうじゃないから悩んでいるなんて、贅沢な話だけど。

――やっぱり窓から出入りしたほうが、無難かな。

「あ、向こうにあるみたい」

「うん」

朝純ちゃんが天井に吊された案内を指差してくれたから、一緒に歩いていく。

すると、面倒くさそうに後ろを歩く純夜が声をかけてきた。

「でもよ、優の腕力じゃ、降りられてものぼれないんじゃないか？」

「う……」

それは正直、僕も心配だ。力がそれほどないうえ、運動神経もいいほうじゃない。二階までのぼるにはかなり苦勞をすることだろう。

ふたりみたいに怪力だったら、簡単にのぼれそうなのに。

そう考えて、僕はふと疑問に思う。

「そういえば、ふたりの力が強くなったのって、改造のせいなの？」

男の純夜だけなら、生まれつきと言われても信じるかもしれない。でも、朝純ちゃんまであんなに力が強いのは、どう考えても変だった。

すると朝純ちゃんが僕のほうを見て、

「そうだよ。わたしたちは、優くんたちみたいに身体を変化させることはできないけど、そのかわり不死身で怪力なの。まあ優くんだって、右手の握力だけなら普通の人より強いと思うけど」

「あ、そうなんだ？」

全然意識していなかったから、知らなかった。もし右手の握力で自分の体重を支えられるなら、少しは楽にのぼれるかもしれない。

——この腕にはまだ、僕の知らない秘密があるのかな……？

久々にじっくりと、自分の右の掌を見やった。詳しい話を聞くまでは、そんなことすらできなかった僕。でも、受け入れた今ならこの腕だって立派な『仲間』なんだ、怖がっている場合じゃない。

それからちらりと、全身を改造されているというふたりの姿を盗み見る。僕の右腕だって普通と変わらないんだから、ふたりが普通に見えるのもあたりまえのこと——なのに、他の人とどこか違って見えるのは、明らかに容姿の問題なんだと思う。

——やっぱりふたりとも、かなり美形だよな!?

凡人そのものの自分が虚しくなるからあまり考えないようにしていたけど、もう限界だ。同じ制服を着ていてもこんなにも印象が違ううえ、ホームセンターにいるのにドラマのセットの前にもいるかのような雰囲気漂っているふたり。思わず撮影用のカメラやフラッシュ・ライトを探してしまいそうだ。改造されたから美しい——わけでは当然ないんだろうけど、羨ましがとまらなかった。

「……どうせなら、顔を改造されればよかったかな……」

そしたら視力だって、回復していたかもしれない。

ポツリと呟いた僕の言葉を、拾ったのは純夜だった。

「なんでそんなこと言うんだ？ おまえ、もしかして女装したいとか……？」

露骨に嫌そうな顔を見せたから、僕は慌てて否定する。

「ま、まさか！ そんなんじゃないよっ。ただ、その……変装とかできたら、結構便利かなあ

って」

「美形になりたい」なんて口にするのはさすがに無理で、ごまかした。

「ふたりがもし身体を変形できたら、人間以外のものにだってなれたかもしれないのにね。どうしてふたりにだけ制限があるんだろ？」

そんな自分が恥ずかしくて饒舌に続けると、朝純ちゃんが不意に足をとめる。

「それは、多分――ほんとに人間じゃなくなっちゃったら、困るからじゃないかな？」

「まーなー。しめじ曰く、あいつらの目的は人間を使った実験なわけだしな」

自嘲気味な笑みを浮かべながら、純夜も口にした。

「あ……」

それが失言だったと気づいたのは、ふたりの答えを聞いたあとだ。

――馬鹿だ、僕……。

ふたりはただでさえ、『人』から外れた存在で。

ふたりがいくらそれについて納得していると言っても、その言葉が本心であるかなんて誰にもわからない。きっと本人たちにも、わからないんだ。

そういう気持ちもあるんだということを、僕自身がついさっき自覚したばかりなのに――
――見えない傷をえぐってどうする！

見えないものを傷つけるのは、EOMだけでたくさんだ。

「ご、ごめん！ ふたりともっ」

勢いに任せて頭をさげたら、ふたりは珍獣でも見るような目を僕に向けてきた。

「えー？ なに謝ってるのよ、優くん。別に変なこと言ってないじゃない？」

「で、でも……」

「やっぱいちばん考えすぎなのは、おまえだと思うぞ」

「そ、そう……なのかなあ……」

でも僕には、ふたりが自覚のないまま傷ついているように見えたんだ。

気にしていないならそれでいいんだけど、せめて僕だけは、その痛みに気づいてあげたかった

。

そのあとは三人であれこれ悩みながら縄梯子を選び、それを引っかけるためのバーや、バーを取りつけるための工具なんかを買った。縄梯子が思ったよりも高くて（二万円以上もするなんて！）、代金は結局しめじさんのつけにしてもらうことになった。サービスカウンターのお姉さんに頼むと、よくあることなのか意外とあっさり商品を袋に入れてくれる。

――い、いいのかなあ……？

そのあいだ、なんのためらいもなくしめじさんに『おねだりメール』を打つ朝純ちゃん。

それから数分後、聞き覚えのあるピアノのメロディが流れはじめた。

「あ！ そうだ、この曲……」

しめじさんの部屋に入ったとき、流れていた曲。最近どこかで聞いた覚えがあると思ったのは、朝純ちゃんのケータイの着信メロディだったんだ。

「この曲がどうかした？」

着たメールを確認しながら、朝純ちゃんが訊いてくる。

「ううん、ちょっと……しめじさんのところでも流れてたから、気になって」

「あ、そっか。これね、当主さまのお気に入りの曲なの。ベートーヴェンのピアノソナタ『月光』だよ」

「『月光』……そういえば、学校で習ったかも」

「あいつはほんと月馬鹿だからなあ。月の光を反射し返したくて、あんな髪の色してるくらいだし。どう頑張っても無理だっつーの！」

「はいはい、純夜が当主さまのことを馬鹿にしてたって送っておくね」

「ま、待て！ やめろっ」

朝純ちゃんの手の中のケータイを奪おうとした純夜だったけど、華麗に躲されていた。

パチンとケータイを閉じて、胸ポケットのなかにしまった朝純ちゃんが、こちらに笑顔を向けてくる。

「優くん、つけにするのは問題ないってさ。あとで一緒にお礼を言いにいこうね」

「う、うんっ」

「俺をのけ者にするなよっ。――てか、わざわざ行かなくても電話すりゃいーんじゃねーのか？」

「でも僕、ふたりみたいにケータイ持っていないし。家の電話は居間にしかないから、親がいると使いにくいんだ」

「ならおまえもケータイ持てば？ それなら夜でも連絡取れるし」

「あ！ それいいねっ。じゃあ次はケータイを買いに行こう～」

「ま、待ってよ！」

行動力がありすぎるふたりを、僕は慌ててとめた。

「イマドキのケータイって、すごく高いんじゃないの!? 僕、そんなにお金持ってないし、ケータイだと毎月継続的に払わないと駄目なんですよ？」

「それもこっちのことで必要なものなんだから、当主さまに頼んでもいいんじゃない？ ほら純夜、荷物持って！ 行くよっ」

「チッ、しゃあねーな」

「待ってってば朝純ちゃん！ さすがにそこまではお願いできないよ……ケータイだったら、親に使ってるところを見られるかもしれないし」

「あー、そっか。確かにね」

さっさと店を出ようとしていた朝純ちゃんは、やっとなまってくれた。

「だったら親に頼むしかねーんじゃね？ 高校生なんだから、『ケータイ欲しい』って言い出しでも別にあやしまれねーだろ」

振り返ると、文句を言いつつも律儀にレジ袋を持っている純夜が近づいてくる。

「それは、そうだけど……」

今はよけいなことで、ふたりを煩わせたくない。

それが素直な気持ちだった。

多分ふたりも、そこまで読んでいたんだろう。

「――じゃあさ、今からみんなで優くんところ行こうよっ。それで夕飯ご馳走になりながら、三人で頼みこむ作戦！ どう？」

「あー、いいんじゃないか？ 『友だち』と連絡取るのに欲しいって言えば、反対はしねーだろ。俺らが昼ご馳走してやったんだから、夜ご馳走されるのは正当な権利だしな」

「ご馳走したのは当主さまで、あんたじゃないけどね」

「同じだろ。俺らが月凰院家に連れていったから、結果的にご馳走してもらえたんだしな」

「相変わらず屁理屈大王ね、あんたは」

「おまえこそ、とりあえず俺に反論する癖やめろよっ」

「あら、わたしは正論しか言ってないよ？ 『とりあえず』に聞こえるのは、あんたの心が荒んでるからじゃないの？」

「言ったなあーっ!？」

提案から始まった不毛な言い合いに、僕は思わず吹き出してしまった。

「あははっ、本当に仲良いよね、ふたりとも」

「良くない！」

「良くねー！」

揃った声音がまた、面白い。

おかげで自然と、笑顔になれた。

「――いいよ、僕んち行こう。僕が両親と変に距離を取りすぎてるのも、悩んじゃう原因なのかもしれないし。ふたりが来てくれれば、両親もきっと喜ぶから」

(三)

そうして、ふたりのおかげで無事にケータイを手に入れた僕は、みんなが寝静まった深夜にたびたび呼び出され、ふたりのサポートをするようになった。

朝純ちゃんが言うには、僕の右腕でも直接EOMを攻撃することはできるらしい。でも、僕自身があまりEOMに触れたいと思わなかったから、結局は物陰から親玉を狙撃するというやりかたを貫いていた。EOMは月の光が届く範囲でなければ移動できないそうで、そうしていれば安全なんだ。

――我ながら、本当にヘタレだとは思うけど。

自分の安全が確保されていなければ、落ちついて狙いをつけられないんだから仕方がない。それでも最初の頃に比べたら、拳銃の具現化も狙撃自体も、だいぶスムーズにできるようにはなってきた。

六月に入り、第一週はほぼ毎晩のように出勤。そのかわり新月の前後にあたる第二週・第三週は、一・二回ほどしか出勤せずに済んだ。そして、週末には再びの満月が訪れる第四週――今週は、日曜日の二十日から昨日までの三日間、連続出勤になっていた。

おかげで授業中も、あくびがとまらない僕。昼前の三コマ目ともなると、今度は眠さに耐えることにも疲れてくる。油断をすると垂れてくる目蓋と必死に戦いながら、せめてこれ以上は眠くならないように、授業とはまるで関係のないことを考えていた。

――深夜にみんなのために働いたって、翌日の午前中の授業が免除されるなんて都合のいいことはないんだもんなあ。

そう、EOMを倒すという行為はなにも、EOMたちの実験をさっさと終わらせて地球から手を引いてもらうため――だけではないんだ。しめじさん曰く、気持ちが弱っている人ほどEOMに取り憑かれやすく、また、EOMに取り憑かれた人ほど犯罪に走りやすい傾向があるらしい。つまり、基本的にその場で暴れるだけだった例のサラリーマンは、まだかわいいほうだったんだ。

そういう人たちが起こす犯罪は、力の加減も気持ちの加減もできずに、最悪の事態を引き起こすことが多いという。だから、それを未然に防ぐのが僕らの役目だ。しめじさんによって集められたメンバーが、全国各地に散らばってEOMたちが降りてくるのを監視している。――やっぱり、しめじさんの財力はすごい。ちなみに、父親のえのきさんもまだご存命らしいけど、しめじさんが部下たちを自由に使えるよう、早めに引き継ぎをしたそうだ。

「――じゃあ次！ 月島っ、五十六ページから読んでくれ」

「えっ？ あ、は、はい！」

突然あてられた僕は、椅子から立ちあがりながら、机の上に広げてあった教科書を乱暴に掴み取った。勢いで椅子が後ろに倒れたけど、いちばん後ろの席だから大丈夫だ。先に教科書を読んでしまうことにする。

――ええと、五十六ページって言ったよな。

急いで開いてみたら、そこは練習問題のページだった。しかも、『数学』の。

「あ、あれ……？」

僕が思いきり戸惑って先生の顔を見ると、そもそもその『顔』も、僕が思っていたものとは違う。

「あ——」

「おい月島……おまえのなかでは今、数学の時間なのか？」

視線で人が殺せそうなほど鋭く睨んでくるその先生は、強面が特徴の水無月(みなづき)先生だった。担当教科は、顔に似合わず現国である。

「す、すみませんっ。僕、ポーッとしてて……」

教室中からクラスメイトたちの視線も集まり、顔が熱くてなにも考えられなくなる。

「だんだん暑くなってきたからって、たるんでるんじゃないだろうな？ おまえは明日までに、五十六ページから二十ページ分全部ノートに書き写してこい！」

「は、はい……すみませんでした……っ」

——ああ、ますます休む時間が減る……。

しょんぼりしながら椅子に戻ろうとした僕は、椅子が倒れていることも忘れていた。

「うわ!？」

当然僕の尻はなにも捉えず、そのまま床に倒れた勢いで、後ろに転がっていた椅子に後頭部を打ちつける。ゴンっと、頭のなかに振動が響いた。眼鏡も顔から落ちそうになる。

「いたた……」

おかげで目はすっかり覚めてしまったけど、かわりにぶつけたところが尋常じゃないくらい痛かった。

「おい、大丈夫かー？」

僕の醜態を見るに見かねたのか、隣の席の香月くんが声をかけてくる。それは、朝純ちゃんがこのクラスに転校してきた日以来のことだった。いつもは僕がなにをしても、ちらりとだってこっちを見ないのに。

僕は頭の後ろを押さえながら、薄く目をあける。それからなんとか、上半身を起こした。

「だ、だい、じょう、ぶ……ありが、とう」

香月くんは腕を引っ張ってもらい、やっとのことで立ちあがる。

周囲からは、くすくすと笑い声が聞こえていた。当然だ、僕だって逆の立場だったらきっとこっさり笑っていただろう。こんな古典的な方法ですっ転ぶなんて、本当に情けない。

——朝純ちゃんも呆れているだろうな……。

そっと、対角線上のいちばん遠い位置に目をやったら、意外にもその顔は笑っていなかった。むしろ怒ったかのように、真剣な眼差しをしてこちらを見ている。心配してくれているのかもしれない。

単純な僕は、おかげで少し恥ずかしさから解放された。これ以上失敗しないように、慎重に椅子を起こしてから席に着く。

「さて、月島のひとりコントが終わったところで、授業に戻るぞー」

——ちょ……っ。

飛んできた水無月先生の嫌みっらしい発言に、またあちこちから笑いが漏れた。

仕方がないので教科書で顔を隠しやり過ごしていると、今度は――

「ん？ 誰だっ、授業中にケータイの電源を切っていないやつは！」

鳴り出したのは、すっかり聞き慣れてしまった『月光』のメロディ。

その音源は、

「……オマエじゃね？」

「あ！」

香月くんに言われてからやっと気づくほど、気が動転していた。音は確かに、僕のシャツの胸ポケットから鳴っている。

――ぼんやりしてて切るの忘れてた……！

「月島あー、またおまえか!? なかなかいい選曲してるじゃねーか！」

その後こっそりとしぼられてしまったことは、言うまでもない。授業が終わるまでの時間が、拷問のようだった。

やっと昼休みに入り、机の上にぐったりと突っ伏す僕。

そこに、いち早く朝純ちゃんが駆けつけてきた。

「ごめん優くん！ メール、わたしが送ったの。倒れたとき、どこかぶつけないかなって」

それは僕も当然わかっていた。なにせ、『月光』が流れるように設定してあるのは、EOMに関係している三人だけで、他には両親しか登録していない。

――それにさっき、心配そうな顔をしてくれてたし。

このタイミングでメールを送れるのは、同じ教室内にいる朝純ちゃんだけだ。

「気にしないで。電源を切り忘れていた僕が悪いんだ」

むくりと顔を起こして応える。朝純ちゃんに心配をかけるのは本位ではないから、平気な振りをした。

もともと、僕の弱いところをたくさん見ている朝純ちゃんには、隠しきれなかったようだ。ひとつ苦笑を浮かべると、

「ねえ、外に行く元気はないでしょ？ 今日は教室で食べよっか」

あっさり、僕の健康状態に配慮した提案をしてくれる。

「でも、純夜は？ 中庭で待ってるんじゃないか……」

「こっち来るついでに購買でパン買ってきてって頼むから、平気平気！」

答えるなり、ケータイを取り出してメールを打ち始める朝純ちゃん。

その恐ろしい速さで動く指先に見入っていると、不意に、

「うわあっ!？」

首筋にひどく冷たいものをあてられ、僕は変な声を出して椅子から跳びあがってしまった。

「びっくりした……」

すぐ後ろから聞こえた声に振り返ると、小さな氷袋を持った香月くんの姿を捉える。

「び、びっくりしたのはこっちだよっ」

「あー、すまんすまん。まさかそんなに驚くとは思わなかったからさ」

香月くんは屈託のない顔で笑うと、今度は僕の頭の上に氷袋を載せてきた。

「それより、さっきぶつけたとこ、ちゃんと冷やしておいたほうがいいぞ？ あとで腫れてくるからさ」

「え……それでわざわざ氷を取りに行ってくれたの？」

意外な優しさに、失礼ながら僕は驚きを隠せない。

すると香月くんも少し照れたのか、ふいっと僕から視線を外して答える。

「オレ、サッカーの試合でよく転ばされて頭打ったり、頭蹴られたりするからさ」

つまり、痛みがわかるだけに、放っておけなかったということなんだろう。

「ねえ、香月くん、だっけ。これからわたしの弟も来るんだけど、お昼一緒に食べない？」

メールを終えた朝純ちゃんが、どこか楽しそうに僕らのあいだに割りこんでくる。

「え？ いいのかっ？」

突然の提案でも、香月くんはパァッと顔を輝かせた。もしかしたら、朝純ちゃんのことを気になっていたのかもしれない。

「もちろん！ あー、でもそうしたら、女子がわたしひとりで淋しいな……」

朝純ちゃんはそのままで口にする、おもむろに後ろを振り返る。僕の席は窓側のいちばん後ろだから、朝純ちゃんの目には今、教室全体が映っていることだろう。

座っている僕からでも、机の位置を調整してお昼の準備をしているクラスメイトたちが見えていた。

朝純ちゃんは大胆にも、そこにいた『全員』に声をかける。

「ねえ誰か！ わたしたちと一緒に昼食食べない？」

ざわざわとしていた教室は一瞬静まり、そして――

「はいはい！ うちのグループ、全員そっち行っていい？」

「あ、ずりーぞ。おれらも入れてくれ！」

「あたしも～」

驚いたことに、みんな次々と名乗りをあげてきた。そして結果的には、まるで小学校の頃のお楽しみ会みたいに、机で大きな円を描く状態にまでなってしまったのだった。

――こ、これって明らかに、朝純ちゃんと純夜の人気だよなあ。

なにせふたりは、今までずっと僕が独占していたようなものなんだ。仲良くなりたいと思っていた人たちにとってみれば、これはまたとないチャンスと言えた。

結局、朝純ちゃんは男子のあいだに、純夜は女子のあいだに座らされ、僕とは離れた位置になる。でも、僕の隣には香月くんがいてくれたから、疎外感を覚えることはなかった。

「あ、そうだ。これのお礼、まだ言ってなかったよ。ありがとう」

純夜セレクトのパンを食べながら、頭に載せたままの氷袋の礼を言う。

「いって。それよりオレ、オマエのこと結構誤解してたわ。いつもひとりで、気配すら感じさせないようにしてたから、てっきり話しかけられたくないタイプのやつなんだと思ってた」

――……すごい、バッチリ読まれてる。

どうりで全然話しかけてこなかったわけだ。

僕は安心した。香月くんは別に、僕のことを嫌っていたわけではない。むしろその逆で、僕のことを尊重したいと思ってくれたからこそ、話しかけてこなかったんだ。そう考えてみれば、さっきの優しさもまったく意外ではなかった。

「――全然誤解じゃないよ。むしろものすごく合っているくらいだ。僕、中学の卒業文集で、『なりたいもの』の項目に『空気』って書いたくらいだから」

僕が真顔で告げたら、香月くんはプツと吹き出す。

「ハイセンスだなあ～。それで、なに？ あのふたりのおかげで変わったわけ？」

香月くんが手もとの箸で指したのは、朝純ちゃんと純夜のほうだった。

「多分……今、変わろうとしてる最中？」

「ふうん」

品定めするかのような目つきで、ジロジロと僕の顔を見てくる香月くん。

「な、なに？」

「いや――さっきの現国の時間、面白かったなあと思ってさ」

「それはもう、言わないで……」

と告げた先から、話題が飛び火してゆく。

「テレビのなかでしか見ないような、二段オチだったよね～。久々に超笑ったって！」

「あの水無月の顔も最高だったよ。怒りすぎてプルプルしてたもんね」

「月島くんって意外と面白いキャラなんだー」

「まっ赤になってるのがちょっとかわいかったね」

「でも、男なら言い返すくらいじゃねーとな。あんまスカッとしねーし」

「水無月があれ以上怒ったら血管切れるって！」

「やだそれ、ありそうで怖いからっ」

教室中で盛り上がりながら、みんなでとる昼食。

それは、遠足の日でもひとりで食べることの多かった僕にとっては、とても新鮮な経験で、楽しいものだった。

――話題にされてるのがかなり恥ずかしいけど！

その恥ずかしさよりも、楽しさが圧倒的に勝っていた。

「友だちになろうと」と、ふたりに言ってもらえたときみたいに。

恥ずかしさは簡単に超えられる感情なんだと、僕は改めて思った。

今思えば、朝純ちゃんがクラスのみんなを誘ったのは、僕のためだったんだろう。

その昼以降、僕自身がずっと距離をおいてきたクラスメイトたちと、少しずつだけど話をするようになった。

最初のうちはやっぱり、朝純ちゃんや純夜に関して訊かれることが多かった。でもそのうち、それは本人たちに訊いたほうが早いということがわかったのか、みんな僕には訊かないようになっていった。今はむしろ、高校生らしい他愛のない会話のほうが多い。

特に香月くんは、あれ以来よく僕に話しかけてくれて、

「なあ月島、オマエ、なんで最近いつも眠そうなの？」

返事に困るような問いまで投げてくる。

「まさか、夜にカノジョとイチャイチャばかりしてんじゃないだろうな!？」

「カ、カノジョなんていないよ！ てかそれ、授業中にあえてするような質問なのっ？」

ちなみにこれらはすべて、小声で繰り広げられている会話である。

「オマエの目を覚まさせてやろうと思って、話しかけてやってるんじゃない。――で？ 阿武サンとはなにもないわけ？」

「いつも純夜が一緒なのに、あるわけないって！」

「なるほど、弟がいなかったら押し倒したい、と」

「そんなこと言ってな――」

僕がそこで言葉をとめたのは、水無月先生が思いきりこちらを睨んでいたからだ。

――もうっ、香月くんてばわざと現国の時間からかってくるんだから……！

おかげで僕の肝はヒヤヒヤだ。顔はアツアツなのに。

水無月先生の視線から逃げるように、僕は窓の外に目をやった。今日も朝から天気がよく、空を流れる雲も少ない。きっと夜、出勤することになるだろう。

週末には満月になるのに、体調を崩していたら最悪だ。僕だってよくわかっているけど、授業中に堂々と居眠りしたり、保健室に寝にいけるほどの度胸は、まだなかった。

おかげで案の定、今夜も眠気をこらえての出勤になる。すっかり慣れているはずなのに、靴を履き忘れて縄梯子に足をかけるくらいだから重症だ。

――ふたりに相談してみたほうがいいのかな。

頭のなかでは思っても、ふたりが大変な思いをして戦っているのをいつも見ているから、そう簡単には口に出せない。

僕は頭を覚醒させるようにぶんぶん振ってから、フローリングの上に敷いた新聞紙の上で靴を履き、もう一度窓の棧に足をかけた。

降りる前に窓の下を見やっても、以前のように僕を待っているふたりの姿はない。それは、少し前から別々に現場へと向かうようにしていたからだ。

僕が合流すると、体力面で必ずふたりの足を引っ張ってしまうから。自分が卑屈にならないためにも、必要な申し出だった。それに、ふたりが先に着いていたほうが、なにかと都合がいいの

も確かなんだ。

僕の出番は基本的に、ふたりが相手の動きを完全に封じてからになる。そのあいだ、ただ観察しているだけというのはとても忍びなくて――だからといってうまく手伝う方法も見つからない僕は、ふたりが殴られるのをあんまり見たくないという理由もあって、わざと遅れていくことも何度かあった。

ふたりも、本当は気づいているのかもしれない。

それでもなにも言っていないのは、僕の気持ちをわかってきているからなのか。

わからないけど、そうであればいいと思う。

そんなことを考えながら、音を立てないように一歩一歩ゆっくりと、縄梯子をおりていった。

無事に着地してからは、音の出やすい門には向かわず、コンクリート製の低い塀を乗り越える

。――ええと、場所は東の幽霊屋敷のほうだったよな。

部屋を出る前に朝純ちゃんから送られてきたメールの内容を、頭のなかで確認しながら身体の向きを変えた。

「――っ……!？」

瞬間、思わず声が出そうになって、慌てて自分の口もとを両手で押さえる。

そこに、あまりにも意外な人物が立っていたからだ。

「よっ、月島。こんな夜なかにどこ行くんだ？」

まるで休みの日偶然街で出会ったかのように、Tシャツにジーンズというラフな格好で陽気に声をかけてきたのは――香月くん。

――今、夜なかの二時過ぎなのに!？」

夜遊びをするような人だとは思っていなかったから、よけいに驚いた。しかもこのタイミングでは、どう見ても僕を待っていたとしか思えない。

「なんで……」

友だちとの会話経験が絶対的に少ない僕は、その理由をうまく訊き出すような言葉を思いつけなかった。

短く呟いただけの僕を見て、香月くんがくすくすと笑う。

「そんなに驚かなくていいだろー？ オレがオマエの『夜の行動』に興味持ってるっていうのは、オマエだってわかってたんじゃないの？」

「そ、それはそうだけどー」

確かに今日、授業中にそのことを訊かれたのは憶えている。

――でもまさか、わざわざ確認に来るほど気にしてるとは思わなかったよ！

おかげで今夜の僕は、ふたりと合流できるかあやしくなってしまった。いくらなんでも、香月くんを伴ったまま行くことはできないだろう。香月くんにEOMが見えない以上、香月くんの中にはふたりが一般人を攻撃しているようにしか見えないからだ。かと言って、いきなりEOMのことを説明するのも憚られる。

『友だち』にはなれたと思うけど、その一線は簡単に越えていいものではないんだ。EOM

をずっと研究しているしめじさんですら、こうして改造される前の僕にそれを伝えることをためらっていたほど、デリケートな問題なんだから――。

香月くんの真意をはかろうと顔を見やっても、そこにはいつもと変わらない飄々とした表情があるだけで、照らしているのが日光か月光かくらいの違いしかなかった。それが逆に、今の僕にとっては怖い。

――一体なにを考えているんだ？

助けを求めるかのように、僕の右手は自然と、ハーフパンツの尻ポケットに入っているケータイを捉えていた。

「なに？ ケータイ？ やっぱりこれから、誰かとどこかに行くんだな？ オレも一緒に行っている？」

その動作を見逃さなかった香月くんが、言いながら僕に詰め寄ってくる。

少しの、違和感。

「い、いや……別にちょっと、ひとりで外に出たくなっただけだよ」

「ならオレも行っていいよな？ オマエに話したいこともあるし」

「えっ？」

――な、なんだろう？

これまで香月くんには感じたことのない強引さに引っかかりを覚えながらも、その内容が気になった僕は、おとなしく頷くことにする。変に断っても、よけい勘ぐられるだけだろうという気持ちもあった。朝純ちゃんたちが心配なのは確かだけど、僕が行ったところで戦いが劇的に楽になるというわけでもないんだ、今日は我慢してもらおう。

「――わかった。じゃあ早く行こう。家の前にいると落ち着かないからっ」

小声で急かして、先に歩き出す。

――仕方ない、とりあえず月の頭公園にでも行こう。

あまり遊び歩いたことのない僕にとって、よく知っているその場所が最も安心できる場所だった。EOMのことをちゃんと知るまでは、やっぱり怖いと思ってしまっていたけど、今はもう大丈夫だ。

「どこに行くんだー？」

後ろから、のんびりとした声が飛んでくる。

――気楽だなあ。

こっちはおちおちケータイにも触れられず、やきもきしているというのに。

「近くの公園だよっ」

足はとめずに顔だけ振り返って答えたら、自分でもはっきりとわかるほど、その苛々が声に表れてしまった。

当然香月くんも気づいて、少しあいていた距離を早足で詰めてくる。

「なに怒ってんだ？」

「お、怒ってはいないけど……」

いざ訊かれると強く言えない僕は、また語尾をごまかしてしまった。

——うう……。

「じゃあなんだ」と訊かれても答えられる自信がなくて、視線を前に戻す。

すると、隣に並んだ香月くんが勝手に語り出した。

「まあな、急に来たオレも悪かったよ。でも、連絡しようにもオマエのケータイ番号訊いてなかったし。それに、オレだって『あの人』に言われるまでは、わざわざオマエのそこ行こうなんて考えてなかったんだぞ？」

「え？」

——なんか今、すごく気になることを言われたような……。

言い換えるなら、香月くんを僕のところに向かわせようとした人物がいるということ？

気がつくとは僕は、足をとめていた。

「『あの人』って……？」

緊張からか、声がかすれる。

数歩僕を追い越した香月くんは、僕と向かいあうようにゆっくりと身体の向きを変えた。

香月くんのほうが僕よりも頭ひとつ分背が高いから、少しだけ顔を見あげるような形になる。

その奥には、見た目数センチほど左側の欠けている月が見えた。

今は陰になっている香月くんの口もとが、静かに動き出す。

「オレも名前は知らないんだけどさ、学校帰りにナンパされたんだ」

「ナ、ナンパっ？」

「そう、ナンパ。銀色の長髪をなびかせて、白いスーツをビシッと着こなした『美人』にな」

「え——」

どくりと、心臓が大きく反応した。

——ま、まさか……。

信じたくない予想が、脳裏に浮かびあがってくる。

ぎゅっと掌を握りしめたら、とっくに滲んでいた汗に気づいた。

「……その人、女性じゃないよね？」

どうか否定してほしい。

願いをこめて投げかけた問いは、

「あれ、ばれた？ やっぱオマエの知りあいなのか」

香月くんの明るい声音に、あっさりと砕け散る。

「……っ」

——どうしてしめじさんが!?

香月くんをそそのかし、僕のもとへと向かわせたのが本当にしめじさんならば、EOMと戦う僕らの役目を邪魔したことになるんだ。戦いの指揮を執っているのはしめじさんなのに、そんなことをする意味がわからない。するはずがない。

それはわかってる。

わかって、いるのに——

「そ、その人……香月くんになんて言ったの？」

耳を塞いで逃げ出したい気持ちをこらえてでも、訊かずにはいられなかったのは、朝純ちゃんと純夜のことがあるからだ。

——ここで僕が逃げたら、ふたりはどうなる？

もししめじさんが、普段ふたりに見せる顔とは違う顔を持っていたとしたら——僕がそれに気づかない振りをしたとしたら、ふたりはずっと騙されたまま。自らの身体が傷つくのもかまわずに、EOMの前に投げ出し続けるんだろう。

——そんなのは、嫌だ！

「教えてよ香月くん、なんて言ったんだ!？」

今度は僕が詰め寄って二の腕を掴むと、さすがに香月くんの表情も真剣なものに変わった。

「お、落ち着けて月島。どうしたんだ？ 別にたいしたことじゃない。『人がなにをしているのかわりたかったら、自分で見に行くしかない』みたいなことを言われただけだ」

「……それで、見にきたの？」

「ああ。——正直に言うと、本当は声もかけないで後をつけようと思ってたんだ。でもさすがにフェアじゃないと思ったのと、なんでそこまでしたいと思うのか自分でもよくわからなかったから……」

自分で口にしながらも、なぜか戸惑ったように首を傾げる香月くん。

——戸惑いたいのはこっちだよ！

掴んだ両手は離せても、つらい興味までは離せない。

——香月くん、もしかしてEOMに取り憑かれてるんじゃない……。

「自分でもよくわからない」という発言が気になって、そう予想してみたけど、いくら香月くんの身体を見やっても光ってなどいなかった。

おそろおそろ顔をあげ、もう一度、香月くんの表情を捉える。

——え……

笑っていた。

「なあ月島、もうひとつイイコト、教えてやろうか」

実に楽しそうな声音で、続ける。

「『きのこ』の名字は、『あくつ』っていうんだってさ。安く久しいに津波の津で、『安久津』」

「……は？」

——なんの話？

混乱したままの頭は処理が追いつかず、すぐには意味が取れなかった。

『きのこ』といえば、確かしめじさんが話していた、何代か前の月鳳院家当主のお嫁さん。

その名字が、安久津だって？

「……っ」

——なんでそんなこと、香月くんが知ってるんだ!？」

さっきしめじさんの名前を「知らない」と言ったのは、嘘なのか。しめじさんのことを知らずに、きのこさんのことだけを知っているなんてことはないだろう。

ぞくりと背すじに悪寒が走り、思わず一歩退いた。

僕の右手首を、素早く伸びてきた香月くんの左手が掴む。

「続きは、キミが月に手を差し伸べた、あのジャングルジムの上で話そう」

「な……っ」

香月くんの声で、しかし今までとは確実に違う話しかたで、『彼』は告げた。

——だから、どうして知ってるんだっ!?

しめじさんと双子にしか話していない、僕の秘密。

「き、きみは何者なんだ!？」

問いかけた僕をきれいに無視して、彼は僕に背を向けた。そして手は放さないまま、本当に公園へと行くつもりなのか、歩いてゆく。

強い力だ。

逆らおうとしても、無理だった。それは、朝純ちゃんたちが持っている怪力と似ているようにも思えた。

(二)

――もしかして香月くんも、EOMに改造された存在なのかな。

月の頭公園にたどり着くまで、僕は必死に考えていた。

実はしめじさん以外にもEOMを研究している人がいて、しめじさんから協力者を奪おうと、悪い噂を流す作戦なのではないか？ そのために香月くんは僕に近づき、仲間に引き入れようとしているのかもしれない。

「しめじさんこそが敵である」という可能性を、突き詰めて考えることはとてもできなくて、他の答えばかりを探していた。

僕はとうとう、彼の目的地であったジャングルジムの上まで引っ張りあげられる。

「っ……」

肩が外れてしまうかと思うくらい痛かったけど、それよりも心が痛かった。

なんだかんだ言って、百パーセントは信じ切れていない、自分の心が。

「さあ着いたよ、月島優。ここは本当に、月が近くて気持ちがいいね」

香月くんを装うことは諦めた口調で、しかし表情は相変わらず飄々と、『彼』は告げた。それから不思議そうに、俯いたままの僕の顔を覗きこんでくる。

「ずいぶん静かだね。なにを考えているんだい？」

声音には、僕の反応を楽しんでいるような色もあった。

誰もいない深夜の公園。月の下、ジャングルジムの上で、向かいあうふたりの少年。

はたから見たら確かに、滑稽で仕方がない場面だろう。相手が朝純ちゃんや純夜だったら、僕だってきっと笑い出していると思う。

でも今、とてもそんな気になれないのは、彼の目的がまったくわからないからだ。

――わからないものは、やっぱり怖いんだ。

僕がかつて、ひとりの人間から学んだ恐怖が、僕の動きを鈍くする。心も身体も、まるで自分のものではないかのように、ただそこにあるだけ。彼の顔なんてとても見られなかった。

「僕、は――」

かすれた声は、続かない。その先の言葉さえ、用意できていなかった。

そんな僕の様子に呆れているのか、彼が「ふう」と大きな息を吐いた音が聞こえて、

「おかしいな、緊張しているのはボクも同じなんだけど。ねえキミ？ 先に言っておくけど、ボクはキミの敵ではないよ。キミがもし、右腕を改造されたことについて、心から嫌がっているのなら敵なのかもしれないけれど」

「――えっ？」

その奇妙な言いまわしが気になって、反射的に顔をあげた。

僕の視線の先で、彼は無邪気な笑顔をつくる。

「その腕、改造したのはボクだから。うまくいったらろう？ 得意なんだ、人間の改造」

そう告げる彼は、やっぱり人間ではないんだろうか？

考えれば考えるほど、動悸はおさまらない。せめて震える手だけはなんとかしたくて、たくさ

んの正方形を形づくっている鉄の棒を握りしめた。

「きみは、EOMなのか……？」

かろうじてしぼり出した声音は、目の前のまったく光っていない身体に、ちゃんと届いたらしい。

「そうだよ？」

彼はまぶしそうに目を細める。

「もっとも、キミたちが戦っているEOMとは、存在が違うけれど」

「存在が違う？」

「わかりやすく言えば、性格の違いかな」

「せ、性格っ？」

——EOMにも個体ごとに性格の違いがあるのか……。

冷静に考えてみれば、そうおかしなことではないんだ。でも、EOMと人間はまったく違う存在なんだと思いきまされていた僕にとっては、目から鱗が落ちるような答えだった。それについて、しめじさんからも聞いていなかったからなおさらだ。あるいは、しめじさんもまだ知らないことなのかもしれない。

「だからさっき、言っただろう？ 『きのこ』の名字は『安久津』だったんだって」

「そっ、それがどうしてここに繋がるのっ!？」

思いもよらないところに戻ってきたから、僕はつい身を前に乗り出してしまった。

すると彼は、「あはは」と口を大きく開けて笑う。その笑いかたも、香月くんとはまったく違っていた。

「そこが重要なんだよ、月島優。『安久津きのこ』という、名前そのものが。ほら、ポカンとしてないで、繰り返してみればいい」

「繰り返す？ 『安久津きのこ』を？」

「そう。『安久津きのこ』を」

繰り返す。

ふたりと初めて会ったあの日、繰り返したせんだみつおゲームのように。

ごくりと喉の奥を鳴らしてから、大きく息を吸い、口を開いた。

「安久津きのこ、安久津きのこ、安久津きのこ、安久津きのこ、安久津きのこ、安久津きのこ、安久津きのこ、安久津きのこ、安久津きのこ、安久」

「ストップ！」

不意に割りこんできた声に、動きをとめる僕。

すると彼は、

「続きは？」

自分が邪魔をしたくせに、さも物足りないように問いかけてきたんだ。

「続き？」

「そう、『安久』の続き」

——一体なんなの？

問いの内容は理解できても、それを訊く意味がわからない。

だから僕は、いっそなにも考えず口にした。

『あく』の続きは――

「『つきのこ』……えっ？」

自分の発言に、そこにこめられていた意味に、自分で驚く。

「気づいた？ 『安久津きのこ』は『悪月の子』でもあるんだ。それこそ、今キミたちがEOMと呼んでいるものの正体だよ」

「な……っ」

「そしてボクたちは、『善月の子』。だからキミたちの敵ではないってわけ」

「ま、待って！ つまりEOMは――いや、きみの言うところの『月の子』は、もともと二種類だったということなのっ？」

「そのとおり。人間にも善人と悪人がいるようにね」

彼はそこまで答えると、ひとつ、長い息を吐き出した。

「順を追って、ちゃんと話そう。ボクもこのことを人間に話すのは初めてだから、うまく説明できないかもしれないけれど」

そう告げた彼の頬は、少し上気しているように見える。さっき「緊張しているのはボクも同じ」と言っていたのは、あながち嘘ではないらしい。

それから彼が語った真実は、しめじさんの仮説を大きく覆すものだった。

「月光のなかから生まれた月の子は、当初意思を持った存在ではなかった。でも、永い時間が月の子たちに考える力を与え、心を得た月の子たちは、月光を渡って地球まで遊びに行くようになったんだ」

そう、遊びに来るだけなら、まだよかった。しかしその一部が、人間に取り憑いてイタズラをするようになり、大きな事件や事故が起こってしまったのだという。

「人間に月の子の姿が見えていないことは、目の前を飛んでも無反応であることからわかってきた。それなのに干渉をするのは、人間側で対策を取ることができない以上、望ましくないのではないか――そう訴える月の子と、人間で遊びたい月の子の意見は対立し、やがて完全に分かれてしまった」

「それが、善月の子と悪月の子？」

あいの手を入れた僕に、月光に照らされた彼は神妙な表情のまま頷く。

「でも、リアルな身体を持たないボクたちに、戦うすべはなかった。人間のように兵器を使うことも、互いの身体を乗っ取ることもできない存在だったから。向こうは相変わらず人間に取り憑いて好き放題やっていたし、ボクたちはボクたちで、それに巻きこまれてしまった人たちをなんとか助けたいと思って動いていた」

「た、助けるって具体的にどうするの……？」

「なんとなく気づいているだろう？ 改造して、怪我を治してしまうということだよ」

自嘲気味に笑いながら告げた彼に、僕はハッと息を呑みこんだ。

「それでなんとかやり過ごしていた。情けない話だけれど、『干渉したくない』と言いつつも、

ボクたちとて干渉せずにはいられなかった。そしてやがて、向こうがさらに大胆な策に出たことによって、こちらも手段を選んでいる余裕がなくなってしまったんだ」

——大胆な、策？

その答えには、訊くまでもなく気づいていた。

「まさか……悪月の子が、きのこさんを月鳳院家に送りこんだこと？」

「正解」

息も吸わずに、彼は続ける。

「同じ存在同士では戦えないなら、人間に殺してもらおうと考えたわけだ。でも、そのためには月の子を発見・研究できる人材が必要だった。そこで目をつけたのが、当時すでに莫大な財力を持ち、もとより月に好意的だった月鳳院家だ。そしてもうひとつ、この土地にも選ばれた理由がある」

彼はそこで一度口を噤み、僕のほうをじっと見てきた。

「な、なに？」

「——月島優」

「はいっ!？」

またフルネームで呼ばれて、声をひっくり返らせながらも返事をする。

「キミの名にも、『月』の字が入っているだろう？ 名とは『もの』の本質を示すもの。たとえそれが、他の存在によって与えられた名であっても、名づけられた『もの』はその名に寄り添うようにできている」

「は……？」

「わからないか？ 名に『月』の字——あるいは『つき』の字や音を持つ者は、月の影響を受けやすくなるんだ」

「え——そ、それって、簡単に言えば取り憑かれやすいということっ？」

——だから月近市が選ばれたのか……！

たまたま月鳳院家があったから、という理由だけではないんだ。

偶然なんかどこにもなくて、なにもかもがひとつの目的のために繋がっていた。

目の前の彼はもちろん、否定なんかしない。

「そのとおり。『安久津きのこ』だって、もともとは普通の女性だった。ただ不幸にも、悪月の子と同じ音を持っていたから——心のうちにまで深く入りこまれ、自我を奪われてしまった」

「そ、その状態で嫁いで、子どもを生んだ……？」

「確実な協力者を増やすためにね」

「っ……」

自然と、両手で口を押さえる。

おぞましい話だと、思った。

人間で遊びながら、人間を味方に引き入れようとするなんて。

それに、彼の言うことが本当ならば、僕らはずっと悪月の子に見張られて生活していたようなものなんだ。そんな日々でも平穩に感じられていたのは、なにも見えていなかったから。

—あ……！　そうだ。

EOMが見えるようになって、僕はこの市に意外な危険が潜んでいることを知った。ではなぜ見えるようになったのかと言えば、右腕を改造されたからだ。そしてさっき彼は、その腕を改造したのは自分だと言った。ということは、つまり—

「じゃあきみは、悪月の子の血を引くしめじさんに対抗するために、人を改造して戦う力を与えているということなの？　でもそれだと、しめじさんが今EOMと戦う指揮を執っていることの意味がわからないよね……」

持てる力を総動員して、冷静に言葉を繋ぐ。

これは僕がちゃんと理解しておかないと、しめじさんのもとにいるふたりを守れないかもしれない。

僕にとっては、それも恐怖と同じくらい怖いことだった。怖いことに、なっていた。

期待をこめて告げた僕の言葉を、彼はあっさりと否定する。

「意味はわかるさ。ちゃんと説明できるから。実のところ、向こうの作戦は完璧に成功したわけではないんだ」

「えっ？」

「向こうも焦っただろうけどね、直接きのこが生んだ子でも、外部からの協力なしに意識を操ることは難しかったようだよ。だから、子が生まれるたび体内に他の仲間を呼びこんで、少しずつ悪月の子の力を強めていった。その結果生まれたのが、幼少時代から月に対して並々ならぬ興味を持っていたしめじだった」

「あ……」

「でもね、そのしめじだって完全に操られているわけじゃない。キミが言ったとおり、しめじは今EOMと戦う動きをしている。それは、しめじ本人が自らの意思でボクたちの作戦に乗ってきたからだ」

「作戦？」

今度はこくりと頷いた彼。

「しめじをそのまま放っておけば、いずれ向こうの作戦どおりになってしまうかもしれない。そんな危機感を抱いたから、いっそしめじをこっちの仲間に入れてしまおうと思ってね。そのために、当初は人間を助けるためにしていた改造の目的を変え、悪月の子に対抗する力を与えるようにした。そしてしめじにわざと、悪月の子—EOMという存在を外側から気づかせたんだ」

「ああ……そういえばしめじさん、朝純ちゃんたちと会ったからEOMの存在に気づけた、みたいなことを言ってたなあ」

最初から、EOMが見えていたのは『改造された者』であって、しめじさん自身ではなかった。たとえ悪月の子の血を引いていても見えないほど、まだ弱い力なんだ。

「『見える』人間がいれば、その存在に気づける。存在がわかれば、研究はできる。よって、しめじが立てた仮説は、間違いなくしめじ自身の考えによるものなんだ。その結果、EOMと戦おうとしているのも」

「それなら、悪月の子の血がしめじさんに及ぼしている影響は……？」

「今のところは、ときおり意識を乗っ取られる、くらいだろうね。キミがボクに改造された翌晩、EOMがキミのもとに行ったのも、きっと悪月の子の指示だ。与えられた力にキミが気づく前に、さっさと倒してしまおうと思ったのかもしれない」

「あ、あれ？ でもあのとき、朝純ちゃんと純夜が来て——ああ、そっちは『しめじさん』の指示なのか」

同じ身体に、正反対の目的を持った意識が入っているなんて、実に面倒な話だ。

「それだけじゃないよ。この身体の持ち主が声をかけられたのだって、しめじの意思ではないはずだ」

彼が言いながら指差したのは、自分の——香月くんの身体だった。

「きっとこんなふうに、キミを足どめしたかったんだろう。ボクはそれに気づいたから、どうせ足どめをするなら本当のことを伝えておこうと思って、ちょっと身体を拝借したというわけだ」

「でもきみ、他のEOMみたいに光っていないんだけど……」

ずっと気になっていたことを尋ねると、彼は「ははっ」と笑う。

「言っただろう？ キミたちが言っているEOMとは悪月の子なのだと。悪意を持った月の子は、ボクたちと決定的に違うんだ。『どこが？』と訊かれてもうまくは説明できないのだけれど……とにかく、キミたちの目には悪月の子側だけが見えるようにしてあるんだよ」

「ああ、そうなんだ。それなら間違っって善月の子側を攻撃する心配がないから、安心だね」

その言葉を、僕は深く考えたうえで口にしたわけではなかった。なんとなく、思ったままに告げたんだ。しかし彼が、それこそ満月のように目を丸くしたから、

——あれっ？ なにか変なこと言ったかな……。

と気になってしまう。

思わず首を傾げた僕の仕草がおかしかったのか、彼は小さく吹き出した。

「信じてくれるんだね、『ボク』の言うことを」

「だって——」

本当はまだ、彼の言うことのすべてを信じたわけではない。それでも「安心だ」と思ってしまったのは、彼の言葉がとても真摯で——また、今までEOMに取り憑かれた人々とはまったく違い、こうしてあたりまえに会話が成立していたからだった。

——同じEOMとは、とても思えないんだ。

それに、なによりも朝純ちゃんと純夜のために、しめじさんのことを信じたかった。

「……僕にはもう、守りたいものがあるから」

身体を張って守ることはできなくても、心なら。

裏切らない、裏切らせない心くらいは、持っていたい。

目を逸らさずに見つめたら、彼の目が、今度は三日月のように細められる。

「やっぱり、キミに話してよかったよ。他の人たちはね、EOMと戦うかわりにお金をもらったり、生活の面倒を見てもらったりして、しめじに絶対的な信頼をおいている人がほとんどなんだ。だから話しても信じてもらえないかもしれないし、しめじに話が伝わってしまう可能性

もあった」

「伝わると、やっぱりまずいの？」

「そりゃあね。ボクたちはしめじの意思を仲間に引き入れたわけだけけれど、優勢なのはまだ向こうなんだよ。なにせ向こうは、しめじの身体や他の仲間たちを、丸ごと人質に取っているようなものだから」

「ああ、そっか……」

「キミは自分から『手伝う』と言ったんだろう？ 見返りももらっていないようだったし、なによりキミはしめじ以上にあの双子のことを心配しているように見えたから——そんなキミなら、ちゃんと話を聞いてくれると思ったんだ。ボクの予想は間違いじゃなかったね！」

嬉しそうに顔を綻ばせた彼に、僕の顔は熱くなった。

別に褒められたわけでもないのに、なんだか、嬉しい。心がくすぐったい。

できることならば、もう少し話をしていたいとまで思ってしまったんだけど——

——って、そんな場合じゃなかった！

そうすぐに思い出せたのは、尻ポケットに入れていたケータイがぶるぶると震え出したからだ。闇夜に音が響いても困るためマナーモードにしている、月光の音楽は流れなかったけど、間違いなく朝純ちゃんからだろう。

彼もそれに気づいたのか、ジャングルジムの上で身をよじると、ぴよんと先に飛び降りてしまった。

「きっと終わったんだ。双子もキミのことを心配しているかもしれないね」

「ま、待って！ 帰るの……？」

そのまま歩いていってしまいそうな雰囲気だったから、前のめりになった僕は慌てて尋ねる。

すると、振り返った彼の眉尻はさがっていて、ひょいと肩をすくめた。

「心配しなくても、この身体はちゃんとベッドまで送り届けてから抜けるよ。明日になれば、なにも憶えていないはずだ」

「そ、そっか。ありがと」

自分でも、なにに対するお礼なのかわからないまま口にしたら、やっぱり笑われる。

「あはっ。それを言うのはこちらのほうだよ、月島優。ボクの長話につきあってくれてありがとう。結局ボクが言いたかったのは、しめじの言動にはよくよく注意しておくようにと、それだけなんだ。別に、善月の子をみんな救ってほしいなんて思ってはいない。キミはキミにできる範囲で双子のことを考えて動いていれば、きっと結果的に悪月の子を邪魔することにも繋がるはずだから。それを期待しているというわけ。わかった？」

改めて確認を投げかけられ、僕は下を覗きこむようにしてこくこくと首を振った。

それなら僕にも充分できそうさ。

情けないけど、心のなかでそっと安堵の息を吐く。

大きすぎる重荷を背負わされるよりも、ずっといいと思えた。

そんな僕の心の内を見透かすように、彼はなおもまっすぐに見あげてくる。

「そうさ、お礼にもうひとつだけ教えてあげよう。あの双子の力は、本来ならば不死身ではない

んだ」

「えっ!？」

そうして彼が最後に語った真実は、しめじさんのなかにいる『誰か』の存在を、はっきりと裏づけるものでしかなかった。

(一)

翌朝学校に行くと、隣の席の香月くんはいつもどおり登校してきていた。僕と顔を合わせても、あいさつを交わしただけで別段変な感じはしなかった。

——ちゃんと記憶は消えてるみたいだな。

ただひとつ、いつもと違ったのは授業中。懲りずに水無月先生の時間に声をかけてきたんだけど、

「相変わらず眠そうだな～、月島」

「……香月くんだって、今日は人のこと言えないじゃないか」

そう、朝から何度もあくびをしていたんだ。

僕が教科書で口もとを隠したままツッコミを入れると、また大きなあくびで返してくる。

「ふぁ～……そうなんだよ、なんか今日異様に眠くってな」

——すみません、半分くらいは僕のせいです。

口に出しては謝れないから、心のなかで手を合わせておいた。

身体は正直だ。深夜に出歩いていたせいで、やっぱり睡眠が足りていないんだろう。

もちろん僕だって、人のことは言えない。

——今日はいつも以上に眠い！

昨日は家に戻ってからなかなか寝つけなかったんだから、あたりまえだ。

あのあと結局、僕は朝純ちゃんたちと合流しなかった。

香月くんのなかの『善月の子』と別れてからかかってきた電話に対し、ひとつの嘘をついたからだ。

「ご、ごめん！ 今、電話の音で起きたところなんだ……」

『え～っ？ 優くん、寝坊しちゃったの!? あ、この場合は寝坊とは言わないかな。でも珍しいね、今まではちゃんと時間どおりに来れてたのに』

——うっ。

痛む心を抑えながらも、さらに続ける。

「ここのところずっと出勤が続いてたから、多分睡眠が足りなかったんだと思う。本当にごめん！」

『ううん、仕方ないよ。こっちはもう終わったから、大丈夫。優くんはそのまま寝てて？ ——こら純夜、うるさいっ！——あ、ごめん優くん。また明日、学校でね！』

朝純ちゃんはまったく僕を責めなかった。純夜は後ろでなにか文句を言っていたようだったが、朝純ちゃんが配慮して僕には聞こえないようにしてくれたんだろう。

それから僕は自分の部屋に戻って、今後のことをあれこれと考えていた。

僕が善月の子から聞いた話は、おいそれと人に話せる内容ではない。だから僕は、しばらく自分のなかにこの秘密を抱えていなくてはならないんだ。しめじさんの前に立っても、今までと同じように接することができるようにしなければ。

——でも、ちゃんと覚悟をつくらなきゃ、そんなのは無理だ。

僕の弱虫な心がすぐに音をあげて、洗いざらい喋ってしまわないように。

自分は『月の子』たちにどう向きあっていくのかを、考えておく必要があった。

もちろん、そう簡単に答えが出る問題ではなかったけど。

不意に僕の胸もとが光り出して、慌てて胸ポケットのケータイを取り出す。光がばれないようにと、教科書の陰に隠した。僕としては、授業中はやっぱりケータイの電源を切っておきたかったんだけど、朝純ちゃんも純夜も口を揃えて「そこまでしなくていい！」と言うので、そっちに従っていた。どうもふたりは、授業中もあれこれとケータイでやりとりをしているらしい。朝純ちゃんはいちばん前の席なのに、やっぱりすごい度胸だ。

――なんだろう？

ケータイを開いて確認すると、朝純ちゃんからのメールだった。

件名：ちょっと考えてみたんだけど

本文：もしよかったら、出勤がありそうな日はわたしたちの部屋に泊まりに来ない？ そうすれば学校から帰ってすぐ寝られるから、寝不足も少しは解消されると思うよ。

――ああ、そっか。

朝純ちゃんたちが深夜に活動していても平気なのは、慣れているからだけでなく、夕方に寝て深夜に備えているからだったんだ。

でも、両親が家にいる（父さんも基本的に夕方には帰ってくる）僕の場合は、夕方に寝ていたらどう頑張っても不審がられてしまうだろう。

それを見越してのメールに、僕はただただ感心した。朝純ちゃんは本当に、気配り屋さんだ。クラスのなかでも最初からうまくやっていたし、やっぱりみんなから好かれるのはそれ相応の理由があるんだ。

僕は、隣であくびをしつつニヤニヤしている器用な香月くんの視線を感じながらも、返事を打ちこんでゆく。

件名：ありがとう

本文：昨日みたいな失態をもうしないためにも、そうさせてもらうよ。ふたりがうちの母さんに取り入れてくれたおかげで、頼みやすくなったし。

多分そうでなければ、心配性の母さんが外泊を許すわけがなかった。それに、そもそも僕が母さんに切り出すこともできなかつただろう。

感謝をこめた指先で、送信ボタンを押した。

するとすぐに、返事がくる。

件名：「取り入れた」なんて……

本文：悪いことしてるみたいな表現はやめてよ(笑)。今日の夕食、ご馳走になっていい？ そのか

わり、明日は当主さまに豪華なお弁当用意してもらおうから！

どうやら、母さんに伝えることまで手伝ってくれるつもりのようなのだ。多分半分は、母さんの手料理が目的なんだろうけど。

ケータイの画面に向かって、思わず笑ってしまう。

しめじさんが所有するマンションの一室で暮らしているというふたりは、普段コンビニ弁当やジャンクフードばかりを食べているらしい。病気も怪我もしない身体を武器に、食生活は乱れまくっているのだと、たまにしめじさんから愚痴メールが届いていた（それはさすがに悪月の子ではなく、しめじさん自身が送ってるものだと思う）。

――豪華なものを食べたいときはしめじさんのところに行くけど、普通の手料理を食べられる場所は貴重だって言ってたもんなあ。

僕の母さんは、正直言ってそんなに料理がうまいほうではない。でも、それで喜んでもらえるのなら僕だって嬉しい話だ。

件名：わかった

本文：じゃあ母に連絡しておくよ。なにが食べたい？

「つううきいいいいいいまあああ〜っ」

「えっ!？」

突然目の前から響いた声音に、僕は驚いて顔をあげる。

水無月先生が、これ以上ないくらい顔を赤らめて仁王立ちしていたのだった。

――メールが嬉しくて、こっちを忘れてた！

(二)

放課後、掃除当番だった僕が役目を終えて教室に戻ると、朝純ちゃんだけが待っていた。

「あれ？ 純夜は？」

いつもの流れだったら、すでに純夜も合流しているはずなのに。そうじゃないということは、純夜も掃除当番だったのか。あるいは――

「……もしかして純夜、まだ怒ってるみたいだった？」

そう、昼間一緒にごはんを食べたときも、純夜の態度は素っ気なかったんだ。僕が昨夜ふたりのもとに駆けつけられなかったことに、だいぶ腹を立てているようだった。

ふたりだって毎晩同じように出動しているんだから、怒るのは当然のことだ。それでも朝純ちゃんが怒っていないのは多分、あくびばかりしている教室での僕の様子をよく知っているからなんだろう。

「ほんと、子どもっぽい弟でごめんねー」

朝純ちゃんは寂しそうに眉尻をさげながら告げる。

「ううんっ、うまく謝れない僕も悪いんだし」

「だいぶ落ち着いては来たみたいなんだけどね。先に帰ったのも、優くんのことを怒ってるからというよりも、部屋を片づける目的のほうが大きそうだったもの」

「あ、そうなんだ」

ほんの少しだけ、安心した。

「さあ優くん！ さっさとおばさんを説得して、わたしたちの部屋に帰ろっ」

そんな僕を励ますように、朝純ちゃんは力強く宣言すると、僕の手首を掴んで歩き出す。相手に逃げる気持ちがなくとも、こうするのが朝純ちゃんの癖のようだった。ずっと純夜とふたりきりだったから、離れていかないように、ひとりきりにならないように、いつも手を繋いでいたのかもしれない。

そうして僕らは、ふたりだけで僕の家に向かった。

いつもと違い、ふたりきりでも変に緊張しないで済んだのは、昨夜善月の子と交わした最後の会話を思い出していたからだ。

「あの双子の力は、本来ならば不死身ではないんだ」

あのあと彼は、こう続けた。

「あるいは逆に、キミのその右腕も、不死身であると言えるかもしれない」

「ええ？ どういうこと？」

「双子が持っている力も、キミの右腕と同様に、『想像を具現化する力』だということだよ。双子は怪我をした瞬間に、怪我をしていない健康な自分の姿を思い浮かべて、怪我を治しているんだ」

「な……っ」

「ボクが与えたその力に、双子が最初に気づいたのは、こんなふうにも月のきれいな夜だった。預けられていた孤児院を抜け出して、遊びに行こうとしていたところ、弟がバイクに轢かれてしま

ったんだ。さいわい命に別状はない程度の怪我ではあったけれど、痛がる弟を見て、姉はこう言った。『痛くないように、痛くないときの自分を想像して！』」

「ああ——」

「姉にとってそれは、苦肉の策だったんだらう。普通なら、想像したくらいで痛みは治まらないからね。しかし弟は、痛みから逃れたい一心でそれを実行し、その結果力に目覚めた。姉も、自分が怪我をしたときにやってみたらできたから、双子は自分たちの力を『すぐに怪我が治る力』なんだと思いこんでいるわけだ」

「確かに朝純ちゃん、『優くんたちみたいに身体を変化させることはできないけど』って、はっきり言ってたよ……。全身人でなくなることを恐れてるようだったから、試したこともないのかもしれない。でも、僕に右腕の使いかたを教えてくれたしめじさんは、きっと気づいてるはずなのに……」

「だから、『悪月の子』が陰で双子に言い聞かせているんだらうね。双子が全身を自由に使えるようになったら、強さは今の比じゃなくなる。それは向こうにとって都合の悪いことだから——やっぱり、本当のことなんだ。

その話を聞いて、僕は改めてそう感じたのだった。だって、あんなにもふたりのことを大切に思っているしめじさんなら、ちゃんとした力の使いかたを必ず伝えるだらう。そのほうが、ふたりにとっても安全だからだ。でもそうしないということは、そこにしめじさん以外の意思が働いているということ。

納得するためには、そう考えるしかなかった——。

「——どうしたの？ 優くん、さっきからちらちらこっち見て」

無意識に視線がいつてしまっていたのか、朝純ちゃんが少し頬を赤らめて訊いてきた。

「えっ？ い、いや、なんでもないよ！ う、うまく説得できるかなあって、考えてただけ」

「あら、この朝純さまだけじゃ不安？ 言うておくけど、純夜より口はうまいよ！」

「ふ、不安なんか全然ないよ！ お願いします朝純大明神さま!!」

ごまかすように両手で拝んだら——効果は絶大だったようだ。

「わたしと純夜、前にいた学校のレベルが低くて、今の授業に全然ついていけないんです。だから、優くんに泊まりがけで家庭教師をしてほしいなあ～って、思ってるんですよ！」

そんな朝純ちゃんの大嘘を、母さんはあっさり信じて、外泊を許してくれた。

「そのかわり、学校が終わったら必ず一度は家に来なさいね？」

という、条件つきだったけど。

夕食後、これさいわいと荷物をまとめ、さっそくふたりのアジトへと移動する。

「やっぱり毎日来るってのは、無理そうだね」

「うん。でも大丈夫。たまにちゃんと眠れるくらいでも充分だよ」

そんな会話をしながら住宅街を三分歩いて、すぐに着いた。本当に近くだ。

「——ってここ、この辺じゃいちばん高いマンションだよねっ!？」

茶色いレンガ風の外壁が、塔のようにすらりと建っている。

「うん、当主さまの持ちものだからね～」

朝純ちゃんは入り口の装置にカードキーをかざしながら答えた。それから、

「さあっ、さっさと部屋に戻って寝るよ！」

気合充分だ。寝るために気合を入れるというのも、変な話だけど。

なかのエレベーターで最上階の十五階まで行き、朝純ちゃんはいちばん手前のドアの前で立ちどまった。ドアの鍵を開け、部屋のなかに入る。

続いて入った僕が、最初に感じたことは――

――さ、寒いっ!?

エアコンが利きすぎているのか、部屋のなかはスーパーの冷凍食品コーナー並みに寒かった。純夜はずっとこんな寒い部屋のなかに住るのだろうか？ 下手すれば風邪を引いてしまいそうだと。

「ささ、入って一優くん。まっすぐが居間ね」

告げた朝純ちゃんの視線を追うと、そこには仁王立ちをしている純夜がいた。驚いたことに、これだけ寒いなかでも半袖短パンだ。不死身なんだと思いこんでいるゆえに、体調管理はずさんなのかもしれない。

純夜は僕と目が合うと、「俺は先に寝る！」と宣言し、さっさと左側にあるドアに入って行ってしまった。そこが純夜の寝室らしい。

「もうっ、純夜ったら！ いい加減機嫌直しなさいよ!!」

そのドアの前まで行って、朝純ちゃんは怒鳴りつける。それから僕のほうを振り返った。

「なにしてるの！ 早く入ってっ」

「は、はい！」

同じ調子で言われ、慌てて靴を脱ぐ。

朝純ちゃんの後ろをついていくと、通された居間はマンションの一室と思えないくらいに広く綺麗な部屋だった。むしろ、一軒家である我が家よりも広いくらいだ。

そして寒い。やっぱり寒い。

「ね、ねえ……ちょっとエアコン強すぎない？ これじゃあ風邪を引くまではいかななくても、身体に悪いと思うよ」

荷物を床におろし、両手で自分の二の腕を押さえるようなポーズをしながら訴えると、朝純ちゃんはやっと僕が寒がっていることを悟ってくれたようだ。

「そう？ じゃあ十八度くらいにあげておくね」

「って、それ設定温度!? 冬じゃないんだから、二十八度くらいでいいんだよっ？」

「えー？ 二十八度ってすごく暑くない？」

「いやいやっ、それが省エネ温度だから！ それよりさげるとしても、せめて二十五度くらいまでにして……うちではエアコンってあんまり使わないから、実は苦手なんだ」

僕が涙目で訴えると、朝純ちゃんはかろうじて頷いてくれた。

「優くんの体調がいちばん大事だからね、そっちに合わせるよ。でも優くん、その室温で眠れるの？」

「……その言いかたじゃ、寝るときも部屋をガンガンに冷やしてたんだね……」

確かに快適なのかもしれないけど、身体には毒だろう。僕は生まれて初めて、人の日常生活を不安に思ってしまった。

その後、僕らもそれぞれ睡眠に入った。朝純ちゃんは純夜の部屋の向かいにある自分の部屋で。僕は居間のソファで。

――まだ八時か……眠れるかな。

いつも十二時すぎに寝ていた僕にとって、かなり早い時間帯だった。それでも、数日間の睡眠不足のおかげか、あっさりと寝入ることができて――深夜朝純ちゃんに起こされるまで、一度も目を覚まさずに済んだ。

「優くん、大丈夫？ 起きられる？」

「う……ん、起きる、よ」

僕に配慮してくれているのか、小さなオレンジ色の灯りだけがついている部屋のなかで、むくりと上半身を起こした。予想していたとおり、今夜もEOMが出たようだ。

「もうすぐ当主さまから場所の連絡が来るはずだから、それまでに準備して。洗面所はあっちね。はい、これタオル」

まだぼんやりとしている僕とは裏腹に、朝純ちゃんはすでにテキパキと動いていた。

僕がその様子に焦りを感じながら、

「じゅ、純夜はっ？」

やっぱりテキパキと動いているんだろうかと――機嫌は直っているだろうかと尋ねると、

「あいつは今、トイレで踏んばってる」

「……は？」

「仕事前のひと踏んばりが快感なんだって」

「……………」

それをけろりと言ったのける朝純ちゃんに、どう応えたらいいかわからなくて無言を返した。

すると朝純ちゃんは、純夜っぽいちょっと意地悪な笑顔で告げる。

「あ、邪魔しちゃ駄目だよ？ 好きなアニメキャラのポスターに向かって、今日の勝利をお祈りしてるとこだから」

なるほど、トイレの壁に貼ってあるらしい。僕も、自分の部屋の壁に好きな漫画のキャラクターのポスターを貼っていたから、親近感を持った。さすがに祈りはしないけど。

踏ん張っている純夜の邪魔をしてこれ以上怒られないように、抜き足差し足で隣の洗面所へと入る。

手早く顔を洗うと、頭のなかもだいぶスッキリしてきた。

そうこうしているうちに、朝純ちゃんのケータイが鳴りはじめる。

「――えっ？ 月見山(つきみやま)？ 山のなかなのっ？」

驚いた朝純ちゃんの声に、僕も驚いた。山なんて、こんな時間に入るには危険だからだ。

急いで居間に戻ると、朝純ちゃんがテーブルの上に地図を広げながら話を聴いている。

「うん、うん……わかった。わたしたちは先に向かうから。うん、大丈夫。こっちには優くんがいるし。じゃあ」

突然名前を出されて、ドキリとした。

――確かに、学校の遠足とかで何度ものぼったことはあるけど……。

こんな時間に行ったことなどない。遭難をしない自信は、残念ながらなかった。

「あの、朝純ちゃん――」

僕がそれを伝えようと口を開いたのと同時に、朝純ちゃんも話し出す。

「今回は当主さまもあとから来てくれるって！ さすがに山は子どもだけじゃ危険だもんね」

それを耳にしたとたん、覚悟をしてきたはずだったのに、ぞくりと背中が震えた。

「あ、そ、そうなんだ。よかった……」

口ではそう言いつつも、本当に来てくれるだろうかという不安がよぎる。しめじさんの心の強さを信じるしかない、自分もどかしかった。

「でも、行きの道案内はよろしくね？ 山の入り口まで行けば、EOMたちの動きから場所がわかると思う」

そんな僕でも頼ってくれる朝純ちゃんを裏切ることにはできないから、ぎゅっと両手を握りしめて応える。

「――うん、任せてっ。南の国道を東のほうに行くんだ。ただ、歩きだと三十分くらいかかっちゃうかもしれないけど」

「じゃあ自転車で行こ！ 優くんはどっちかの後ろに乗ってね」

朝純ちゃんはそのまで告げると、トイレに向かって「早く出てきなさいよ純夜！ もう行くよっ」と叫んだ。

「どっちか」と言っても、僕が朝純ちゃんのほうを選べるわけがない。改造されたおかげで怪力なんだとわかってはいても、やっぱり女の子だから。でも、純夜とケンカしている手前、朝純ちゃんに「こっちに乗って」と言われかねない状況だったから、僕もトイレのドアに向かって叫ぶ。

「今日はちゃんと頑張るから！ 早く出てきてよ、純夜」

「うるせえ！ 言われなくても出るってんだっ」

ちゃんと出てきてはくれたけど、ちょっと逆効果だったかもしれない。

それからさっそく三人揃って部屋を出ると、月見山へと向かって自転車をこぎ出す。

僕はあれこれ文句を言われつつも、なんとか純夜の後ろにおさまることができた。

「で？ どっちなんだ、優。さっさと教えて！」

「あ、あっちだよ！」

後ろから純夜をナビゲートして、人どころか車もほとんど見えない道路を走ってゆく。

――やっぱり力が強いのがって便利だなあ。

山に近づくに従って、なだらかなのぼり斜面も徐々にきつくなっていくんだけど、ふたりにとっては全然苦ではないようでスイスイ進んでいた。

やがて目的の山が近づいてくると、周囲を飛んでいるEOMの姿も見えてくる。

「それにしても、なんで山なんかにいるんだ？ 駆けつけるこっちの身にもなってほしいぜ、まったく！」

自転車をこぎながら文句を言いはじめた純夜に、隣を走る朝純ちゃんが、
「EOMに寄生されてから、山に入った可能性もあるからねえ。普通こんな時間に山に行くって言ったら、思いつくのは自殺か殺人だけだ」

「うはあ……」

どちらにしても最悪の事態だったから、寒くもないのに鳥肌が立った。

山の入り口、アスファルトが途切れるところで自転車から降り、EOMたちの様子を確認しながら、今度は徒歩で山に入ってゆく。光源として、大きめの懐中電灯を持って来たものの、まったく舗装されていない山道は歩きづらく、まっすぐに歩くのも苦勞した。のぼりになっているため、息が切れるのも早い。

前を歩くふたりはまだまだ余裕があるのか、近づいてくるEOMをいつもどおりに攻撃しながら進んでいた。本当に、すごい体力だ。

もっとも、ふたりには敵のもとについたあとも活躍してもらう必要があるから、そうでなければ困るんだけど。

そうして山中をしばらく歩いていると、

「――優くんはそこでストップ！」

突然朝純ちゃんに声をかけられ、反射的に足をとめる。

道中僕とはほとんど目を合わせなかった純夜も、今だけは違っていた。

「ちょうどいい、優、その太い樹の陰に隠れてな。そこからなら見えるだろ？」

右手で樹を指しながら、あごでは犯人がいるらしい方向を示す。

言われたとおり、山道の脇にある巨木の陰から奥のほうを覗きこむと、大量のEOMが人型をつくっているのが見えた。眼鏡の奥で目を凝らすと、取り憑かれている人物が見覚えのある制服を着ていることに気づく。

――な……っ。

あるはずがないことだと、思ったかった。でも仕方ない。

彼らだって、人間なんだから。

「驚いたな、警察官か」

「さすがに、警察官で取り憑かれた人は初めて見たね」

うろたえる僕とは裏腹に、いつもと変わらない冷静さを見せるふたり。おそらくこれまでも、相当な修羅場をくぐってきたからこそ、なんだろう。

――経験値の違い？ ……ううん、それだけじゃない。

僕は警察官から目を離して、ちらりとふたりのほうを見た。

ふたりとも、爛々と輝かせた瞳でEOMの塊に見入っていて――やがて、そのまま走り出してしまう。

「ちょ……っ、待って！ 危ないよっ!!」

ふたりには、『恐怖心』というものがまるでなかった。

約一ヶ月間一緒に過ごしてきた僕には、それがよくわかっていた。

わかっていた、つもりだったのに。

僕はその場に立ってられず、樹の幹にすがりつくようにして座りこんだ。

――拳銃を持ってる相手に対しても、正面から向かっていくなんて……！

あの人が山にやってきたのはおそらく、拳銃を撃っても見つかりにくいからだろう。音が響いたところで、誰もいない山のなかならばはしない。もし誰かに聞かれても、猟をしていると思われてスルーされる可能性だってある。

つまりあの人は、撃つ気満々なんだ。あるいは、拳銃でなにかを撃ちたくて、その気持ちをEOMに利用され、ここまで来てしまったのかもしれない。おびき寄せられた可能性もあるだろう。でも今の僕には、それをふたりに伝える手段がなかった。

EOMに取り憑かれた警察官は、ふたりの姿を捉えるなり、案の定拳銃を取り出して発砲する。

「俺は、俺は……もっと撃ちたいんだあああああーっ!!」

威嚇のつもりなのか、ろくに狙いも定めなかった。

――すごい音だ……。

僕ならそれだけで逃げ出してしまいそうなのに、ふたりはまったく怯えた様子もなくどんどん近づいていく。

すると警察官のほうも、自分からふたりのほうへと近づきはじめた。

「的になってくれるのか？ なぁっ!？」

動きながら再び拳銃をかまえ、撃つ。その弾道は、当然ながら速すぎてまったく見えなかった。

。

しかし――

「うぁ……っ!？」

呻き声をあげたのは、純夜だ。

――当たった!？」

すぐに駆け寄っていきたいのに、震える脚はまったくとっていいほど動かない。僕のこの場所からは、純夜が倒れた位置は見えなかった。

ただ、まだ立っている朝純ちゃんのほうはよく見えていて――朝純ちゃんは純夜のほうを一瞥したあと、それでも果敢に相手の右腕へと飛びかかってゆく。おそらく拳銃を奪い取ろうとしているんだろう。

しかし当然ながら、向こうもそれを警戒しているのか、器用によけて朝純ちゃんの胴体を蹴りあげた。

「く……っ!」

そばの樹にもものすごい勢いで打ちつけられた身体のせいで、上から葉が何枚か落ちてくるのが見える。まだ全然枯れ木の季節ではないのに。それくらいの衝撃だったんだ。

「朝純ちゃん……!」

脚が動かないことも忘れ、とっさに出ていこうとしてしまった僕は、その場でつんのめって前に転んだ。落ちそうになった眼鏡は、鼻に引っかかってなんとかとどまる。

こんなふうになんとか転んだだけでもあちこち痛いのに、ふたりの痛みはそれの比ではないだ

ろう。

それに――本当は、不死身なんかじゃないんだ。

今は僕だけが知っている、その真実。もし銃弾が頭や心臓にあたり、即死してしまったら、健康な自分を想像する時間なんてない。命はそこで終わってしまう。

――早く、早くあの人を倒さなきゃふたりが……！

立ち向かうことをやめないふたりをとめられないのなら、そうするしかない。

ただ、今の位置では遠すぎて、一度で当てる自信が持てなかった。一発目を失敗すると、それだけで僕の位置がばれ、二発目を狙うのが難しくなってしまう。だからこそ、なるべく確実に決めなければならないんだけど――

――怖いけど、もう少し近づかないと！

地面に倒れこんだのをいいことに、僕はほふく前進でもっと近い樹のもとへと進んでいく。

脚が動かなかったら手を動かせばいい。僕の右腕はきっと、僕が思うほど怖がってはいないから。

ふたりが再び動き出していることは、耳を澄ませばわかった。僕だけ後れをとるわけにはいかない。

緊張や疲労、さまざまなものが入り交じって、口もとからはぜいぜいと息が漏れる。それでも、僕に与えられた一瞬のために、声だけは出さなかった。

やっとたどりついた、さっきよりも幾分細い樹の幹に掴まりながら立ちあがる。

――ふたりはっ？

素早く陰から顔を出すと、ちょうどふたりが殴られたところだった。

満月が近いだけに、相手の力は相当強いようだ。

「……っ」

おもちゃのように投げ捨てられる姿を見て、必死に口もとを押さえる。

顔を戻して幹に背をつけ、心を落ちつかせようと胸に手を当てた。

――よく見えることは、全然いいことばかりじゃないんだ。

初めてEOMと対峙したとき、僕は眼鏡をしていなくて、目の前でなにが起こっているのかよくわからなかった。でも、眼鏡をして手伝うようになって、ふたりの戦いぶりをちゃんと見られるようになり――同時に、ふたりがどんなふうに痛めつけられているのかを知った。

――痛いのは、僕じゃないのに。

こんなにも、胸が苦しい。

ふたりの表情が、あまりにも楽しそうだから？

――そんなのきっと、痛みを忘れてる振りをしてるだけなのに……！

それをやめさせるには、僕がEOMの親玉を撃ち抜くしかない。

もう一度、強く心を練りあげて、木陰から顔を出した。そして、右腕も。

しかし、ちょうどそのとき――

「あ……！」

警察官の銃口が、尻もちをついている朝純ちゃんのほうを向いていた。

「もっと、もっとだ……もっと撃たせてくれ!!」

僕はなにを考える余裕もなく、その場から飛び出す。

「朝純ちゃん……っ！」

僕が朝純ちゃんの上に覆いかぶさったのと、銃声が聞こえたのは、同時のことだった。

(三)

右肩が、熱い。

痛いよりも、燃えるように熱かった。

でも今はまだ、それを気にするときじゃない。

「優くん!？」

悲鳴のような声で僕の名を呼んだ朝純ちゃんを無視して、そばに立っていた純夜に素早く目配せをする。敵も僕の登場に驚いているようだったから、今がチャンスなんだ。

啞然とこちらを見ていた純夜も、僕の視線でそのことに気づいたようで、そっと警察官の後ろにまわりこむ。

僕はその動きを確認しながら、自分の右手を拳銃に変化させ、互いに拳銃を向けあうような格好になった。まるで早撃ち勝負だ。

人間の目つきをしていない警察官の口もとが、楽しそうに歪む。指に力をこめたのがわかった。

その一瞬を見逃さず、純夜が後ろから拳銃を蹴りあげる。

「なに……っ!？」

拳銃は警察官の手を離れ、鳴った銃声は月に食われた。

かわりに僕が、音のない弾を放つ。これまでと比べたらだいぶ近い位置から撃ったおかげか、相手の身体が拘束されていなくても、きちんと狙うことができた。

警察官の身体から、いちばん大きなEOMの光が消えると、それに集まっていた小さな光がどんとどんと逃げてゆく。やがてその身体を支えるものはなくなり、地面にどさりと崩れた。

そこまで見届けてからやっと、僕の全身から力が抜ける。今さら脚が震えて、立っていられなくなった。ついでに右肩がものすごく痛い。

「く……っ」

その場にぺたんと座りこむと、びっくりするほど元気な様子でふたりが近づいてくる。

「優くん！ やっぱりかすってた!? 大丈夫？ わたしなら撃たれても平気なんだから、庇ってくれなくてもよかったのに～」

「でもすげー進歩じゃん！ 今まで全然EOMに近寄れなかったのに、こんな距離まで出てきて撃つなんてさ。俺、ちょっと見なおしたぞ。昨日の寝坊も許してやる！」

どこか楽しそうにも見えるふたりに、僕は全然我慢できなくて――

「いい加減にしろよ、ふたりとも！」

右手は力加減を間違えそうで怖かったから、左手でふたりの頬を順番に叩いてやった。

ぱちくりと目を見開いたふたりに、怒鳴ってやる。

「いくら死ななくたって、痛いものは痛いだろ!? かすっただけの僕がこんなにも痛いのに、銃で撃たれて痛くないわけがない。――いや、銃じゃなくたって、殴られて痛くないわけがないんだ！ どんなに痛くない振りをしてたって、僕にはわかるよ。だって殴られる瞬間も、ちゃんと見てるから――」

僕はすがりつくように、両手でふたりの腕を掴んだ。

「――お願いだからさ、もっと自分の身体を大切にしてよ！　じゃないと、僕のほうが先にどうにかなってしまいそうだ……！」

そんなつもりもないのに涙があふれてくるのは、ふたりの服があまりにもボロボロだからだ。身体がもう治っていることはわかっているけど、そこに残された痛みは消せない。

僕の記憶からは、消えない。

「優くん……」

僕の手を握りしめ、戸惑った声をあげる朝純ちゃん。

一方の純夜は相変わらずで、

「……ったく、わかったわかった。悪かったな。次からは気をつけるからさ。おまえ、こんなことで泣くなよ！　ほんっと女々しいなっ！」

「だ、だって……ふたりが傷つくと、僕も痛いんだ……っ」

それでも必死に訴えると、なんと朝純ちゃんが覆いかぶさるようにして僕に抱きついてきた。

――う、うわ……っ。

右肩の傷は痛い。痛いけど、正直それどころではなかった。身体中の力がすべて、心臓を動かすことに使われているかのように、僕のなかでうるさく鳴り響く。

「あ、朝純、ちゃん……？」

「――ありがとう、優くん。わたし、わたしも、なるべく無茶しないように気をつけるから」

一体なにに対しての礼なのかは、わからなかった。

でも、朝純ちゃんの声にも涙の色が見えたから、無粋に訊き返すことはできなくて。

「うん……僕がいつもふたりのことを心配してるんだってこと、忘れないで！」

強く告げたら、耳もとでくすりと笑った声がした。

翌日の放課後は、ふたりの部屋ではなく自分の家へと戻った。

ふたりは「今日もうちに来ればいいのに」と言ってくれたけど、僕としてはやっぱり両親のことも気になるからだ。

いくら大変なことに巻きこまれたからって、そっちばかり気にしてはいられない。

僕がどちらについていくのかという問題は、今もそのままになっている。

誰もなにも言い出さないから、僕はまだ逃げつづけている。

それでいいのかと、自問しながら――

「――あれっ？」

自分の部屋でベッドに寝っ転がり考えこんでいた僕は、突然鳴り出したケータイに思わず声をあげた。開いてなかの画面を見ると、しめじさんからだった。

――な、なんだろう？

まさか、『悪月の子』が直接僕に……？

そんなふう嫌な予想が脳裏をよぎったのは、まだ夕方にもなっていない、EOMが出るにしては早すぎる時間帯だったからだ。EOM以外の用事で、今までしめじさんが直接僕に電話してきたことなんて一度もなかった（愚痴はいつもメールで送ってくる）ため、よけいに違和感があったんだ。

「も、もしもし？」

通話ボタンを押して、おそるおそる声をかける。まだ電話で話すことには慣れていなくて、どう出るのが正しいのかよくわからないから、いつもそんなふうになってしまうのだった。

『優くん？ 今平気ですか？』

応えたしめじさんの声音がとても穏やかだったから、そっと息を吐く。少なくとも緊急事態というわけではなさそうだったし、別段いつもと違うようには感じなかった。

「あ、はい。大丈夫です」

これはしめじさん本人だ。

なんとなくわかったから、落ち着いた僕はベッドの上で居住まいを正す。

それを待つかのように少し間を置いて、しめじさんはゆっくりと話し出した。

『実は、あなたにお礼を言っておきたいと思ったのです』

「……はっ？ な、なんですか!？」

『昨日、ふたりに言ってくれたでしょう？ 「もっと自分の身体を大事にしろ」と』

「え……」

確かに言った。でもそのときまだ、しめじさんはいなかったはずだ。あのあとに、ちゃんと来てくれたしめじさんと合流して、僕らは無事下山できたんだけど――

「もしかしてしめじさん、あのとき聞いてたんですか……？」

本当はずっと前から山にいて、僕らを観察していた？

だとしたらそれは、しめじさんの意思というよりも、悪月の子の意思に思えて、背中が凍った

。しめじさんならきっと自分で、無茶をしようとするふたりをとめると思ったからだ。

しかし、電話の向こうのしめじさんは、悪びれもなくさらりと答える。

『昔から、聞き耳を立てるのは得意なもので』

くすりと、笑った気配さえした。

『私もね、前々から不安に思っていたのですよ。あのふたりは、不死身であるゆえに恐怖心がなく、自分の身体を少しも大事にしようとしな。しかし、EOMがいつ満足して実験をやめ、ふたりに与えた力を取りあげてしまうかわかりません。それなのに、あんな戦いかたをしていたのでは、いつか本当に死んでしまうのではないかと心配でした』

「しめじさん……！」

——やっぱりこれは、間違いなく『しめじさん』だ！

僕はそう確信した。なぜなら、僕が見落としていた不安さえ拾いあげていたからだ。

そう、痛みや即死の心配だけじゃ足りない。善月の子が力を取り上げる理由はないだろうとわかっている、いつ不測の事態が起こるかなんてわからないんだ。また、悪月の子が逆改造をする可能性だってないとは言えない。

今さらながらに、さっきまでとは違う冷たさが背中を襲った。

そんなことにならなくてよかったと、心から思う。

『もちろん、私とて何度もふたりに言い聞かせてはいたのです。ただ、私はふたりが不死身であることを利用している張本人でもありますから、説得力が皆無だったのでしょ。ふたりはまったく聞き入れませんでした』

心から残念そうに続けたしめじさんの言葉に、僕は気づかれないよう小さく笑った。

——なんか、その様子が瞳に浮かぶなあ。

特に純夜は、意地になって聞かないだろう。多分、しめじさんが困っているのを見て、楽しんでる部分もあるんだ。

『ですから私は、いずれ、ふたりの意識を変えてくれるような人と組ませてやりたいと、ずっと思っていました。今回その試みがうまくいってくれて、本当に喜んでいるのですよ』

しめじさんはそこで一度切ると、大きく息を吸う。

『ありがとうございます、優くん。あなたの両手は、今後もあのふたりを変えてくれるでしょう。これからも、よろしくお願いしますね』

「……っ」

とっさに、返す言葉が出てこなかった。

こんなにもふたりのことを想っている人が、しめじさんでないはずがない。疑ってしまったことが恥ずかしくなった。

それに——

——もともとは、僕のわがままなのに……！

これ以上ふたりが傷つくのを見たくないという僕の気持ちが、その言葉を引き出したんだ。

それがまさか感謝されるようなことだなんて、全然思いもよらなくて——褒められた経験の乏しい僕は、すっかり焦ってしまう。

「あ、あの、僕……僕があれってわけではないけど、その、できる限り頑張りますからっ！」
自分でもなにを言っているのかよくわからない言葉を紡ぎながら、ケータイに向かって何度も頭をさげた。

今度ははっきりと、しめじさんの笑い声が聞こえる。

『ハハ、そう、あなたはそれでいいのですよ。そのまま、あのふたりの毒気を全部抜いてしまいなさい。それがきっと、あなたの成長にも繋がることでしょう』

まるでどこぞの先生みたいなことを口にして、しめじさんは通話を切った。

その後の僕はといえば、しばらくになにもない宙を見てボーッとしていた。

なんでだろう。

胸の辺りが、とてもあたたかい。

今思えば、ふたりの頬を叩くなんて大それたことをしてしまって、恥ずかしい気持ちでいっぱいなのに。ふたりとも、今朝からさっき家の前で別れるまで、いつもとまったく変わらない調子で接してくれた。そのことが、奇跡のように思える。

――思いきって、言ってみてもいいのかな。

どうしても嫌で、我慢できなかったら。

もしその発端が、自分のわがままであったとしても、結果的になにかを動かす力になるのなら、無駄なことではないのかもしれない。

僕は初めて前向きに、そんなことを思った。

どうしても、嫌なら。

自分の気持ちを伝えなければ、相手はわからないんだ。

普通の人でも、改造されていても――僕らはテレパシストではないのだから。

「……訊いてみようかな……」

決意が揺るがないように、口に出した。

――訊いて、ちゃんと自分の頭で判断して、決めよう！

僕はベッドから飛びおりて、少しよろける。ずっと正座していたため、やわらかいベッドの上とはいえ脚が痺れていたようだ。

でも、それが治るまで待ちきれなくて、そのまま部屋を出てゆっくりペースで階段をくだっていった。

今日はまだ、父さんは帰っていない。

母さんはきっと台所にいるだろうとあたりをつけて向かうと、案の定夕食の準備をしている最中だった。

「母さん、ちょっと訊いていい？」

声をかけると、包丁で長ネギを刻んでいた母さんは手をとめてこちらを向く。

「なに？ どうしたの？ もしかして、今日もアズジュン来る？」

「来ないけど……危ないから、ちょっと包丁置いて」

「あらなによ？ 気になるわねえ」

母さんはおどけながらも、素直に従ってくれた。

その優しさが、僕の背中を押す。大きく息を吸って、勢いで口にした。

「気になるのはこっち！ ……なんで離婚しようと思ったの？」

「え……っ？」

まさか今、このタイミングでそのことを訊かれると思っていなかったんだろう。母さんの目は大きく見開かれ、動揺の色が見える。

――あたりまえ、か。

これまで、わざとさけてきた話題なんだ。僕にも関係があるはずなのに、見ない振りをしてきた。

「詳しくは、訊かないから。いちばん大きな理由だけでいいんだ」

母さんの腕に軽く振れ、落ちついて告げると、母さんはハッと我に返ったようだった。

ふいと僕から目を逸らし、刻まれた長ネギのほうを見る。

「――あの人の、浮気よ。同じ女性と何度も会っているらしいの」

「『らしい』ってことは、母さんは見てないんだ？」

「でも確実よ！ 『見た』って人が何人もいたし、会っていること自体はあの人も否定しないんだからっ」

「あ、そうなの？ なら、父さんにも訊いてみる」

わざと、軽く答えるように努力した。

――浮気なんて、かなり意外な理由なんだけど……。

だからといって僕がこの場で深刻さを見せてしまったら、母さんだってどう対応していいかわからなくなるだろう。帰ってきた父さんと、いきなりケンカを始めてしまうかもしれない。それでは意味がないんだ。

それじゃあ、僕の気持ちが伝わらない。

僕が冷静でいなければ、それこそ巻きこまれるだけだ。

「訊いて、どうするの？ あなた、丸めこまれるんじゃないわよっ？」

僕が父さんのほうにつくのではないかと心配に思ったのか、今度は母さんが僕の腕を掴んできた。

ゴツゴツした母さんの手は、家の仕事がどれほど大変なものなのかを教えてくれる。

――父さんの浮気が本当なら、僕は離婚をとめない。

自分の気持ちをきちんと固めるためにも、父さんに話を訊かなければならなかった。

「大丈夫だよ、母さん。僕は、本当のところを知りたいだけだから」

両親にすらあまり見せたことはない、自覚している笑顔をひとつおいて――僕は家をあとにした。

父さんと外で落ちあうなんて、初めてのこともかもしれない。

「父さんが家に帰る前に会いたい」とケータイにメールを送ったら、すぐに返事が来た。

僕が待ちあわせの場所に指定したのは、月の頭公園。そこなら父さんにだって楽しい思い出が残っているはずだから、落ちついて話せるだろうと思ったんだ。

だんだん空がオレンジ色に染まっていくなか、ブランコに腰かけて待っていると、父さんが妙に慌てた様子で公園に飛びこんできた。

「父さん！ こっち」

僕が手をあげて呼ぶと、ハンカチで顔の汗を拭きながら駆け足で近づいてくる。

――なにかあったのかな……？

いつもは冷静な父さんが髪を振り乱し、あからさまに表情を変えていたから、僕は続けて問いかけた。

「どうしたの？ そんなに急いで」

「それはこっちの台詞だ！ 私が家に戻る前に会いたいなんて……母さんとなにかあったのか!? おまえがメールを送ってきたんだ、よほどのことだろうっ？」

なるほど、僕がめったにしないことをしたものだから、不安にさせてしまったらしい。

「とりあえず落ちついてよ、父さん。母さんとは、別になににもないからさ。ちょっと父さんに、訊きたいことがあっただけなんだ。ほら、座って？」

僕は落ちついた声音で、父さんに隣のブランコをすすめた。

すると父さんは、まだ戸惑った表情をしながらも素直に従ってくれる。

久々に見た父さんの横顔は、僕の記憶のなかのそれよりも、だいぶ老けているような気がした。シワが増えたからだろうか。それでも、眼鏡の奥の瞳はやっぱり僕と似ているから、僕は将来こんなおじさんになるんだと思うと、少し複雑な気分だった。嫌というわけではないけど。

「――それで？ 訊きたいこととはなんだ？」

すぐに喋り出さない僕に痺れを切らしたのか、父さんが先に切りこんでくる。

本当は、なにを訊かれるのか薄々気づいていたのかもしれない。

「父さんは、どうして離婚しようと思ったの？」

僕がその問いを投げかけると、父さんは「やっぱりか」とでも言うように深い息を吐いた。

「……どうして、このタイミングで訊いてくる？ 『悪くないほう』についていく気か？」

「馬鹿なこと言わないでよ。本当に離婚するなら、僕にとって『悪くないほう』なんかないんだ」

「優……」

即答した僕の答えが意外だったのか、父さんは大きく目を見開く。

――そんなの、あたりまえなのに。

普通の家庭なら、両親の離婚を望む子どもなんていないだろう。ただうちの場合は、僕がそれについてなにも意見を言わなかったから。両親は僕がそれを手放しで受け入れていると、思っ

いたのかもしれない。

だから今、ちゃんと言うんだ。

僕が伝えることで、変わるなにかを期待して――

「もちろんね、理由しだいではやむをえないとも思うよ？ でも、理由を訊かないでおとなしく受け入れるのと、理由を知ったうえで許すのとでは、やっぱり全然違うから。ちゃんと理由を確認したうえで、自分の意思で答えを出そうと思ったんだ」

今までこんな真面目な言葉を、父さんに向けたことはなかったかもしれない。

僕は少し照れくさくて、それを隠すようにブランコをこぎ出した。

ギィギィと金属の擦れる音が、僕と父さんとのあいだの溝を埋めてゆく。

「母さんは、父さんが浮気をしてるって言ってた。でも、僕は父さんが僕とよく似た性格をしているのを知ってるから、とてもそんなことができるとは思えないんだ」

「ああ……浮気はしていない。だが、母さんはまったく信じてくれないんだ。だから私は、信じてくれない母さんに失望して、離婚を考えた」

「原因は、父さんが何度も同じ女の人と会ってるからでしょ？ その人のことを、母さんに詳しく説明するわけにはいかないの？」

「……………」

父さんは答えなかった。

揺れながら横を見ると、真剣な眼差しはまっすぐに僕を捉えていた。

まるで、その理由が僕にあるかのように。

「と、父さん……？」

――一体なにを隠してるんだ？

さっきまでは落ちついていた僕の心も、とたんにざわめきはじめる。

父さんは小さなため息をつく、僕と同じようにブランコをこぎ出した。

「――親にさえ遠慮して、本心を言えないおまえに、まさかそんなことを問われるとは思っていなかったよ。友だちができたことといい、ちゃんと前に進んでいるんだな」

苦笑を含んだ声音が、揺れながら僕の耳に届く。

「今のおまえなら、あの『摩月篤紀(まつき・あつのり)』ともうまくやれるかもしれない」

「え――？」

突然出てきた名前に、僕の思考は一瞬とまった。

再び動き出すと同時に、カァッと頭に血がのぼってくる。

「なに……？ どうして今、『篤くん』の名前が出てくるのっ？」

足を地面につけて、強引にブランコの揺れをとめた。立ちあがって父さんの前に行くと、そこにはなにかを覚悟した瞳があった。

「営業先で偶然、篤紀の母親と会ったんだ。それで相談を持ちかけられていた」

「相談？ 相談ってなに!？」

「落ちつけ優。簡単に予想できたことだ。篤紀は今、高校へはほとんど行かずに、悪いやつらとつるんで夜中遊び倒しているらしい」

「……うん、篤くんがあのままの性格だったら、やりそうなことだね」

なにしろ彼は、小学生時代に僕を振りまわした張本人。いろんなイタズラや軽犯罪の片棒を担がされては、罪をなすりつけられた。内気な僕にできた初めての『友だち』だったのに、最初はそう思っていたのに、あとに残ったのは楽しい思い出ではなくきついトラウマだった。

なんとなく近づいてくる存在は怖い。

そんな『友だち』なら、いないほうがマシだ。

そうして僕は、クラスメイトたちから距離をおき、空気になりたいと思うようになったんだ。

「でも、それでなぜ父さんに相談？ 更生させたいなら、それこそ警察とかに行ったほうがいいんじゃないの？」

彼の両親はとっくに離婚していて、母親しかいないのは知っていた。だからそう尋ねたんだけど、父さんはあっさりと首を振る。

「篤紀の母親が頼ってきたのは、私にじゃない。——おまえだ、優」

「へ……？」

「おまえが篤紀のことを忘れられずに、ずっと友だちをつくれなかったように。篤紀はおまえのことが気になって、素直になれずに悪事を続けているのだと、母親は言っていた」

「……どういうこと？」

ついていけずに首を傾げると、父さんは小さく笑った。

「親の欲目も多分にあるだろうが、篤紀も昔は優しい子どもだったらしい。それが、悪い友だちができて振りまわされたおかげで、すっかり性格が変わってしまったそうだ」

「それって——」

「そう、最初は振りまわされる側だったのに、振りまわすほうになってしまった。篤紀は、おまえの前にもあとにもたくさん子どもたちを巻きこんでいたんだ」

父さんはそこで一度言葉を切ると、前に立っていた僕の両肩をがっちりと掴んだ。

「だがな、おまえしかいなかったんだと。篤紀の身がわりにされ警察に捕まっても、おまえだけが『篤紀のせいだ』と言わなかった」

「あ……」

言われてすぐに、そのときのことを鮮明に思い出す。

僕が最後に彼と一緒にやったのは文房具店での万引きで、囮にされた僕だけが捕まった。根が正直者で、警察に嘘をつくなんて考えられなかった僕は、素直に共犯者の名前を口にした。

普通ならそこで、「脅されてやった」とつけ加えるところだろう。

——でも僕は、篤くんのせいにはしなかったんだ。

強く言われてやったのは確かだったけど、「やる」と決めたのは僕自身だったから。それに、本当に嫌なら「やりたくない」と断ったり、彼から離れることもできたはずなのに、それをしなかったのだから間違いなく僕自身だ。だから、たとえ責められてもそこだけは譲れなかった。あのときも僕は、自分の意地を通すために口を噤んだんだ。

そしてその日を境に、彼は僕から離れていった。

「母親の話じゃ、篤紀のなかでもそのことが引っかかっているらしい。おまえに謝りたいと、口

には出さないが思っているはずだ、と言い張るんだ。だから、おまえに素直に謝ることができたら、昔の篤紀に戻るかもしれない、とな。――まあ無茶な期待だが」

「それで父さんを通して、僕を呼び出そうとしてたんだね。そんなこと母さんに話したら、絶対オオゴトになっちゃうし」

「そう……おまえが警察にいるなんて知らされたときも、本当に大変だったんだぞ？ 普段が穏やかなだけに、取り乱すととまらなくて泣き叫ぶからな。今回のことだって、もし母さんにばれたら泣いてとめることだろう。母さんもずっと、友だちをつくらないおまえのことを気にしていたんだ」

「うん……」

父さんと母さん、どちらの気持ちもわかるから、胸の奥がじんわりとあたたかくなった。

これは、ふたりともが僕のことを想ってくれたゆえの、すれ違いなんだ。

「父さんとしては、おまえがもう少し大人になったら会わせてみるのもいいと思っていた。そうしなければおまえ自身も前に進めないかもしれないと、思うところがあったからな」

「だから母さんには話せなかったんだね」

「そういうことだ」

「……なら、僕が篤くんと仲直りできたら、離婚しなくて済むよね？」

「えっ？ そ、それはそうかもしれないが……無理して行くこともないんだぞ？」

僕の両肩を掴んでいた父さんの手が、少し緩んだ。

その手に自分の手を――今はもう以前とは違う右手を重ねて、決意を紡ぐ。

「大丈夫、無理なんかじゃないよ。話を聞いて、僕自身が行かなきゃいけないと思ったから」

「――そうか。じゃあ、頑張ってこい！」

次の瞬間、父さんが見せてくれた誇らしげな笑顔が、僕にとっても誇らしかった。

(三)

件名：満月の前日なのにごめん

本文：ちょっと用事があって出かけるから、今夜はそっちを手伝えないかもしれない

僕がそんな内容のメールを送ると、すぐに折り返し電話がかかってきた。

『夜なかの用事ってなに？ 優くん、わたしたちには言えないこと？』

いつもの明るい口調とは違い、深刻そうな声音で訊いてくる朝純ちゃん。

僕は少し迷ったけど、事情を話してみることにした。

――あわよくば、ついてきてもらえるかも……

そういう期待もあった。やっぱりひとりだと、土壇場で逃げ出してしまいそうだったから。

すると話を聞きおえた朝純ちゃんは、電話の向こうで大声を張りあげた。

『水くさいじゃない！ そんなの、一緒に行くに決まってるよ！』

ただし、EOMが出るまでのあいだね――と、小さくつけ加える。

僕は自分の顔が緩むのを、とめられなかった。

「ありがとう、それで充分だよ」

そんなわけで、夜の十二時を過ぎた頃、ふたりと落ちあい月台埠頭へと向かった。

――本当に、漫画みたいなワルだよなあ。

夜遊びをしているという彼は、埠頭で仲間とバイクを乗りまわしているらしい。爆音を響かせたり、海に落ちるぎりぎりのところでブレーキをかけるという危ないゲームをしたりしているそう。プチ暴走族といったところか。

月台埠頭までは少し距離があるため、今回も自転車で移動することにした。それに自転車なら、EOMがどこに出ても対応しやすいという面もあった。ちなみに今回は、僕も自分の自転車に乗っている。

――ふたりに遅れないよう、頑張っついでいかないと！

と、気合だけは人一倍あったんだけど、当然ながらふたりが僕の速度に合わせてくれた。

埠頭までの道のりは、深夜であることもあって車の少ない静かな道路が続いていた。しかし、だんだん埠頭に近づくにつれ、若者の声や爆竹、ロケット花火などの音が聞こえはじめる。彼だけではなく、かなりの数の若者が集まっているようだ。

――若者若者って、僕も充分若者なんだけどさ……。

どうも人種からして違う気がする。うまく彼を見つけられるといいんだけど。

さっそく不安を感じながらも、さらに近づいていく。

そのとき、どこからか悲鳴があがった。

それと同時に、前方から数人の若者が走ってくる。みんな一様に引きつった顔をしており、逃げることに精一杯で僕らの姿など目に入っていないようだった。

――……逃げる？ なにから？

自分で感じたことに疑問を持ち、僕は一度自転車をこぐ足をとめ、道路の先に目を凝らす。眼

鏡の奥から見据えた先には、すっかり見慣れてしまった光が見えた。

「あっ……!？」

指を差した僕を見て、朝純ちゃんもブレーキを握りしめる。

「――EOM!? まさか、取り憑かれた人が暴れてるのっ？」

その問いに答えるように、朝純ちゃんのポケットから『月光』の曲が鳴り出した。

しめじさんからだろうと予想した僕は、もう一度ペダルを強く踏みこむ。

「僕、先に行くよ！」

それはもちろん、彼が無事なのか気になったからだ。せっかく会いにきたこのタイミングで、EOMに狙われるなんてついてない。

「あっ、おい！ 待てよ優っ」

後ろから純夜もついてきたけど、待つ余裕はまるでなかった。

埠頭が近づいてくると、海の匂いや波の音も強くなってくる。でも今は、それ以上に悲鳴や叫び声でいっぱいだった。海のほうから逃げ出してくる人も、どんどん増えている。

――なにがどうなってるんだ!？」

船や荷物をしまいこむための大きな倉庫の隙間を抜けて、ひらけた場所に出た。

その瞬間、僕の目に飛びこんできたのは、光り輝く身体で仁王立ちをしている少年。左手には、血で濡れた金属バットを持っていた。

キキッと甲高い音を立ててとまった自転車に、向こうも気づいてこちらを向く。どこか人を惹きつける魅力のある、強い力を持った三白眼に、僕は見覚えがあった。

「篤くん……？」

背はだいぶ伸びているようだったが、顔立ちにはまだ懐かしいあどけなさが残っている。

――よりによって、話しかけた相手がEOMに取り憑かれているなんて……！

EOMに取り憑かれた人は、回復後そのときのことをほとんど憶えていない。それはしめじさんも言っていたことだし、香月くんの身に実際起こったことでもあった。つまり、この状態の彼と話をしても、あまり意味がないということになる。

――それより早く正気に戻してやらないと、とんでもないことをしでかしそうだ！

すでに周囲には、倒れて動かない人たちや壊れた（壊された？）バイクが転がっていた。彼の仲間かもしれないけど、EOMのせいで正気を保てなくなって殴ってしまったんだろう。

――さあ、どうする？

いつもの僕なら、相手に姿を見せずに物陰から狙撃を狙うところだ。でも今日は、最初に姿を見られてしまった以上、建物の陰に入りこんだところで他のEOMが追ってくるに違いない。

とりあえず自転車からは降り、すぐに動き出せるよう体勢を整えていると――

「……すぐ、る……？」

明らかな殺意が見える瞳とは裏腹に、彼の口から小さく漏れたものがあった。

「篤くん!? 僕がわかるのっ？」

驚いて声をかけると、彼はおぼつかない足取りで一步一步近づいてくる。

「たすけ、て、くれ……から、だが……いうこ、と、きかな……」

「待ってて、今——」

そばに行こうとしたら、純夜に強く肩を掴まれた。振り返ると、頭ごなしに怒られる。

「馬鹿！ あぶねーだろうがっ。いつもどおりおまえは離れて見てな！」

「で、でも……っ」

「そうだよ優くん！ あいつら、優くんを狙ってああいうこと言わせてるのかも。近づいたら危ないって！」

後ろから追いついてきた朝純ちゃんも、純夜の味方をした。

——ああ……。

『知らないはず』のふたりに、言われてから気づく。

朝純ちゃんはきっと、夜に月台埠頭に向かうことを、『しめじさん』に伝えていただろう。そしてその理由も。だとしたら、それを『しめじさんのなかの悪月の子』が利用したとしても、なんらおかしいことではないんだ。満月を明日に控えた今、悪月の子の力も強まっているのかもしれない。

ただ——

——本当に、それだけ？

僕には今の彼の様子が、僕のことを気にかけているようだったという彼の母親の言葉を、なによりも証明しているもののように思えて——胸が痛かった。

不意にガラんと、なにかが地面に転がる音がする。

三人揃ってそちらに目を向けると、彼は両手で頭を抑えてもがき苦しんでいた。

「うう……あああああ……やめろ……やめてくれ……っ！」

「篤くん！」

「ほん、とは……だれも、きずつきたく、なんか……」

身体のなかに入りこんでいる光の強さが増し、彼の表情を見えにくくする。

そのとき僕は、とっさに純夜の手を振りほどき、彼に向かって走り出した。怖さよりも、彼を——篤くんを助けたい想いが勝っていた。助ける手段もないくせに。

でも——それは、やっぱり罠だったのかもしれない。

「優くん、危ない……！」

驚いたことに、彼の身体に巣くっていた光は、自らその身を離れ僕に近づいてきたんだ。

——えっ!?

逃げようと急いで身体の向きを変えたけど、間にあうはずもない。光——クラゲのほうに圧倒的に僕よりも足が速かった。浮遊しているんだからあたりまえだ。

——ぶつかる……！

「しゃがんでっ!!」

衝撃を覚悟したと同時に、耳に飛びこんできた朝純ちゃんの声に従った。すると僕の背中の上へ、なにかが覆いかぶさってくる感触。

「あああああああ——っ!!」

次の瞬間、耳もとで聞こえたのは朝純ちゃんの悲鳴——絶叫といっても間違いではないだろう

。

——な、なに!?

耳がキンとして、一瞬なにも考えられなかった。自然と耳にあてた手を、誰かに強く掴まれる

。

「あ、純夜……」

「来い優っ」

純夜はその手を強引に引っ張ると、僕を立たせようとした。

「ちょ、待ってよ！ 朝純ちゃんが——」

「いいから早く！」

有無を言わず、純夜は持ち前の怪力で僕を朝純ちゃんの下から引っ張り出した。そしてそのまま手を引いて、一目散に離れてゆく。

「純夜!？」

朝純ちゃんを置いていくのだろうか、引っ張られるままに走りながら振り返ったら——

——え……？

僕に覆いかぶさっていた不自然な体勢のまま、とまっている朝純ちゃんの姿が見えた。しかもその体内には、光るEOMも見えている。そして、その奥には地面に倒れこんでいる篤くんが。そちらからは、EOMの光は消えているようだった。

「純夜……もしかして朝純ちゃんを取り憑かれたの!？」

顔を戻して背中に問いかけると、建物の陰に入りこんだ純夜はやっとその足をとめた。

「そうだった。それで厄介だから、一回離れたんだ。朝純の強さは俺がよく知ってるからな」

意外にも落ちついた様子で答えた純夜は、すぐにケータイを手に取る。しめじさんに連絡をするつもりだろう。

いくら僕でも、それを制止することはできない。そんなことをしたら不自然極まりないし、なによりしめじさん本人が出てくれれば、それによって助かる可能性もまだあるからだ。

——本当に厄介だな！

頭のなかでは文句を言いながらも、今その状況をさらに厄介にしているのは、間違いなく僕自身。

狙われたのは、やっぱり僕だった。

数日前にも足どめされたけど、今度は本格的に倒そうとしたのかもしれない。なにしろ、このところずっとEOMにとどめを刺していたのは僕なんだ。もちろんそれはふたりの頑張りがあったのことだけど、悪月の子にとっては面白くなかったんだろう。

「朝純ちゃん……っ」

僕のせいでEOMに取り憑かれてしまった。本来なら、EOMと戦う力があり、強い意思を持っている朝純ちゃんに取り憑かれるはずはないんだ。それなのに、とっさに僕を庇ったことで不意を打たれてしまったから。僕がもう少し気をつけていれば、こんなことには——。

「——おい優。おまえ、自分のせいだなんて思ってね——よな？」

いつの間に電話を終えたのか、純夜にかけられた声で我に返る。

「そ、それは……っ」

否定したかったけど、純夜の強い瞳がそれを許さなかった。

「あいつが庇いたくて庇ったんだから、おまえのせいであるはずがねーだろ！ そんな馬鹿なこと考えてる暇があったら、俺の作戦を聞け！」

純夜が僕の首に自分の腕をまわして、ぐっと顔を近づけてくる。

「あ……」

その腕は、少し震えていた。

それに気づいた僕は、やっと落ちついてくる。

——そうだ、純夜だって本当は怖いんだ。

我慢しているのは僕だけじゃない。

ぎゅっと両手を握りしめて、全身の震えを力でねじ伏せる。

純夜の目を見てこくりと頷いたら、純夜は続きを話しはじめた。

「朝純はもともとEOMの力を持ってるやつだから、多分俺らの位置はばればれだ。隙を見て狙撃をすることは、まず無理だろう。しめじの野郎もそれを心配してた」

「じゃあ、どうすれば……？」

「俺が確実に動きをとめてやる。だからおまえ、俺の身体ごとでもいいからあいつを貫け」

「な——」

「ためらうなよ？ ためらったら、おまえの負けだ」

「で、でも……っ」

これまでずっと、ふたりの身体にはあたらないように光の弾を撃ちつづけてきた僕。ふたりが怪我を治せることはわかっているけど、僕自身が傷つけるのは嫌だった。

せっかくおさまっていた震えが、再び僕を襲い出す。

純夜はすぐそれに気づいたのか、僕を引き寄せていた腕に力をこめた。

「——安心しろ、万一俺がどーにかなっても、しめじがすぐに仲間をよこしてくれるはずだ」

「あ……っ」

珍しく嫌味のない無邪気な笑顔を見せた純夜に、僕は言えなかった。

——そんな曖昧な可能性に、誰の命も賭けたくはないよ！

この事態を仕組んだのが悪月の子なら、今しめじさんが自分の意識を保っている保証はどこにもないんだ。さっき純夜が口にした『心配』だって、一体どちらの言葉なのか——。

しかし僕が口を噤んでいるあいだに、純夜は腕を離してそのまま建物の陰から出ていってしまった。

「純夜……！」

すぐに追いかけて、角から顔を出す。

もう立ちあがっている朝純ちゃんのもとへ、まっすぐに向かっていく純夜の背中が見えた。

どうやって動きをとめるつもりだろう。ふたりの力は同じくらいで、純夜でも相当難しいはずだ。本当は、僕もそっちに協力しなければならないんだ。二対一ならなんとかかなるかもしれない。

しかし純夜は、それを望まなかった。

「ふたりが傷つくのは嫌だ」と告げた僕の言葉を、尊重してくれているゆえなんだろうか。

――でも今は、キレイゴトを言っている場合じゃない！

ひとり取り残され、吹っ切れた僕も陰から飛び出してゆく。

ちょうどそのとき――朝純ちゃんの腕が、純夜の胸を貫いたのが見えた。

「……っ!？」

驚きすぎて、声も出ない。それでもなんとか近寄っていくと、ふたりともかなりの力を入れているのか、目で見てわかるほどぶるぶると震えていた。

純夜は朝純ちゃんの右腕の根もとを抑えて、腕を外されないようにこらえている。

逆に朝純ちゃんは、腕を引き抜こうと躍起になっているようだ。

あるいは、お互いを想う心が痛くて、身を震わせているのかもしれない。

「優っ、早くしろ……！ あんまり持たな――くっ」

言葉の途中で、呻く純夜。今無防備な状態にある純夜の周囲には、浮遊するEOMたちが集まってきていて、このままでは純夜も取り憑かれてしまう可能性があった。

――僕が、やらなきゃ……！

こちらに近づいてくるEOMを、初めて自分の右腕で攻撃しながら、僕は考える。

――想像しろ！ 誰も傷つけない武器をっ。

僕に力の使いかたを教えてくれたしめじさんは、想像しだいでどんな形にもなると言っていた。ふたりのことを誰よりも大切に想っているしめじさんは――あのとき、きっとそれを伝えたくなかった悪月の子の意思を完全に封じこめてまで、僕に教えてくれたんだ。この右腕を、今活かさなくていつ活かす？

地面に片膝をついて、体勢を整えた。

――さあ、思い出せ！

僕の攻撃が相手を貫いてしまうのは、形づくっているものが拳銃であり、また、光の弾がとても小さいからだ。

この地上をいつも優しく包んでくれている月の光なら、誰も傷つけたりはしない。

それくらい雄大な光なら。

じゃあ、それを再現するために必要なものは？

ふたりを照らすのに、相応しいものは――

――これだ！

右腕が、僕の意思を感じて変化を始める。普段と違い、手首から先だけではなく腕ごと。

やがてそこに生まれたのは、巨大な傘のついたフラッシュ・ライトだった。

――全部一気に片づける!!

これ以上誰も、傷つかなくて済むように。

「朝純ちゃんのなかから出ていけ……！」

僕の叫びを合図に、目を開けていられないほどまぶしい光が辺りを照らした。

(一)

しめじさんが埠頭に到着したとき、起きている人はひとりもいなかったという。

全員、月鳳院家の息のかかった病院に搬送され、意識を取り戻した順に帰されていったそうだ。

でも、僕が目を覚ましたとき、先に帰らず待っていてくれた人がいた。

「……よお」

ベッドの上で目を開き、まだぼんやりとしていた僕に、かかる声。

その声が懐かしいものだったから、慌てて飛び起きる。

「篤くん!？」

「ハッ、懐かしいな、その呼び名」

小さく笑った篤くんの表情がよく見えないのは、僕が眼鏡をしていないからだ。

キョロリと辺りを見まわすと、周囲の白さからここが病院の一室であることを悟る。

——『しめじさん』が運んでくれたのかな？

僕がそんなことを考えているうちに、篤くんがどこからか眼鏡を取ってくれた。

「ほら。相変わらず目え悪いんだな、おまえ」

「あ、ありがとう」

「まだ『コンタクトは怖いから嫌だ』とか、言ってんのか？」

「む、昔のこと掘り返さないでよっ」

僕が赤くなって反論すると、篤くんが真顔に戻った瞬間がはっきりと見えた。

——あ……。

よけいなことを言ってしまったかもしれない。

フォローの言葉を探しはじめた僕の耳に、篤くんの控えめな声音が届く。

「……そうだな。こうして今さら会ったって、どうなるわけでもないんだ。ただ、昨日の夜、なんとなくおまえに会ったような気がして……」

自分でも戸惑っているんだろう、篤くんは僕から視線を外して続けた。

「記憶が飛んでんだ。気づいたらこの病院にいて、やたら汚れが目立ちそうなスーツ着た派手な頭のやつに、おまえと会ってけって言われた。それでやっぱり、おれは昨日おまえと会ったのかって納得しちまって……って、なに言ってんだろうな、おれ」

「別におかしなことは言ってないよ。僕が昨日、篤くんに会うために埠頭に行ったのは、本当のことだから」

「えっ？ そうなのか？ ——いや、確かにおまえがあんな場所にいるのは変だもんな。どうせうちのババアがおまえになにか言ったんだろ」

半分呆れ顔を浮かべた篤くんに、僕はきっぱりと言ってやった。

「違うよ。場所を訊いたのは確かだけど、会いに行ったのは僕の意味だから」

篤くんが目を丸くする。

でもそれはきっと、驚いたのではなくて、昔を思い出したからだ。

「――あのときもおまえは、『自分の意思だ』って言っておれのせいにならなかったな。変わってなくて安心した」

しんみりと告げた篤くんは、座っていたパイプ椅子から立ちあがる。

「もう行くのっ？」

「ああ……ケーサツに行かなきゃならないからな」

「えっ？」

「記憶はないが、俺が暴れて仲間に怪我させたのは事実らしい。目撃者がかなりいるんだ」

「あ……」

確かにそうなんだ。僕らが駆けつけたときにはすでに、倒れている人が何人もいた。たとえそれがEOMのせいだとしても、篤くんが裁かれることに異を唱えることはできない。

原因が、目に見えないから。

言葉にしたって、信じてもらえないことはある。

見えないものを、想いを、信じてもらうのは難しい。

でも――だからこそ、口に出して伝えなければならないこともあるんだ。

「篤くん！ 戻ってきたら、僕と友だちになってよ」

向けられた背中に、投げかけた。ずっと胸につかえていた言葉。

あの頃の僕らは、決して『友だち』ではなかった。

未来で、それを証明してみたいと思う。

僕の気持ちはちゃんと届いたのか、篤くんは一瞬だけ足をとめて、

「――ああ、よろしくな。そのときにはきっと、おまえに謝ろう」

こちらを見ないままそう告げると、部屋を出ていった。

入れ替わりに、しめじさんが入ってくる。その表情は、篤くんと同じくらい硬かった。

――えっ？

どくりと、心臓が大きく脈打つ。

僕らを助けてくれたところまでは完全に『しめじさん』だったようだけど、今になって『悪月の子』が顔を出したんだろうか？ それともふたりになにかが……？

どちらにしても嫌な予感しかなくて、一瞬だけ浮かれた僕の心は急速にしぼみ出した。

「やぁ優くん。身体のほうは大丈夫ですか？」

さいわい、表情は暗いものの明るい喋り口は確かにしめじさんのものだったから、少しだけ安心して答える。

「ぼ、僕は平気みたいです。痛いところは、昨日撃たれたところくらいしかないですし……それより、ふたりはっ!？」

しかし、尋ねたとたんにしめじさんの表情がますます曇った。

――ま、まさか、やっぱりふたりになにか!？」

『死』という最悪の事態が脳裏を過ぎる。自分でも、急速に血の気が引いていくのを感じた。

そんなふうになっ青になった僕を見て、しめじさんは慌てて身体の前で両手を振る。

「あっ、命に別状はありませんよ？ ですが、その――」

珍しく歯切れの悪いしめじさんは、やがて意を決したように僕の両肩に手を置いた。
「――不死身の力が、消えてしまったようなのです」
「え……？」

(二)

朝純ちゃんが目を覚ますまでに三日間、純夜が目を覚ますまでに二週間もかかった。

不死身のカーーいや、想像を具現化する力を失ったふたりは、人並みの回復力に戻ったせいなのか、これまでのツケがまわってきたようだ。

純夜に至っては、朝純ちゃんに貫かれたときにできた傷が、中途半端にしか治っていなくて、その後一ヶ月の入院を余儀なくされた。もっとも、それでも普通に比べたら短い期間であるらしいけど。

——やっぱり、僕のせいなのかな。

誰にも痛みを与えずに助けたくて、あのときとっさに生み出したフラッシュ・ライトは、そこにいたすべてのものを照らした。おかげでEOMたちを一掃することはできたけど、同時にふたりの力まで消してしまったようなんだ。

「もともと『同じ力』なのでですから、仕方ありませんよ」

しめじさんはそう言ってくれたけど——隣を歩く朝純ちゃんの横顔を見ると、やっぱり自分を責めずにはいられなくなる。

今ちょうど、ふたりで純夜のお見舞いに向かっているところだった。

ちらちらと顔色を窺っていたことがばれたのか、不意に朝純ちゃんと目が合う。

「ねえ優くん。両親の離婚問題はうまく片づいたんでしょ？　なんでそんなに暗い顔してるの？」

朝純ちゃんの言葉は、いつでもまっすぐだ。僕が言葉に詰まると、すぐに続けてくる。

「もしかして、わたしたちの力がなくなったのは自分のせいだなんて、思っていないよね？　優くんはわたしたちを助けるために頑張ってくれたんだもの、優くんのせいなわけないよ！」

「あ……」

その言葉は、朝純ちゃんがEOMに取り憑かれたとき、純夜が言ったものとよく似ていた。

僕は思わず吹き出す。

「やっぱり双子なんだね。ふたりとも、言うことがそっくりだ」

「なによー。慰めてるのに、感じ悪い笑いかたね！」

「ご、ごめん」

恐縮して素直に謝ると、今度は朝純ちゃんのほうがプツと笑い出す。そして、

「あのね優くん。わたしと純夜が似てると思うなら、わたしが思うことを純夜も思ってるって、信じてよ」

そう前置きしてから、笑顔を見せた。

「わたし、これでよかったと思ってる。ほんとだよ！　満月の夜に捨てられて、それからずっとふわふわしてた感じだったんだけど、力を失くしたことでやっと拾ってもらえた気がするの。やっと、優くんが言ってたみたいに、自分自身を大切にできそう。それって全然、悪いことじゃないよね？」

真昼でも太陽にケンカを売って輝く、月のようだと思う。

その瞳に、笑顔に、ひとつの偽りもないことは、痛いくらいに伝わってきた。

ざわめき出す、心臓。

負けじと太陽になろうとする、僕。

朝純ちゃんはそれに気づいたのか、からかうように僕の右腕に自分の左腕を絡めてくる。

「ねえねえ、お見舞いなににしょっか？ 純夜が好きなアニメの本でも持ってくる？」

「ああああのっ、純夜が好きなアニメってなんだっけ？」

熱くなった顔を覚ますために、あえてオタクな話題に持っていった。

それは、ある意味においては正解で、ある意味においては間違いだったかもしれない。

「ええとね、確か『バラユリ』って略すやつ。正式名称は長くて覚えられないんだよねー」

「え!? 純夜が好きなものってバラユリだったの？ 僕、漫画のほうはかなり好きなんだよ。自分のなかのイメージが崩れるのが嫌で、アニメは見てないんだけど」

「へえ！ 気が合うじゃない。純夜がトイレに貼ってるのも、そのアニメのキャラだよ」

「……もしかして、ユリスちゃん？」

「そうそう、そんな名前の美少女キャラ。武器がムチなんて狙いすぎよね」

「……………」

僕が自分の部屋に貼っているのも、同じキャラのポスターだった。美少女に見えるけど実は『少女』と呼べる歳ではないなんて、言えない。絶対言えない。

「ああ、でもよかったな。わたしじゃ話についていけないから、優くんつきあってやってよ。あいつ、かなり退屈してるみたいだし」

「で、でも、原作派とアニメ派って、結構意見が分かれるところあるんだ。些細なことでこの前みたいにケンカになったりしたら、僕困るよ……」

中高と、教室内で空気になるように努めていた僕だけど、だからといってクラスメイトたちの話をまったく聞いていないということはなかった。むしろ、退屈しなくて済むように耳を澄ませていたくらいだ。だから、自分の好きな漫画がアニメ化されたとき、周りのみんながどんな反応をしていたのか、大体わかっていたんだ。

すると朝純ちゃんは、真面目に応えた僕がおかしかったのか、「あははっ」と大きな声をあげて笑った。

「それならそれでいいんじゃない？ わたしはいい傾向だと思うけどなあ。素直にケンカもできない友だちなんて、友だちなんかじゃないよ、きっと」

——ああ……。

純夜としめじさんのような関係になってほしいと、言っていた朝純ちゃんを思い出す。

——そっか、ぶつかることを恐れていたら駄目なんだ。

ぶつかって、それを乗り越えてこそ、絆は強くなってゆくんだろう。ぶつかる内容はともかく

。そんなわけで、純夜とやりあう覚悟をして病室に向かった僕。

しかし、残念ながら先客がいたので、そうはならなかった。

「あ、当主さまだ～。お見舞いの品はなんですか？ フルーツだったら食べたいな！」

「おい朝純っ、見舞いに来て第一声がそれなのかよ……」

苦笑を浮かべたしめじさんの横から、純夜が思いきり呆れた声を出す。

――しめじさん……。

あれからいろいろ考えて、僕もやっとかまえずに会えるようになった。それは僕が、『目の前にいる相手は、しめじさん本人なのか？』ではなく、『その意見や命令は、ふたりや僕に害をなすものなのか？』を考えればいいんだと、気づけたからだ。

あのとき善月の子が言っていたのは、きっとそういうことなんだと思う。

一部の物品は買ってもらったけど、普段の活動で報酬を得ていない僕は、他の人たちと違ってしめじさんに意見を言いやすい部分がある。だから、もし悪月の子が無茶な命令をしてきたとしても、それこそ堂々とやりあえばいいんだ。

――問題は、僕の勇気！

しめじさんではない。

そう考えたら、だいぶ楽になった。

もっと強くなろうと、思えた――。

僕がぎゅっと手を握りしめた隣で、朝純ちゃんが不満そうに唇をとがらせた。

「あらいいじゃない。お見舞いの楽しみって言ったら、それでしょ？」

「すみませんが朝純、その『楽しみ』は話のあとにしてくれませんか？」

しめじさんはそう遮ると、朝純ちゃんの後ろにいた僕に視線を振ってくる。

「ちょうど、今後の話をしていたのです。ふたりともこちらに座って」

僕と朝純ちゃんは一度顔を見あわせたあと、おとなしくベッド脇のパイプ椅子に座った。

――そっか、ふたりはもうEOMを倒すことができないから……。

複雑な想いを胸に、ベッドの上の純夜を見やる。

しかし、妙に明るい表情の純夜は、顔色もよく元気があり余っているようだった。それを示すかのように、こぶしを握りしめ大きな声で宣言する。

「優！ これからは、おまえが俺らのサポートをするんじゃなくて、俺らがおまえのサポートをするからな!!」

「……えっ？」

てっきりふたりは足を洗うと思っていたのに、どうやら違うらしい。

「わたしたち、不死身ではなくなったけど、EOMを見る力は残ってるみたいなの」

横から朝純ちゃんが補足してくれる。

「ほら、優くんが言ってたみたいに、なるべく怪我をしないように立ちまわれれば、わたしたちでも手伝えるから！」

「そ、それはそうだろうけど……」

逆にいえば、ふたりの安全が僕の右腕にのしかかることになる。僕が不甲斐なくても、ふたりになんとかしてもらえたこれまでとは全然違うんだ。

――もっと強くなろうって、決意した矢先にこれ!?

とたんに身を固くしてしまった僕に、純夜が腕を伸ばしてくる。まるで、取り憑かれた朝純ち

やんの動きをとめにしたあのときみたいに、ぐいと顔を寄せてきた。

「仕方ねーな。先輩の俺さまがおまえに、EOMが怖くなくなるとっておきの『純夜★スペシャル』を教えてやろう」

「え？ な、なに？」

純粹に気になった——本当ならぜひ知りたかった僕は、その話に飛びつく。

純夜はわざとらしく声をひそめて、続けた。

「いいか？ EOMを逆から読んでみる」

「……えむ・おー・いー？」

「違う！ ローマ字読みでっ」

「……………あ！」

MOE。

間違いなく、『萌え』である。

——純夜が『猫耳の美少女に見える』とか言っていたのは、そのせいもあるのか!?

なにかに開眼したような気がした。

と同時に、あまりの馬鹿馬鹿しさに恐怖はだいぶ薄らいでいて——

「——どのみち僕だけじゃ、うまく倒すことはできないと思う。だから、ふたりがいてくれるのは本当に心強いんだ。いっぱい迷惑をかけてしまうと思うけど、これからもよろしく！」

自分から、ふたりにそれぞれ手を差し出す。

すると、無邪気に笑いながら顔を見あわせたふたりは、ためらいなく僕の手を取ってくれた。

「仕方ねーな。バリバリ鍛えてやるよっ」

「こちらこそ、よろしくね！」

変わってしまった右手と、変わらない左手。

そこに、等しく優しいぬくもりを感じながら僕は——

——よし、とりあえずコンタクトレンズを買いにいこう！

そう心に決めた。

(了)